
黒い俺と白い彼女 ～ココロノシキサイ～

佐遊樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い俺と白い彼女 ～ココロノシキサイ～

【Nコード】

N3046I

【作者名】

佐遊樹

【あらすじ】

《祝 60000PVアクセス・80000ユニークアクセス突破！》岡崎悟は暗殺者。彼を囲むは、幼馴染の仕事仲間や、学校のお嬢様生徒副会長に居候の妹分。端から見れば羨ましい限りの高校生。しかし彼には、避けられない戦いが待ち受けていた。現代暗殺者高校生、ただいま巨大組織と戦闘中！ コメディシリアスガンアクション、いざ開幕！

0・白との遭遇（前書き）

この小説は、主人公を中心として暗殺者やその標的が織り成すアクション場面、主人公やヒロイン、クラスメイトなどが織り成す日常ラブコメ場面があります。両者ともに温度差が激しいので違和感を感じるかもしれませんがご了承ください。

0・白との遭遇

彼女を初めて見た時、心臓が止まるかと思った。

こう言つとなんか、一目惚れしたみたいだがそんなんじゃない。断じて違うぞ。

その短いブロンドの髪は、なびく度に華麗な煌きを辺りに振りまき、その度に俺の周囲は歓声を上げた。

その大きくて黒い瞳は、瞬きをする度に儂い幻を描き、その度に俺の周囲は太陽のような明るさを灯した。

その細い体つきは、動く度に残像のような輝きを見せ、その度に俺の頭は「何かおかしい」と叫んでいた。

そうだ。ありえない。彼女みたいな人間がここに来るなんて、あってはいけない。こんな薄暗い、地下の秘密アジトなんかにはいけな

いけない。

それなのに。

彼女は、確かに、そこに存在していた。

真っ黒に染まった俺とは対照的に、真っ白な表情で。俺と彼女の間にある、絶対的な、越えられない壁。拭えない違和感。捨てられない敵意。

なんだよ、こいつは。

「紹介しよう。今日から俺たちのサポーターになった娘だ」

リーダー格であった男は彼女の肩に手を置き、彼女の発言を促す。彼女は躊躇いがちに、けれどはつきりと告げた。

「今日から皆さんと共に悪を狩ることになりました、ありみやかりの有宮狩野とい
います。至らない点は多数あると思いますが、よろしくお願いしま
す」

その言葉に、俺の周囲から笑顔がこぼれた。

『ははは、まだ13なのにちゃんと敬語が使えるのか』

『俺達は一生使えねえだろ』

『使う機会もないしな』

彼女という存在は、俺達の何かを変えている。本質まで捻じ曲げたりはしないけど、そこにいつもの禍々く薄暗い一同の顔はなかつた。

「お前ら、いくら可愛いコだからって襲うなよ」

俺もその空気に身を任せ、軽めの冗談を言ってみる。結果、爆笑。

『ぶわっはははは！ そんな事しねえって！』

『というか同年代のお前のほうがしたいのでは？』

『確かにな！ 我らがエース殿も13だったろ』

いつの間にか冗談の矛先は俺になっていた。まあ、俺がこのコを襲うなんて世界が滅亡するよりありえないけど。

「あ……。貴方、ひよつとして、岡崎悟おがさきさとむさん!？」

彼女は驚いたように俺の顔を見る。まさか知られていたとは。ちよつと恥ずかしい。

「えつと……。まあ、このチームの戦闘班主任を務めさせてもらってます、岡崎悟です」

頬を人差し指で掻きながら自己紹介。ああ、やっぱりなんかむずがゆい。

「よろしくお願ひします！ あたしと同年なのに、『鮮血の狂戦士』なんて呼ばれてて、すごい人だなんて尊敬してます!」

『鮮血の狂戦士』？ なんだソレ？

「ああ、俺が適当に名づけて噂流しといた。13歳で任務の成功率は100%だって。他のチームへの威嚇目的でな」

「アンタかあああああああああ!?!」

心の叫びと共に、俺は右膝に力を溜めて一気に跳躍する。そのまま一回転しつつ、勢いを殺さないよう狙いをつけ

「く、空中回転し蹴り!？」

有宮の驚いたような声が聞こえる。けれど

「だあっ!？」

寸分の狂いもなくリーダーの首筋に叩き込まれるはずだった右足は、空を切っただけだった。それだけじゃない。リーダーはしゃがんで蹴りをやり過ぎすと、そのまま、立ち上がり様に俺のあごへ綺麗なアッパーカットを

「ぶがつ!？」

凄まじい衝撃に、まぶたの裏がチカチカする。地面に叩きつけられ、反動で少し床から浮いたが、また落ちた。

「お、岡崎さん!？ 大丈夫ですか!？」

「大丈夫だ。こいつはこのくらいじゃ死なない」

死ななきゃいってモンじゃないだろ。

「いってえな。リーダー、ちょっとぐらいは手加減してくれよ」

上体だけ起こしながら、俺はあごをさする。痛い。

「そつちは本気なんだ。こつちも本気で相手しなければ失礼というものだろう」

時々、リーダーはこんな感じにへんな哲学を語ることがある。皆

聞き流しているが。

「それに、かつこいいじゃないか、『鮮血の狂戦士』なんて」

俺は有宮に視線を送る。彼女も同感なのか、コクコクと頷いていた。

けれど。

「……別にそんなの、いらねえ」

「ひょっとしてお前、ツンデレか？」

リーダーは苦笑しながら言う。それもそうだ。俺も人間の端くれなのだから、人なら誰だって上を目指したがるだろう。

だけど。

「俺は……人殺しだ」

その言葉に、皆表情が変わった。

そう。俺達は殺し屋、ヒットマン、暗殺者、アサシン。己の手を他人の血に染めた、許されざる者。

「俺は、他人のためにこんなことしてるわけじゃない。同情も愛情ももらえない。狂っているといわれても言い。仲間を失い、たった独りになってもいい。俺は、俺が生きるために、生き残るために他人を殺す」

その言葉は、地下の薄暗い部屋に響き渡った。

真っ直ぐに。

馬鹿みたいに、真っ直ぐに。

「はぁ……はぁ……」

肩で息をしながら、砕けたレンガの上を駆け抜ける。

手にしたライフルは、夜の闇に紛れて逃げてしまいそうだった。

「くそっ……！」

後ろから聞こえる足音に、俺の背筋が張り詰めた。いやな汗が体中から噴き出る。

全てが、想定外だった。

本来の任務は、ある化学兵器の研究所を破壊するというもの。そして、有宮の初陣。

敵兵の数も、強さも、装備も、桁違い。

完全に想定外なそれらに、俺達は同じ言葉を口にした。

『ハメられた』

依頼者が他のチームと繋がっていたのだろう、俺達が研究所を襲

撃するというのはすでにバれていた。

各自、手持ち火器をある程度装備して散開、生き残った者はアジトへ向かわず、そのまま各自で新たな生活を始める。

そんな指令を下され、俺達は逃亡を開始した。

追っ手の数は約50。こちらは15人。

最新鋭のライフルに防弾ジャケット、赤外線ゴーグルを装備したあちらに対して、俺達は一般的なライフルと赤外線ゴーグル、防弾ジャケットなんて装備していない。

追う側と追われる側。

月夜の中、熾烈な逃走劇が幕を開けていた。

タタン、と一定のリズムを刻むかのように、発砲音が響く。

それと同時に闇の中から、無数の銃弾が飛来した。そのうち一発が、俺の右頬を切り裂いた。赤外線スコープのせいで、首が動かしづらいしいつにも比べ動きも鈍い。

「邪魔だっ!!」

俺は赤外線スコープを外し、肉眼で敵影を確認する。

数は……10、いや20か？

なんにしても、俺がマークされてるのは確実だった。

これでいい。他の皆から敵を遠ざけられれば！

「俺はここだっ！ 撃ちたいなら撃てよ！」

思いつきり叫べば、相手はこちらにライフルを構えた。

俺も手にした、少し旧式のアサルトライフルで狙いをつける。

タタン、タタン！

瞬間、「きゃあっ」という少女の悲鳴。あの声は

「有宮か!?!」

俺は慌ててライフルを降ろし、声がしたほうに走り出す。研究所付近は廃墟や樹木が広がっているため、障害物は案外多い。しかし、それは盾にもなるしただの邪魔物にもなる

「うわっと!?!」

レンガの破片につまづき、俺は地面に倒れこんだ。ライフルが手を離れ、手から数メートル離れた地点に落下する。

やばいっ!!

後ろから迫る追っ手たちはもう、俺に照準を合わせているだろう。

俺が地面を這いずるように銃に手を伸ばした時

俺の視界から、ライフルが消えた。

「なっ!？」

思わず上を見上げた瞬間、あたりに響く発砲音。そして俺の眼前に、空の薬莢が落ちる。

男の悲鳴と同時に、何かが倒れる音が遠くに聞こえた。

あれだけ真っ白だった少女が、今

俺の視線の先には、ライフルを構えた有宮の姿があった。

研究所から遠く離れた海岸。

悲鳴を上げた時、右肩を撃たれたらしく、有宮は俺の膝を枕にしてぐっすり眠っていた。

止血はもうしたし、死んだりはしないだろう。大丈夫だ、絶対に。

俺は黙って、水平線を見つめていた。

これからどうやって生きていく？

一人で生きていくのか？

そして、有宮はどうなるんだ？

正直言って、俺にはもうこの殺し屋稼業しか残されていない。し

かし、有宮はどうなる？

「んっ……」

「お、ようやくお目覚めか」

視線を落とすと、有宮がゆっくりと目を開いていた。

「あ……おかざ」

「悟でいいよ」

彼女が俺の名を呼ぶ前に、素早く口を挟む。

「うん……悟、ここはどこ？ 皆は？」

俺は、なんて答えればいい？ 皆を見捨てて、二人だけでここまで来たって言うのか？

「きつと……生きてるよね？」

彼女は純粹な、真っ白な笑顔で尋ねてくる。

「ああ、きつとまた、会えるさ」

俺も笑顔で返す。ただし、真っ黒に染まった笑顔で。

白と黒。それらは決して交わらない色かもしれない。

「なあ、狩野」

「え……?」

突然下の名前で驚いているのかもしれない。けれど、もっと驚くんだろっとな、俺の言葉を聞いたら。

「俺と一緒に、生きてくれないか?」

彼女は顔を真っ赤にした。俺はすこし嘆息し、呟く。

「やっぱり、無理か……」

その呟きは彼女の耳に届いたらしい。

「っ！ 全然！ むしろ大歓迎って、あ……」

自分の発言を反芻し、勝手に赤くなる狩野。

俺は少し笑って、水平線に視線を戻した。狩野もつられて、俺と同じ方向に視線を向ける。

「綺麗……ね」

そう彼女が呟くほど、そこには美しい日の出があった。

それはまるで、闇に差す一縷の光のようだった。

白と黒。それらは決して交わらない色かもしれない。

けれど、ね。

交わらなくてもいいから。

傍にいたいことくらい、望んでもいいはずだろ？

1・白黒の日常

「起きなさあああああああい！！」

耳元で突如発生する爆音。いや、轟音か。

俺の一日は、こいつの怒鳴り声から始まる。ああ、春眠暁を覚えずって言葉が身に染みるぜ。……もう5月。ほとんど夏じゃねえかチクショウ！

って、こんな余裕で解説してる場合じゃねえ！

「喰らうかつ！」

俺は布団を跳ね除け、ベッドから転がり落ちる。そこまで広くない俺の部屋は、寝転ぶとなんだかラズベリーの香りがした。ああ、そつえば昨日か一昨日、こいつが買ってきてたっけ。

なんて俺が考えてる間に、ベッドの方から「ボスッ」とかいう凶悪な音が。

「……………えつと、狩野様？」

彼女 ありみよかりの 有宮狩野は、怒りかなんか知らんが体がプルプル震えていた。

「お前さ、今なんか枕にエルボーみたいなものを……………」

「違う。あたしがしようとしたのは肘鉄だ」

エルボーと肘鉄って同じじゃねえか？ 俺がそう口にする前に、
彼女はこちらを振り向いた。

ああ、本当に美人だ。髪はロングヘヤーに伸ばし、ブロンド色は
健在。大きな瞳も面影を残してるし、何よりスタイルが良くなった
よなあ。健全な青少年としては、こんな美少女と同居してるなんて
夢みたいだ。いや、ホント美人だ。……額に青筋が浮かんでなけれ
ば。

「あんだ、またそんなニヤニヤして。どうせまたへんなことでも考
えてたんだろ？」

うつ、凶星。

というか狩野は最近、『後輩&妹ミックスで守ってあげたい系』
から『腐れ縁だけど気にかけてくれる、素直になれないツンデレ』
に属性変換しつつあると思う。

「ほら、さっさと朝ごはん食べるよ。冷めちゃうから」

「いや、昨日のうちに俺が全部作つといたんだが……」

「い、いいから。さっさと出なさい」

仁王立ちになって俺をにらみつける狩野。いや、怖いけど、やつ
ぱ可愛い。エプロン姿がよく映えるね。うんうん、目の保養目の保
養つと。……もっとも、彼女に家事をやらせたら我が家は崩壊する
わけだが。

「あ、あと」

「何よ」

のろのろと立ち上がりながら、俺はさっきから気になって仕方ないことを口にする。

「今日、白と水色のしましまなんだな」

「へ……！？」

「さっき、あんな足開いて立ってたから、角度的に見え……」
「ぶっ
！！」

いや、予想してたけど、それでもやっぱり痛いね、肘鉄って。プロレスで禁止技に指定されてるのは正解だよ、うん。

そんなことを考えながら、鳩尾に思いっきりエルボーを炸裂させられた俺はあえなくフローリングを転がっていった。

所変わって、とある都立高校。

2年B組の教室に、俺は足を踏み入れた。

「おはよーっす」

俺はいつも通りにあいさつをして、自らの席に座る。結局朝ごはんを食べさせてもらえなかったため、現在壮絶な空腹と戦っている。

「おう、今日は彼女とラブラブ登校じゃねえのか？」

「いや、彼女つて誰だよ」

「とぼけるんじゃない。有宮さんと毎日一緒に登校してんじゃないか。我らが学園のアイドルを貴様ごときにとられるとは、くううううううううううー!!」

なんか一方的にまくし立てられ、さらに勝手に逃げられた。名も無きクラスメイト男子Aよ、お前マジで泣いてたぜ。すげえな、こんなくだらない事で泣くななんて。

「あら、悟君、ご機嫌いかが？」

「あ、真下先輩。おはようございます」

わざわざ2年生に挨拶しに来るなんて、礼儀正しい人だなあ。

彼女は真下由美。この学校の生徒副会長であり、さらに自ら設立した『学校平和自治委員会』の委員長を務める、超熱血先輩だ。

「皆さんもおはようございます。本日も晴天に恵まれ、私の心もまだ春といつのに夏のようにキラキラと……」

まあ、言動はお嬢様っばいが気にしない。

『『『………（ポーツ）』』』

クラスの皆は、どうやら真下先輩の魅力にあてられたらしい。男子のみならず、女子までだらしなない笑みを浮かべて先輩を見つめて

いる。

ちなみに彼女、真下先輩もかなりの美少女。少し茶色がかかった長髪はツインテールに結んでおり、どこことなくエレガントだ。そして太平洋のように澄み渡った碧眼も上品さをもし出している。そして何より、狩野より発育が進んだそのスタイルも……

「たあっ」

「ぶげっ!？」

突如、俺の背中に激痛が！ 何だ、何が起こった!？

「あんたまた鼻の下伸ばして、変なこと考えてたでしょ」

ああ、またこの稀代の暴力女、有宮狩野か。まったく、出会ったころのおしとやかで幼い狩野はどこへいったんだろうね。きつと今までの4年間で、教育方法を間違えたに違いない。タイムマシンがあつたら教育し直すのに……

「こら、有宮さん。『学校平和自治委員』が自ら暴力を振るってどうするんですか」

「うっさい。あたしが自ら望んで入ったわけじゃねえだろ」

確かに。俺と有宮は『学校平和自治委員』だが、真下先輩によって強制的に入らされたのだ。というか脅迫か？ あれは。

「それでも、学校の平和を守る者としては今の行動はいかがなものかと思えますか？」

バチバチ、と二人の間で火花が散る。

いやいや、クラスの皆。何故にニヤニヤしながら俺をジロジロ見る？ というか俺は悪くないぞ、うん。

……けど、朝っぱらから騒がれても困るよなあ。

「ほらほら真下先輩、その口論も平和を乱してるんじゃないですか？」

仕方なしに、重い口を開く。この二人を大人しくさせるなど、俺にとつちや朝飯前だ。いや、朝飯ほしいけど。

「……それも、そうですね」

そう言うと先輩は少し表情を曇らせ、視線を床に落とした。反省している……のだろうか？

「ほら、見回り行くんでしょ？ さっさと終わらせちゃいましょう」

そう言って俺は、真下先輩の手を引いて廊下を歩き始めた。

「あ……」

「お、おい、悟!？」

なんか二人とも焦ってる。先輩に至っては顔を赤く染めてるがどうしたのかな？

「岡崎い　　！　てめえ、まさか真下先輩にまで手を出しがあつ！！」

と、クラスの男子が何か叫ぼうとした瞬間、そいつは床に沈んだ。クラスメイト男子Bに合掌。というか見間違いじゃなければ、両隣の女子が瞬時にリバーブローとハートブレイクショットを打ち込んでいた気がするんだが……あ、なんか手を振ってきた。結構可愛い子じゃなか。頬に返り血っぽいのがついてるのが気になるけど。

「さあ、さっさと行きましょう」

クラス中の女子から暴力的オーラが漂い始めたので、俺は空いてるもう一方の片手で狩野の腕をつかみ、廊下に出る。

「あ……」

狩野もちよつと驚いたように腕を震わせたが、大人しく従った。よかったよかった。

「……（バチバチ）」

全然よくなかった。この二人、超至近距離で火花散らしてる。怖いんでやめてください。

と、俺達が教室から少し離れたところで2年B組の教室からドンガラガシャーンというベタな効果音が。

『悟×狩野より、悟×由美の方が良いに決まってるじゃない！』

『悟×由美なんて邪道よ邪道！ 岡崎君には幼馴染のツンデレが似合うに決まってるでしょ！！』

……俺は何も聞いてない、聞いてないぞ。

恐る恐る、狩野と真下先輩に視線を送る。ああ、良かった。まだ二人で視線バチバチやってるだけだ。

はあ。

俺はため息を一つつき、後ろで冷戦状態の二人をいかに講和させるか考え始めるのだった。

2・黒より、非日常への誘い

『学校平和自治委員』といっても、パトロール以外に仕事なんてない。

真下先輩が勝手に作ったんだし、委員も俺と狩野と先輩の3人だけだし、正直言って規模は小さい。よく言えば精鋭部隊か。

ちなみに時刻は午後5時。帰りのH・Rも終了し、部活に勤む生徒の影がそこら中にある。

そんな中、売店でコーヒー（この学校の名物で、一杯150円）を買った俺は、紙コップ片手に音楽室で優雅なティータイムを楽しんでいた。BGMは「ホタルノヒカリ」で、部長には許可を取ってくつろいでいるのだ。部長さんは男子なのにフルートパートというちょっと変わった方だが、演奏の腕は一流らしい。

「よし、それじゃあ合奏はこの辺にして各パートごとに練習するか」

部長の声により、部員たちが学校中に散ってゆく。部長はというと、なんかニヤニヤしながら俺に近づいてきた。

「おつかれさまです、先輩」

「おつ岡崎、おつかれ」

部長はそのニヤニヤをさらに増幅させ、俺の髪をくしゃっとした。俺がわけも分からず、硬直している。

「3年でも有名だぞ、お前と真下と有宮の三角関係は」

紙コップを取り落としかけた。

「な、な、な……！」

舌がうまく回らず、言葉が出ない。その反応にますます気をよくしたのか、部長は俺の耳に口を近づけ、若干トーンを落とした声で囁いた。

「いや、クラスメイトとして真下はオススメだな。面倒見も良いし、美人だし、性格も文句のつけようがない。まあ、生徒会長には及ばないが」

そう言って部長は俺から離れた。俺達から少し離れたところでは、1年生の女子達が聞き耳を立てているではないか。なるほど、こうして噂って広まっていくんだなあ……

「じゃねえよ！ ちょ、そこの1年待ちやがれ」

俺が叫び終わる前に、彼女達は蜘蛛の子を散らすように走り去って行った。いや、いくらなんでも速すぎだろ……

頭を抱えながら、俺はコーヒーを飲み干す。ブラックだったが、今はこのくらいの苦味がちょうど良かった。

さて、パトロールと称して学校内をぶらついてたのだが、意外と時間が経つのは早い。気づけばもう完全下校時間だ。

俺は荷物をまとめ、『平和自治委員控え室』へと急ぐ。普段は完全下校時間になったら3人ともここに集合するのだ。

しかし、俺がドアを開けた時、目の前にいたのは真下先輩だけ。

「あら、ちょっと遅れたわね」

「すみません……で、狩野は？」

真下先輩は嘆息し、唇を開く。

「先に帰ったらしいわ。なんでも用事があるとかで」

用事……か。

「ねえ、聞いてる？」

どうやら俺は意識を成層圏のあなたに飛ばしていたらしい。

「は、はい？」

「だから、早く帰りましょう」

「あ、了解です」

この時、俺は選択肢を間違えなかった。もしここで、彼女と一緒に帰ってなかったら、恐ろしいので考えたくない。

俺は何となく、ごく自然に、学生カバンを触っていた。まるで、

中に、頼れる相棒がいるかのよう。

時刻は8時23分。俺達が利用する駅から二つほど前の駅で、人身事故があつたらしい。そのため運行が遅れ、このような時間に俺は真下先輩と夜道を歩いているのだ。

「ごめんなさいね、わざわざ」

「いえ、夜道を一人で歩かせるわけには行きませんよ」

何かあつたら困るしな。

「けど、あなた帰らなくてよろしいのですか？」

不安げに、俺の顔を覗き込んでくる先輩。ぐあ、すげえ可愛い！

「い、いえ！先輩を一人にした瞬間、先輩が不審者に襲われたらいけませんから！」

「まず、果たして襲われるかどうか……」

「真下先輩は可愛いんだから、男は襲っちゃいますよ！俺だったら、迷うことなく襲います！！」

言い放つてから気づく、自爆の大きさ。

「え……。ひょっとして、そのために……」

自分の肩を抱いて、俺から距離をとる先輩。電灯に照らされ、赤

くなつた顔がくつきり見えた。ああ、赤面してる姿も可愛いなあ……
…じゃなくって！

「い、いえ！ 送り狼になるつもりなんて微塵もありませんよ！」

「本当なのかしら？ その用語を知ってる時点で怪しいのに……」

「本当です！」

「本当？」

「本当！」

「じゃあ由美って呼んで！ ついでに敬語も省いて！」

「本当だって、由美！ ……ってアレ？」

なんか本題から著しく逸れてる。気がする。

先輩に視線を送ると、顔をさらに赤くしてこちらを見つめていた。
なるほどねえ。

「つたく、お前には敵わないよ……由美」

彼女の表情が、綻んだ。ような気がした。

日常は続かない。黒い非日常は、すぐそこまでやって来ていた。

刹那、沈黙を引き裂く銃声。

俺は何も考えず、由美を押し倒していた。彼女のカバンが宙を舞い、地面に落ちる。

飛来した銃弾が、俺の頬を切り裂いた。鮮血が溢れ出てくるが、そんなものに対処している暇は無い。

呆氣にとられる由美。彼女の前で俺は、学生カバンのロックを外した。

中から取り出すのは 黒光りする、拳銃。名前は「H&K USP TACTICAL」。6歳のころから愛用している、相棒。

銃弾が発射された方向を向き、蠢く人影を視認。あちらも狙いをつけているが、発砲はない。

俺は躊躇なく、引き金に手をかけた。

ひよつとしたら、相手の標的は俺だったのかもしれない。だとしたら、由美を巻き込んだことに動揺して撃てなかったのだろう。

甘い。

致命的に、甘い。

そうやって、殺しの最中に躊躇いを持つことは命取りだ。現に、俺の拳銃から発砲された9mmパラベラム弾は相手の左胸を貫いた。

電柱の影に倒れこんだ人影は、しばらくすると一切の動作を止めていた。もうこれきり、動くことは無い。

俺は拳銃をしまい、由美の手をとる。

「行こう。サブレッサーを装着し忘れた」

「さ、さぶれっサー？」

「皆が、サイレンサーって呼んでる機械のこと」

ああそう、と頷く彼女。俺は少し顔色の悪い彼女の腕を引き、走り出した。

彼女の家は、思ったより近かった。幸いなことに、まだパトカーのサイレンは聞こえない。

「ねえ、悟君」

家の前まで来て彼女は、俺の手を振り払った。

そして、その白い右手で俺の頬に触れる。ああ、そっぴや切れてたっけ。

「分かってるんでしょう？ あれは、俺を狙ってたって」

俺の言葉に、彼女は頷く。

正直、本当のことは話したくない。話せば、彼女も巻き込んでしまっから。

「話したくないなら、話さなくてもよろしいですよ」

その言葉に、俺は思わず彼女の瞳を見つめた。

彼女が手を引っ込める。その指には、俺の血がついていた。

「じゃあ、あやすみなさい、由美」

「ええ、また明日」

人の死を見たにもかかわらず、俺達の別れは実にあっさりとしたものだった。

本当は、分かってる。彼女は無理をしてるって。

けど、彼女がソレを望むなら、俺は彼女を見守る。

家までの道の途中、携帯電話で狩野に電話をかけた。

「遅い！ どこほつつき歩いてんのよ！ 『仕事』に間に合わないでしょー！」

「ああ、悪い。先に行っててくれ。現地集合で」

「晩御飯は？」

「コンビニで買っぞ」

「えー」

不満げな声を聞いた後、俺は通話を切った。そのまま携帯電話そのものの電源も切る。いざというときに鳴り出したら困るからな。

カバンの中には、さっき使った拳銃と替えのマガジン、そしていくらかのダガーナイフ。最後に、もしもの時のサブマシンガン。名前は、「H&K UMP」。本来はもっと軽装備なのだが、行くところに行くところなので重装備だ。

彼女が触れた頬は、まだなんとなく温かった。

この温かさも、俺にとっては『白』。

交わることのできない色。

誰か、俺の黒と交わってくれないか？

その願いはきくと、叶わない

3・黒への依頼

「コラぁ　　！」

狩野の声が、夜の公園に響く。俺はコンビニのレジ袋をぶら下げ、彼女の元へ駆け寄った。

仕事用の服装　漆黒のマントは分かるが、その下が半そでのTシャツとミニスカなのはどうかと思う　に着替えた彼女は、憤怒の形相で仁王立ちしていた。バックが満月なものも相まって、なんとも恐ろしい光景を作り出している。夢に出てきそうだ。

「悪い！　真下先輩を家に送ってた！」

その言葉に、狩野は俺の胸倉を掴む。

「なんですってえ！？　まさか送り狼に　　」

「だぁ　　！　なんで女って皆同じ反応するの！？　してません！　神に誓って由美には手を出していません！！」

俺の絶叫が公園に響き渡る。同時に、狩野もその動きをピタッと止めた。ほっ、分かってくれたか。

「……………」『由美』？

あ、そういえばさっき、思わず口走ったっけ。

コトコトコトコト……

「あれえ？ 変な効果音が聞こえるなあ。なんか地獄の底から響くような怒りの効果お」

「あんた、いつの間にあいつとそーゆー関係になったのよおおおとおおおー！」

次の瞬間、上段回し蹴り。その凶悪なまでの威力を誇った蹴りは、俺の右頬を綺麗に捉えていた。

数メートルは吹き飛んだだろうか。ズザザザ、と服が地面を擦る音。視界に闇が降りる中、とりあえずコンビニのレジ袋を死守してきた自分を誉めた。

「お腹すいた……」

「あんたが悪いでしょうが」

理不尽だ、と反論できない。反論したらまた回し蹴りを喰らうに決まってる。いや、今度は金的蹴りかもしれん。

まあその後、俺が意識を取り戻したところにはもう、コンビニ袋の中身は狩野のお腹に全部収まっていた。俺、今日昼ご飯しか食べてないんだけど……

空には無数の星が煌めき、どことなくロマンチックな空気をかもし出していた。

「で、目的地は？」

「うーん、この辺のはずなんだけど……」

彼女は、ケータイのような端末を見ながら唸っていた。確か、目的地の名前は

「あ、ここじゃね？ 『RRP』って貿易かい、しゃ」

ちょうど真横にあったビルを指差し、俺はそのビルを見た。

最上階が、見えないんだけど。

まるで世界一狙ってますと言わんばかりに巨大なビル。入り口も自動ドアなのに、周囲のデザイン、壁の色、出入りする人々の全てが別次元だ。

「……………」

隣で狩野も絶句している。上を見上げすぎて首が痛くなったりしないのだろうか。

「で、ここが何したんだっけ？」

ビルの真正面、広い遊歩道のど真ん中で俺は眩く。狩野は視線を端末のモニターに戻し（その動作をする際、彼女の首が「ポキッ」と音を立てるのを俺は聞き逃さなかった）、モニターに指で触れる。タッチパネルらしい、かつこいいな。いや、俺にも支給されてたっけ。……失くした。

「えっと……。とりあえず、ここは貿易会社なんだけどね」

そこで狩野は言葉を切り、俺に端末を突きつけてくる。そういやここは、往來のど真ん中だった。流石にこんなところで任務内容を口に出すのはマズいよなあ。

俺はモニターに表示される文字を黙読した。

『貿易会社『RRP』は、貿易取引の際米国の反政府組織から何発かの弾道ミサイルに大量の銃火器を輸入した疑いあり。某国のエージェントの調査結果により輸入されたミサイルは『LGM-118A ピースキーパー』を3発、銃火器に関しては『AK-47』が3000丁と判明。よって君達に輸入の責任者、倉沢一樹くわいさかかずきの暗殺並びにその事実の抹消を依頼する。報酬は200億払う。頼んだ』

読み終えて、絶句する。

ピースキーパーっていつたら、大陸間弾道ミサイルじゃないか。本当に、日本が壊れかねないぞ。

「今回ののは……正直、ヤバイわね」

「だな」

俺達は嘆息する。

「で、進入ルートと目標地点は？」

狩野は端末を懐に入れ、笑顔で俺に告げた。

「正面突破」

いや、それ暗殺って言わなくね？

俺の疑問も耳に入れず、彼女はずんずんと入り口に向かっていく。つたく、しょうがないやつ。

俺は学生服の内ポケットに手を入れる。そこには、冷やかな感触が。

ビルの自動ドアが、ゆっくりと開く。

狩野は迷うことなく受付へと進んでいった。俺は慌ててその後を追う。周囲から、奇妙な目が向けられていた。まあ、俺は学生服で狩野は黒マントにミニスカだからしょうがないか。

「すみません」

話しかけられた受付のお姉さんは、ビクツと肩を震わせて、無理矢理といった感じで笑顔を作る。

……結構美人だな。

「はい、なんででしょうか」

「あの、本日職業見学を申し込んだ、山本という者なのですが……」

山本、とは恐らく偽名だろう。しっかし暇だな。仕方ないし、通り過ぎる人たちでも観察しよう。

「あ、山本太郎さんと山本美戦^{みせん}多^た多^た月^{つき}さんですね。少々お待ちくだ

俺はもう一度周囲を見渡して、狩野とともにそちらへ歩き始めた。

4・黒の旋風 〔前編〕

「さっむう……。別に、エターナル・フォース・ブリザードが発動されてるわけじゃないわよね」

「それさっきも言った。お前がそんな格好してるのが悪い」

さすがに黒マントは怪しいのでエレベーターの中で外した（その後虚空に消えたのだが、俺は何も見えていないぞ。というか見なかったことにしてくれ）。そのため現在狩野の服装はTシャツにミニスカ。うーん、目の保養、目の保養。

「というかそんな格好で来るなよ。クーラーガンガン効いてるオフイスは流石に寒いだろ。というか女の子がそんなはしたない格好をするんじゃないぞ」

「そんなこと言う前に、まず鼻血を拭け」

「やべっ!?!」

どうやら気づかないうちに鼻血を垂らしていたらしい。

「ったく……」

ポケットの中に入れていたティッシュでふきふき。ごみは丁寧にポケットの中にイン。

「すみません、見学予定の部屋はまだですか？」

いい加減歩くのも疲れしてきたので、前を進む受付のお姉さんに声をかけてみた。彼女はこちらを振り向き、営業スマイルを浮かべる。

つまり、「まだかかる」ということらしい。

「……つくしよい！」

隣から豪快なくしゃみが聞こえた。まったく、これだからこいつは困るんだ。俺だって、学ランの下は半そでなのに。

「ほら、これでも着てる」

俺は脱いだ学ランを、狩野に着せえた。狩野は驚いたように俺の顔を見る。

「……ありがとう」

少し頬を染めて、俯く狩野。ああもう可愛いなチクショウ！

「もう少しになりますので、少々お待ちください」

そう言ってお姉さんは歩く速度を速めた。俺達も置いてかれないよう歩を早めるが

刹那、俺の横から「チーン」という音が聞こえた。

見ると、やたらとデカイエレベーターがその扉を開けていた。

こじだ。

俺と狩野は顔を合わせ、頷く。

さあ、こっからが本番だ。

エレベーターに乗り込むと、周囲から奇特的な視線が向けられた。まあ、学生が大企業のエレベーターにのっているんだからしょうがないか。

現在位置は3階。ここからまず地下3階に降り、そこからはどうにかして地下45階まで向かわなければならぬ。

地下45階って、深すぎるだろ……

俺達が音もなくエレベーターに入ったので、今受け付けのお姉さんはパニックだろう。気づいたら、後ろにいたはずの人間が二人も消えているのだ。

「ねえ、君達」

と、俺の後ろにいた男性が口を開いた。

「一体ここで何を」

刹那、狩野が俺の学ランから拳銃を取り出す。

「え？」

会社員は、まだよく状況が把握できていないようだ。しかし、状況は時間を与えない。理解するほど猶予は残さない。

狩野は何の躊躇いもなく、引き金を引いた。

パシユ、という軽く、発砲音とはかけ離れた音。

けれど確かに銃弾は発射され、男性の眉間を打ち抜いていた。

シン、と静まるエレベーター。

俺はその間に、エレベーターの操作パネルに向かっていた。流石大企業、タッチパネルとは贅沢だ。

ポケットから特殊な工具を取り出し、業務操作パネル（『一般人使用不可』のステッカー付）のカバーをこじ開ける。ご丁寧に『ノンストップモード』なんてボタンがあった。俺は笑みを浮かべ、そのボタンを押す。

そうしているうちに、俺の足元まで赤い池が広がる。悲鳴らしき悲鳴も聞こえなかったし、狩野お得意の早撃ちで全員射殺したのだろうか。

エレベーターはノンストップモードとなり、地下3階までの直行便となった。

「なあ、今からは隠密モードでいかないか？」

「えー、なんでよ。派手にドンパチやりたいんだけど」

だったら暗殺者なんて辞める。傭兵にでもなってしまうえ。

そうこうしているうちに、このエレベーターは3階に到達した。

ドアが開くと同時に、俺と狩野は別方向へ飛び出した。

壁に張り付き、周囲の様子を伺う。

しかし、狩野も潜入には大分慣れてきたな。暗殺者独特の殺気を完璧に殺している。最初のころなんて殺気ビンビンだったもんな。仔犬も鳴いて逃げたってよ。

俺は狩野にも目を向けながら、カバンからダガーナイフを取り出した。そしてそれを、足首に装着していたホルスターにセットする。狩野は拳銃主体の銃撃戦を得意としているが、俺は銃でもナイフでも殴り合いでもなんでも守備範囲のオールラウンダーだ。かつこいだろ。……ま、そういうことにしといてくれ。

狩野がジェスチャーでメッセージを送ってきた。

『敵影なし。どうやって下に降りる？』

俺は黙って、ジェスチャーの代わりに、ある地点を指差した。狩野の視線が、俺の指から直線状にある機械を捉える。

ま、ヒットマンとしては使い古された手法だけだな。

会社員 いや、恐らく銃火器の関係者専用のエレベーター。と
いってもただのエレベーターじゃない。その頑丈で分厚い扉、巨大な操作パネル、極め付けに、パネルの前で周囲に鋭く眼光を光らせる大男。

はい、自動車エレベーターです。ちなみに人間のみでの使用は禁止されています。

『とりあえず、人影はあいつだけだな。つか、よくあんな怪しい奴いても社員スルー決めれるな』

『や、首からICタグぶら下げてるじゃん。ってことは、あれを使えば侵入できるのか？』

俺の疑問に、狩野は両手で三角形を作った。

意味は、『多分』。

『よし、ひとまずあいつを叩きのめすぞ。俺が一人で行く』

『了解』

右手でキレのある敬礼をする狩野。ムダにクオリティが高い。

俺は壁から飛び出すと、上体をかがめて疾走。瞬時に距離を詰める。

「！キサマ、何も」

何者だ、とでも言おうとしたのだろうか。言葉を言い終わる前に、俺の拳が大男の脇腹にめり込んでいた。

「か、はっ………！」

体をくの字に折り曲げたそいつの顔面に、容赦なく肘鉄を喰らわ

せる。

ベキツ、と嫌な音を立ててそいつは床に沈んだ。鼻からの出血が酷い。ひよっとしたら、鼻が折れたかもな。

俺はそのままパネルに駆け寄り、カタカタと操作する。

次の瞬間、エレベーターの駆動音が辺りに響き渡った。

5・黒の旋風 〔後編〕

「うえっぶ……」

「気持ち悪っ……」

暗殺者二人組みは、揃いも揃ってエレベーター酔いに苦しんでいた。

自動車エレベーターで地下42階に辿りついたはいいが、世界がぐるぐる回ってる。や、地球の自転とか公転とかは置いといて、視覚的な問題としてぐるぐる回ってるんだって。

「うおおおおおー!」

隣では狩野が頭を壁にゴンゴン打ち付けていた。うっわ、痛そう。

「よ、よし……。そろそろ、行こうぜ」

なんか頭ぶついたら復活したらしく、正気に戻ってた。こいつを見てたら、意外と目も覚めるかもしれん。

基本的にこの階は、そこまで入り組んではない。中央に巨大なフロアがあり、それをぐるっと囲むように廊下がある。

そして中央のフロアには、大量のコンテナと……3発の巨大なミサイル。

俺達は顔を見合わせ、頷き合う。

ほぼ同時に走り出す。俺は右、狩野は左へ。

ズボンのポケットや足首のホルスターの中に、合計4本のダガー。そしてカバンのなかにサブマシンガン。狩野は、俺の拳銃「USP TACTICAL」と、狩野自身の拳銃「ブローニング・ハイパー」を両手に装備。けど、高校生の女の子が2丁拳銃ってどうだろうね。俺としては、デリンジャーぐらいの超小型拳銃を制服姿で構えてるほうが似あ　話が半分逸れた。

直線的な廊下には、障害物などほとんどない。廊下には関係者が二人。俺は足首の筋肉に力を溜め、一気に駆け出す。

「なっ!?!」

相手がこちらを振り返った。慌てた声を上げ、腰のホルスターへ手を伸ばす。

「させる、かつ!」

スピードをつけたまま跳躍し、相手の後頭部に膝を叩き込んだ。俺の体が地面につく前に、足首のホルスターからダガーを抜き取り一閃。

真横に振りぬいたそれは、もう一人の男の拳銃を弾いた。

驚愕に瞳を見開く男。俺は着地とともに、遠慮なく拳であごを突き上げる!

アッパーカットが極まり、男は白目を剥いて床に沈んだ。

俺は廊下を疾走しつつ、ダガーをホルスターに戻した。と、廊下の向こうから足音が響く。

慌てて周囲を見渡すが隠れる場所はない。俺は両足のホルスターからダガーを抜き、投擲のため距離を詰める。

相手の影が差した瞬間、2本のダガーが飛んだ。1本は頭、1本は胸へと向かう。

しかし俺が放ったそれらは、出てきた相手に叩き落された。

「うわっと!? アブないじゃない!」

「って、狩野かよ」

飛んできたダガー2本を条件反射で叩き落とすとは、未恐ろしい女だ。

「敵と間違えるなんて凡ミスね。あんたの拳銃がこんなにボロボロになっちゃったのも自業自得よ」

「ってオイ!? お前さては俺のUSPでダガーを叩き落したな!」

「や、あたしのブローニングで叩き落したらブローニングに傷がつくから……」

「俺の拳銃は傷どころの問題じゃないんですけど!」

ああ、なんか銃が全体的に短くなってる。どうもダガーに切り落とされたらしい。

「で、アレは仕掛けたのか？」

俺の言葉に、狩野は神妙な表情になって答えた。

「もちろん。合計4つ。これでピースキーパーやAK-47はドカ
ンよ」

その言葉に、俺は改めて戦慄する。

地下42階なのをいいことに、俺達はこのフロアを爆弾で吹き飛ばそうとしていた。使用する爆薬は「セムテックス」。250gで飛行機を吹き飛ばせる。

「起爆まで6分。それまでに地下を脱出して倉沢くらさわを殺害。そして俺達がビルディングから脱出。起爆のベストタイミングはビルから脱出して2分後。つまり倉沢を、移動時間も含めて4分で殺す必要がある」

これからの行動予定をスラスラと読み上げる。これくらいは全部頭に入っていないとどうにもならない。

「了解。じゃ、早く上に……」

「ああ、さつさと上に……」

痛烈な違和感。

俺達は、どうやって上に上がるんだ？

顔を見合わせる。お互い、真っ青だった。

自動車エレベーターは便利で、以外にも屋上まで続いていた。

「うえっぶ……」

「くっ……、（ガッン！ ガッン！ ガッン！）」

横からすごい音が。二度目のエレベーター酔いに苦しみながらも、俺は視線をそちらに向ける。

なんか、自分の頭を拳銃のグリップで殴っている阿呆が一名。なんだろう。ついにマゾに目覚めてしまったのだろうか。

「っていつか、お前の奇行を見てたら酔いがさめてきたよ。先に行ってるから」

俺の言葉に、狩野は慌てたように俺の腕を掴む。

「あんた、何勝手に一人で……」

ドシン。

突き飛ばされた彼女は、ビルの屋上にしりもちを着いた。信じられないように俺を見上げる。

「お前は、来るな」

俺はそう告げ、ドアへと向かう。社長室は屋上の一つ下だったので、すぐ辿り着けるだろう。

今回の任務は『暗殺』と『破壊』。普通、依頼は『暗殺』だけなのだが、今回は違った。

それは、『暗殺』できなくてもいいが『破壊』はしろ、という意味。

それは、その『暗殺』がハイレベルである暗号。

狩野はそのことを知らない。知られると、その類の依頼が来るたびに無茶をしてしまうだろう。

俺はカバンからサブマシンガンを取り出し、サプレッサーとドットサイトを装着する。ダガーも4本。

『RRP社特殊視察部隊』、通称『R特視部隊』と呼ばれる精鋭部隊。それが、最上階（つまり、俺がいる屋上の一つ下だ）で俺を待ち構えている。この部隊は視察などする気はない。

指定された地帯にいる、ありとあらゆる生命体の抹殺。

そんな危険な任務を54回成功させている、機密高等精鋭部隊。

俺はコンクリートの階段を降りながら、自分の右目に手を伸ばす。

眼球に指が触れ、瞬間、コンタクトレンズが音も立てずに床へ落下した。

さあ、戦闘モードだ。

引き金を引く。ただし、敵に対してではなく、壁に。

壁に当たった銃弾は反射し、視察部隊の一人の左胸を貫いた。

続け様に銃口を天井に向けた。瞬間、確かに俺の眉間にレーザーポインタが当たる。

俺はすでに握っていたダガーを、レーザーポインタの発射された方向へ投げた。

ガキーン！ と空中で火花が散る。

ダガーと銃弾がぶつかったらしく、銃弾を裂いたダガーはそのまま相手の胸に突き立っていた。

そして視線を天井に戻し、弾を放つ。

天井から反射した弾丸は、それぞれ視察部隊の肉体を蹂躪した。

予測不可能な角度からの攻撃に、視察部隊は成す術もなく追い詰められていく。

障害物を使った銃弾反射。それが、俺の特技^{スキル}。超能力なんかじゃ

なく、努力と天性の能力が成せる技。

視察部隊の死体が握っている銃に、俺の顔が映る。

俺の右目は、真っ赤に染まっていた。

血なんかじゃなく、生まれつきの色。

サブマシンガンのマガジンを床に落とす。替えは……ない。

視察部隊総勢35名は、たった一人の高校生の手によって全滅した。

俺は一本になったダガーを左手に握り、廊下を進む。

自分が殺した人達の死体が、そこらじゅうに転がっていた。酷いものは、肉体がえぐれて中身まで見えている。

ここにいるのは、死体と自分のみ。

自分はたった一人の生き残り。そして、人殺し。

「ここ、か……」

社長室のドアを開ける。社長席には、一人の中年の男性が腰掛け
ていた。

「倉沢、一樹」

俺が男の名を呼ぶと、男はこちらを振り返って目を見開いた。

「っ、視察部隊がやられたのか……」

返り血にまみれた俺を見て、彼はため息を吐いた。

「言い残すことは、あるか？」

「おや、随分と親切な暗殺者だね」

「あんだだつて、いつかはこうなるって分かってたはずだ」

俺は男から視線を逸らす。殺す前に、相手をしゃべったことなどほとんどない。

「そうだな……。強いて言えば、なぜ君みたいに若い子がこんなことをしているのか、是非聞きたいね」

そう言つて男は、俺に傍の椅子に腰掛けるよう促した。

俺は首を横に振り、しばし悩んだが結局男の質問に答えることにした。

「俺は、自分が生きるために人を殺している」

できるだけ短く述べる。タイムリミットがあとどれくらいかわからない。

「そうか……」

倉沢は考え込むように、俯いた。もう時間がない。俺はダガーを

固く握る。

「さて、そろそろ……」

「つまり」

俺の言葉を遮り、倉沢はゆっくりと唇を開いた。

「君が人を殺す理由は、無に等しいということだな」

その言葉が、俺の心に突き刺さる。なんだ、こいつは何て言った？

「暗殺者だというから、どんな者が来るか楽しみだったが……失望だな」

「何だと？ 自分のため以外、戦う理由なんて必要ないだろう」

「いや。人は、自分以外のために戦う時こそ真の力を発揮できる」

自分以外のため。自分以外。ジブナイガイ。

気づけば俺は、ダガーで倉沢の喉を搔っ切っていた。

椅子や壁に、血が飛び散る。無論、俺にも。

「このままでは、いつか君は限界という壁にぶつかる……。どうやってその壁を崩すのかは、君次第だ」

それが倉沢の最期の言葉となった。

俺はしゃがむと、男の目に手を当てる。俺の手がどいた時、倉沢の瞳は閉じていた。

少し逡巡した後、俺は腕時計に目をやった。

ジャスト6分。

轟音がビルを包んだ。

俺は狩野に脱出ルートと合流ポイントを転送すると、ズボンを持参していたチノパンツに履き替え、カッターシャツも普通のTシャツに着替えた。

突然の爆音と振動に混乱し、パニックになる社員達の視線をかくぐって俺は非常階段に飛び出した。42階から41階へ、一気に飛び降りる。

腕時計で時刻を確認。ビル倒壊予定時間まで3分。壮絶なレースが幕を開けた。

足首がじんじんと痛む。氷か何かで冷やしたいところだが、あいにく今少しでも動きを止めるわけにはいけない。

2段飛ばしで階段を駆け下りる。『8階』という文字が目飛び込んできた。

残り時間は12秒。やべえ、間に合わない！

俺は階段を降りるのをあきらめ、オフィスに出る。窓ガラスにP
Cを投げつけ、叩き割る。残り8秒、7秒！

「るあああああー!!」

絶叫とともに、俺は8階から飛び降りた。

最後に見えたのは、遠ざかる夜空。

俺の意識は、夜空のようにブラックアウトした。

6・白黒の帰還

目が覚めると、そこは俺の家だった。

ついでに言えば俺の家の俺の部屋、俺のベッドの上に寝かされている。

服装はチノパンツにTシャツと、どう考えても寝るときの格好じゃない。

いやいや、落ち着け俺。何か忘れてないか？

……。

……。

……。

「そつだぁああああつっ!!！」

掛け布団を弾き飛ばすような勢いで飛び起き、俺は自分の体を見る。

あちこちにバンドエイドが貼ってあったり、ガーゼが留められていたり湿布が貼られていたり包帯が巻かれていたりと怪我人フルコースだ。

一体、どうして俺はこんなに怪我をしているんだ？

決まっている。8階から飛び降りたからだ。

「イタっ！ イタタタタっ！ か、体中が焼けるうっうっ！？」

飛び降りた記憶を取り戻すと同時、痛みを感じる感覚も取り戻したらしい。あまりの痛みにベッドから転がり落ちる。

「ちょっと騒がないで！ っていうかなんでベッドから落ちてるのよ！」

瞬間、ドアが開け放たれ、俺の部屋に誰かが飛び込んできた。

「って狩野！ 無事だったのか！ よかったよかつ」

「全然よくないわよっ！」

俺の言葉は、狩野の怒号にかき消された。

見ると、彼女はボロボロと涙を流していた。

「何よアンタは！ 必死に探したらゴミ捨て場にボロボロで落ちてて！」

なんと、運良くゴミ捨て場に着地できたのか。

「武器も全部なくしてて！ 滅茶苦茶ズタボロで！ 一体どんな奴と戦ったっていうのよ！」

そつえば、俺はこいつを置いてきたんだっけ。今更ながら、罪悪感が沸いてくる。

「えっと……詳しくは、勘弁してくれないか？」

俺の言葉に、狩野は涙目で俺をキッと睨み付けた。

「何よ、教えられないってわけ!？」

「……ああ」

彼女は少し拗ねたように、そっぽを向く。というか俺、未だに床に転がらされてるんだが。

結果的に、任務は遂行できたらしい。

地下42階にしかけた爆弾は起動し、『RRP』のビルは倒壊。政府もマスコミもてんやわんやだという。テレビなんて、どのチャンネルを見てもその特集だ。

「にしても、お互いよく帰ってこれたよな」

俺はベッドに寝転びながら呟く。

「まあね。けど、あんたこそよくあんなボロボロで応急処置なんてできたわね」

応急処置？ そんなもの、おれはしていない。

「応急処置って？」

「え、あんた出血箇所はほとんど止血されてたし、骨が折れてた部分も固定されてたわよ」

俺は言葉を失う。

一体、誰が？ 何のために？

「……まさか、あんたじゃないっていつの？」

無言で頷く。

「じゃあ、誰が……？」

知らん。分かるわけがない。

無意識のうちに手をあごにつけていた。人というのは、考えるときにこころするらしい。そのひょうしに、俺の指が唇に触れた。

ふと視線を下げると、指が若干赤くなっている。

血？

いやいや、なんで唇に触れただけで指が出血するんだよ。俺の指、弱すぎるだろ。

じゃあ、唇の血？

まず血から離れる。出血してたら狩野が気付くだろ。

なら、ケチャップ？

もつとロクなこと考えるよ俺の頭脳！

(ケケケ。いい加減、事実を認めろ、岡崎悟)

「ん、貴様は……そのつり上がった目、黒い翼、角、尻尾。ま、まさか！」

(そうだ！ 俺こそが、貴様の中にいる)

「天使か！」

(一番アホなのはテメエだ！)

「違ったらしい。じゃあ、未確認生命体0号で」

(誰がダグバだ！ 悪魔だよ、悪魔！ いや、ともかくだな、それは口紅だ)

「口紅？ あいにく、俺はお前と違って女装趣味はない」

(いや俺にもねえよ！ っていうかこれのどこが女装なんだよ！)

「そうか、まだ隠し通せてると思ってたのか……」

(まず隠すようなやましい事してないから！)

「まず悪魔の時点で存在がやましいと思う」

(……反論できん)

「で、なんで俺の唇に口紅が？」

(簡単な話だ。口紅をした誰かの唇がお前の唇と触れたということだ)

「そうか。ありがとう。これでお前のいうことはまったく信用できないって分かったよ。アディオス」

俺は激情のままに銃を取り出し、引き金を引く。銃声とともに、銃弾が悪魔の眉間を貫いた。

「今の言葉は、高校2年生にしてキスはおるか女の子と(好意的に)手をつないだことのない俺へのあてつけか？」

(……まだ、キスもしてねえのか)

ダン！ ダン！ ダン！

連続で3回発砲。悪魔の左胸、右肩、股間に穴が開く。ちなみに股間を撃つたのはわざとだ。

悪魔の死体を蹴飛ばしながら、俺はもう一度だけ、唇に触れてみる。

やはり指に口紅がつく。

……もしや俺、気絶してる間にファーストキス奪われた？

いやいやいやいや！ キスじゃなくて、人工呼吸でもしたんだろ

！？ どうせそつに決まってる！

結局同じことだけど。

「なあ、狩野」

「なによ」

テレビのチャンネルをカチャカチャいじる彼女のに、念のため尋ねておく。

「お前、口紅つけたりしてる？」

「するわけないじゃん、あんなの」

振り向きもせず、即答。ああ、なんか残念だ。

じゃあ、誰がしたんだ？

考えるのも面倒になる。

頭の中をめまぐるしく疑問が渦巻くのを尻目に、俺は意識を暗闇に手放した。

7・黒の開幕（前書き）

次回から、第二章の開幕です。
今回はその予告として。

7・黒の開幕

人を『護る』なんて、俺にはできない

この手が血に染まろうと、その血を新しい血で洗い落とす。

人の死を見たくないなら、自分が死ぬしかない。

こちらの眼をえぐり取られるまえに、相手の目を潰せ。

こちらの耳を切り落とされる前に、相手の耳を引きちぎれ。

こちらの頭を撃たれる前に、相手の頭を砕け。

そして、相手より先に心を失くすな。

心を失くした瞬間、人は人じゃなくなる。

俺が教わった言葉たち。

忘れたことなんてない。

あの時。俺は本気で、人のために何かができると思ってた。

けど、今は。

自分のためだけに、俺は人を殺してる。

人を殺す理由なんて、「自分のため」以外に見当たらない。

大切なものなんて、ずっと前に失くした。そう思ってた。

無いと思ってたから。身近すぎて気付いていなかったから。

空気がいたいだ。

あることが当たり前で、大切さに気付かなくて。

けれど、失くしたら息苦しくて。

『あたしは……、あんたのこと、信じてる』

『悟君。……絶対に、裏切らないでくださいね』

彼女たちの言葉を胸に、俺は闘う。

『こっちにこないか？』

『人殺しにかける情けなんてねえな！』

新たな敵の出現に、世界は震撼する。

『私はお前を知っている。お前の、全てを』

『答えろっ！ お前は俺の、岡崎悟の何を知っているんだ！』

『俺』を知る、謎の女。

『人に代わりなんて無い。皆それぞれ、何かの意味を持ってこの世に生まれてきてるんだ！』

俺の胸に灯る、新たな決意。そして

『その意味を殺してきたのは、君だろうか？』

『っ！』

あっさりとそれを否定し、打ち崩す強敵。

俺はそれでも、闘う。どんなに苦しくても、どんなに辛くても。

世界が変わらなくても、それでも

俺が生きるために、俺は闘う。

次の舞台へ、向かおう。

8 ・ブラックデイ・リターンズ(前書き)

第二幕、スタートです。

8・ブラックデイ・リターンズ

「おはようございます。ご機嫌いかがですか、悟君」

「気分は最悪です」

久しぶりの登校なのに、俺の体調は最悪だった。

通学路で他の学生とすれ違うたび、チラチラと視線が投げられる。まあ、俺の隣を歩いているのが、かの真下由美先輩なのだから仕方ないだろう。駅のホームで会ってから、ずっと一緒にいるわけだがよく人の視線が集まりやすい。本当に目立つ人だ。良い意味で。

頬には湿布が張られ、胸は包帯でぐるぐる巻き、左膝はパッドが付けられている。

「まあ、何かあったのですか？」

「いえ、階段から落ちただけですよ」

嘘だとはバレるだろう。

その言葉から雰囲気を感じたのか、由美はそれ以上追求しなかった。代わりに、一昨日から飼いだめたというハムスターの話 시작했다。本当に、良い先輩だ。

俺が完治したのは、ありえないことに5日後だった。

ビルの8階から転落したのに5日で完治するとは、我ながら恐ろしい。

「お、おっはー、悟」

「おはよう。っていつか何世代前のあいさつだよ、それ」

朝から我がクラスのテンションは無駄に高い。正直、迷惑。

「どづしたよ、その怪我。階段からすっころびでもしたのか？」

「よく分かったな」

うん、そう思ってくれたのならありがたい。というかそう思ってくれ。

「あ、今日は宮ちゃんと一緒じゃないんだ……って、真下先輩い！」
「？」

女子の一人が絶叫する。あ、そういえば由美が一緒だった。

「皆さんおはようございます」

『『『おはようございます　　すー！』『』』

教室に響く大合唱。……耳が、耳の鼓膜がつ……！

「テメエら朝っぱらからうるせえんだよ！　しばらくだまじぶつ！」
「？」

瞬間、俺が見たのは教室に殴りこんできた隣のクラスの男子。そしてその男子の顔面にめり込む拳。

……アレ？ おかしいな。今、一番彼に近いところに立っていたのは女子なんだけどなあ……。あ、視線合った。笑顔で手を振ってきてる。手に赤い液体がついているじゃないか。お昼にケチャップを使った料理でも食べたのかな？ ちゃんと拭かないとダメじゃないか。あははは。

こらそこ、「現実に目を向ける」なんて言うな！ 指摘するのはこっちだけど、指摘されたほうのことも考えてあげようよ！ この件で彼女に『鮮血のジャイ子』なんてあだ名がついたらどうするつもり……。あ、いや、何でもないです。本当に何も言ってますんってば。何も言っつてなぎゃあああああああああ！！

結論。俺の日常は戻ってきた。季節は6月、もうすぐ梅雨だ。

その日俺は病み上がりだったためか、何にも持ってきていなかった。本当に、何にも。教科書も、筆記用具も、集中力も、そして武器も。

学校の授業をほとんど寝てすごした放課後。この瞬間から今日の波乱は始まる。

何気ない一日は、真下先輩の一言で呆気なく瓦解した

「今日の放課後、空いてるかしら？」

9・アフタースクール・ウォーズ

放課後、女子と二人っきり。

このシチュエーションなら、皆きつとデートとかそこらを想像するだろう。それは間違いじゃない。

きつとそうなるのが普通だろうし、だとすれば俺が遭遇している事態は普通じゃない。

話は変わるが、デート、といえばどこを連想するだろうか。遊園地、カフェテラス、図書館、公園。正直言って、二人でいてなおかつ楽しければ、それはもうデートだろう。

では今の俺の状況がデートかというところじゃない。なぜなら俺はちつとも楽しくないから。由美と一緒になのに。

理由その一。

まず俺と由美の二人っきりではない。

理由その二。

俺と由美のスウィーティータ임을邪魔する馬鹿が、全員モヒカ
ン。結構シニール。

理由その三。

そのモヒカン軍団、バットやらパイプやらメリケンサック装備済

み。

理由その四。

俺VSモヒカン軍団の構図、完成済み。

「なんでこうなるんだあ

っ！！」

俺の叫びが、辺りに響き渡った。

あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！

『女子の先輩とデートしてると思ったらいつのまにか不良と闘った』

な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

なんて現実逃避している場合じゃない。何とかして逃げないt

「そのアナタ達！　なぜ我が校区内で恐喝などしているのですか
！」

あ、そういえば『平和委員』の腕章付けたままじゃん。あははは、

最初っから校区内の見回りが目的だったのか。

「ああん！？ うっせえんだよ！ テメエらあれか、風紀委員のつもりかあ！？」

「風紀委員じゃなくて、平和自治委員です」

どうでもいいけど、一応訂正。

「知るかよそんなの！ つつかさつさと俺らの前から消える！」

あ、モヒカン（赤髪）キレた。

「おいヤス。少しうるせえ」

と、奥からドス黒く、そして鋭い声が響いた。

「兄貴、けど……」

「今日の集金はこいつで最後にしたかったんだが……」

瞬間、俺と由美目掛けてサンドバックのようなものが投げられた！
真上から迫るそれは、明らかなほど俺たちへ直撃コース！

「やべっー！」

俺は由美とその間に割り込むと、サンドバックを受け止めた。重心を固定し、左右へのブレをなくすことで倒れるのを防ぐ。

けれど。

受け止めたのは、サンドバックなんかじゃなく。

女の子だった。

ぼろぼろの衣服、涙をためた目尻。

ブツチン。

俺の中で、何かが崩れた瞬間だった。

「……下がってる」

「は、はひ？」

女の子は戸惑ったように声を出す。

「あの女の人のところに行け」

「え、あ、はい！」

女の子は、地面に降り立つと由美の方へ走り寄っていく。

「ほう、テメエなかなかやるじゃねえか」

モヒカン達の群れが二つに割れる。そしてできた花道の向こうに

は 大柄なモヒカン（金髪）が。

「俺が放り投げたサンドバックを受け止めるとは、大したも」

刹那、俺はモヒカン達の花道を駆け抜けた。

「んだあっ!?!」

スピードの乗った拳は、モヒカン（金髪）の左わき腹に入った。助骨のすきまから、肺へと衝撃が直に伝わっただろう。

恐らくボスと思われる金髪を沈めた後、俺はゆっくりと後ろを振り返った。モヒカン達総勢、14名。

……全員、殺し尽くす。

足払いと見せかけ、わき腹を狙う中段キック。

アッパーと見せかけて心臓を狙うエルボー。

左フックをおとりに使い、顔面に炸裂させる右ストレート。

フェイントと本命を使い分ければ、ケンカなんて自分のペースに引きずり込むのは簡単。

「だりゃああああっ!?!」

「……………」

俺の腰にタックルしてくるモヒカン（緑髪）。俺はタックルを片手で受け流し、そのまま足に引っ掛ける。

「だあっ!?!」

「……………」

モヒカン（緑髪）は顔面から地面につんのめった。俺はそのまま
そいつの後頭部を踏みつける。

周囲に視線を巡らせる。

立っているのは、俺だけ。

血こそ流れていないが、状況は戦場と大差ない。

俺の靴にまとわりつく、赤黒い液体。

視線が合った瞬間、不気味によどむ死体。

そして、それらを生み出す俺。

「……………」

急に気分が悪くなってきた。

「……………」

たまらず路地裏に駆け込み、壁際に口を向けた。

「あ、……………」

数秒続いたそれを終え、俺は視線を上げる。

壁際の地面に吐き出された、俺の胃袋の中身。

「うえ……っ、気分ワリい」

ふらふらとした足取りで、路地裏から外へ出る。

「あ、悟君、大丈夫ですか？」

「大丈夫？」

「ん……大丈夫、じゃない」

視界が明滅する。世界が、変に歪んだ。

あー、頭がクラクラする。ガンガンと耳の奥で、ヘンな音が鳴り響いてる。簡単に言ってる、気分が悪い。

そういえばさっきまで何してたんだっけ俺。そしてどこにいるんだっけ俺。

えっと……

「そっだああああああっ!!」

俺は全身のバネを使って跳ね起きた。

由美、モヒカン、ケンカ、女の子、嘔吐。

今日一日の出来事が一瞬にしてフラッシュバックした。周囲はもう夜の公園で、不審者がうろついていそうな雰囲気だ。

「ひにゃあっ!?!」

と、俺の横で可愛らしい悲鳴が上がる。

この声は、確か……

「あ、君はさっきの女の子」

俺の隣で座っていたのは、俺と由美に向かって投げつけられた女の子だった。

身長は150cmぐらいか。髪は漆黒のセミロングで、おしとやかさを演出している。

目は大きくくりっろしていて、可愛らしい。

「君、怪我とかは？」

「ふえ？」

彼女は呆けたように返事をしない。

「いや、君は怪我とかしてないかい？」

ようやく質問の意味が飲み込めたのか、彼女はおもむろに口を開いた。

ようやくまともな言葉のキャッチボールができる

「くみの名前は右原久美みづはらひさみですよ」

訂正。言葉のドッチボールが始まった。

「で、久美ちゃんは何歳なのかな？」

「12月13日ですよ」

「誕生日じゃなくて年齢ね。どこに住んでいるの？」

「いて座ですっ!」

「いや、宇宙に住んでるの!? で、本当に怪我してないのかな？」

「そうですねえ……ハンバーグ、ですか」

「好きな食べ物なんて質問してないぞ」

「むっ! くみの好きなハンバーグはただのハンバーグじゃなくて、モアイをミンチにしたハンバーグですっ!」

「エグい! 意外とエグいぞこの子! というかモアイは石なんだからど!?!」

「ぜえ……はあ……」

強い。

この子、言葉のトッチボールがやたらと強い。

「まあ、これ以上お兄ちゃんをいぢめるのも可哀想だし、そろそろまじめに答えるねっ」

「わざとがコンチクショ ツ!!!」

ん? お兄ちゃん?

「くみは、右原久美っていいいます。中学3年生です」

「まだ、中学3年生だったのか……」

夜の公園のベンチに腰掛け、久美ちゃんは自分の身の上を語った。その中でも特に驚いたのが一つ。

「家、ないの？」

「……はい」

久美ちゃんは表情を暗くして俯いた。

この年で家がないとは、一体全体何があったのだろう。

「詳しく、聞かせてくれる？」

「……すみません、詳しいことは」

言いたくない、か。

「まあ、人には言いたくないことの一つや二つ、あるのが普通だよ。……きつと」

彼女は、「そうですね」と言って笑った。案外大人びている。

「久美ちゃん」

俺はそれを、実に自然に口にした。

「俺の家、来る？」

久美ちゃんの目が点になる。

「あら？ 悟君、起きられたのですか？」

と、絶妙なタイミングで由美が現われた。チツ、まだ久美ちゃんの返事を聞いていない。

「ああ。俺ならもうピンピンしてるよ」

「そうですか。けれど、一応私が送って差し上げましょう」

ガツデム。それじゃあ久美ちゃんはどうなる？

と、その時久美ちゃんが動いた。

「く、くみも行くですっ！」

「ふふつ。心遣いは嬉しいのですが、残念なことにもうこんな時間です。よかつたら貴女も家まで送りましょうか？」

そう言って由美は微笑んだ。若干、影が入ってるけど。

ええい、こうなったらちよっと強引に話をまとめ上げる！

「だから、送ってくれるんでしょ？」

「へ？」

俺は久美ちゃんの肩を掴み、自分のほうへ引き寄せた。久美ちゃんの体温が、服を通して伝わってきた。

「この子、今日から俺の家に泊めます」

由美の口元が、明らかほど引きつった。

「というわけで、ここが俺の家だ」

公園から電車の駅で2つ先。さらに駅前のバス停から徒歩で10分。

少し塗装が剥がれた、ボロいマンションの前に俺は来ていた。俺の左隣には由美、右隣には久美ちゃんが控えている。

「5階建てなんだあ。で、お兄ちゃんは何階？」

久美ちゃんは柔らかく微笑みながら、そう尋ねた。

「俺は、ふつーに1階だよ」

「ふうん。そうなんだ……」

あれ？　なんだか残念そう。

そういえば、小さい子はみんな高いところが好きだったっけ。俺も昔、よく木の上に登ったりしたな。

「あ、由美はここまででいいよ」

その言葉に由美は、不満そうに頬を膨らます。

「どうする？ 一人で帰れる？」

俺はふと不安になった。前みたいないなことがあつたら困る。

「ええ、その点に関しては問題ありませんわ」

彼女がそういつた瞬間。

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ！！

なんか、リムジンがドリフトして突っ込んできた。

「ぬおおおっ！？」

慌てて後ろに飛び跳ね、ギリギリのところを避ける。

リムジンは急停車し、ちょうど俺と由美の間に割り込むような形になった。

「お迎えにあがりました、お嬢様」

タイヤと地面の摩擦で、もうもうと白い煙が上がる。その中を悠然と歩く男。

白髪。

眼鏡。

カイゼル髭。

典型的な執事キタ

！

「あらロウシエ、随分早かったわね」

ロウシエ、と呼ばれた男は少し会釈した。

「お嬢様、どうぞこちらへ」

リムジンのドアが開く。

「悟君、また明日」

「あ、ええ……。また、明日」

由美は最後に少し笑い　なぜか笑顔に影が入っていた　車へ
乗り込んだ。

執事は俺に一瞥もくれず、リムジンを急発進させる。

凄まじいスピードで去り行く漆黒の車を見つめ、俺の心は一つの
感慨に沈んでいた。

……道路交通法違反じゃねえのかな、アレ。

「お兄ちゃん」

突然呼ばれ、思わず体がビクツとする。

そういえば、久美ちゃんがいたんだ。すっかり忘れていた。

「……早く行こうよ」

拗ねたように俺の服を掴む久美ちゃん。ま、存在を忘れられたら誰でもこうなるか。

「ああ、行こうか」

102号室。

「狩野は……帰ってきてないみたいだな」

「かりの？ 誰？」

久美ちゃんが不思議そうに尋ねてくる。そういえば、まだ狩野を紹介していなかったな。

「ここには俺と、もう一人ありみやかりの有宮狩野っていうお姉ちゃんが住んでるんだ」

「……………へえ」

おや？ なんか今一瞬、久美ちゃんの瞳にどす黒い光が いや、俺は何も見えていない。気のせいだ。

「……けど」

「どうした？」

久美ちゃんは表情を曇らせて、口を開いた。

「くみ、お兄ちゃんの名前知らない」

周囲の空気が、死んだ。

気まずい雰囲気が辺りを包む。

いかん。久美ちゃん、なんか知らんがすっごい不機嫌だ。

「どうせそうよ。くみとお兄ちゃんは知り合ったばかりだもん。くみはワガママだし、あつかましいし、面倒くさいし……」

ああ、久美ちゃんがネガティブモードに突入した！ これは、早急に何とかしなければ！

「だあつ、俺は悟！ おかひきわたくしめ 岡崎悟だよ！」

もう半ばヤケになり、久美ちゃんをぐいつと引き寄せる。

「いいか、久美ちゃんはもう俺の家族なんだ！ ここの、新しい家族なんだ！ だから、そんな風に自分を言うな！」

なんかもう文体がメチャクチャだ。文章にまとまりがない。けど。

今すぐ壊れてしまいそうなこの子を、壊したくない。

絶対に、壊すもんか。

久美ちゃんを抱きしめ続け、どれくらい経っただろうか。

30分？ 1時間？ それ以上？

時計を見てみると 午前6時。

あるえー？ なんかもう夜が明けてるぞ？

視線を落とすと、スヤスヤと眠る久美ちゃんの姿が。

彼女も彼女で疲れきっていたのだろうか。

俺は彼女を起こさないようにソファアに寝かせ、自分も同じソファアに寄りかかる。

次の瞬間、俺を急襲する睡魔。

ゆっくりと、思考がまどろみに落ちていく。

ぼやけた視界の中、見えるのは久美ちゃんの寝顔。可愛らしい、

笑顔。

「ああ、助けた甲斐があったよ。」

次第に薄れ行く感覚の中で、ドアが開く音を聞きながら。

俺は意識を手放した。

10・ニュー・ファミリー（後書き）

新キャラ、右原久美。

今後は新キャラも増えていくと思うので、お楽しみに。

11・クリムゾン・アイ

「……きてくださいっ」

ん……。

「起きてくださいっ」

「あと、5分……」

「起きてください、お兄ちゃん」

なんだよねちっこいな。いつもの狩野なら、耳元で叫んだり殴ったりで瞬時に叩き起こすのに。

大体お兄ちゃんってなんだ。俺とお前は同い年だろうが。それともこの家に俺とお前以外の人間が住んでるとも……

痛烈な違和感。

「んっ、久美ちゃん？」

「あ、やっと起きたですっ！」

彼女は満面の笑みで、俺から掛け布団を剥ぎ取った。

狩野は帰ってきていなかった。

久美ちゃん手作りの朝ごはん（俺以外の人が作った朝ごはんは久しぶりだった）を胃袋に収め、俺は一人寂しく通学路を歩いていた。なぜか今日は、よく人目を引く。隣に狩野や由美がいるわけでもないのに。

「あら、おはようございます悟君」

「あ、由美。おはよう」

校門前で由美と遭遇。通り過ぎる生徒がやたらとこっちをチラチラと見る。

「……………」

由美は驚いたように、俺の顔面を凝視した。

「…………えっと、何かついてる？」

「何でもありません」

彼女は素晴らしい切り、さっさと校内に進んでいく。

「何なんだ、一体全体。」

学校でも外でも、今日の俺はやたらと注目を集めている。何か変なところでもあるのか…………？

服装。風紀も守っているし、問題ない。

髪型。寝癖はばっちり直した。

荷物。多くもなければ少なくもない。あ、銃持ってきてねえ。

結論。いたって平凡。

おいおい、これは本格的に迷宮入りだぞ。

「なんだってこんな目に逢うんだ……」

ため息をつきながら、俺は教室への道を歩き出した。

我が教室は今日も騒がしい。

わけではなかった。

「なあ、岡崎」

「どうしたんだよみんな、俺ばっか見て」

別に俺が自意識過剰とかそんなんじゃないぞ。本当に、みんな俺ばかり見るのだ。

クラスメイトの一人が口を開く、意を決したように。

「なんでお前、片目だけ充血してるんだ？」

コンタクト、付けてなかった。

そっだ、俺あのビルでコンタクト外したんだよ。

くそ、やっぱりあんなに軽々しく力を使うんじゃない！

待てよ。

ってことは、狩野もこの目を見たのか？

「おい、聞いてんのか？」

「ん、ああ」

ふと気づけば、クラスメイトはいぶかしげな目で俺を見ている。

くっ、こっとなったら本当のことを言うしかない！

「みんな、よく聞いてくれ」

信じられないかもしれないけど、これは本当のことなんだ。

俺はある日、至って普通に過ごしていた。

けれど、非日常はすぐそばに迫ってきていた

(中略)

俺は戦慄した。

自分の体に、そんな未知の病魔が潜んでいるなんて夢にも思わなかったからな。

この病気と立ち向かうには、何より精神を強く保つことが大切だ
って医者から言われた。

正直、俺には自信がなかった。

(中略)

俺はひたすら走った。

いく当てもなく走った。

もう嫌だった。

終わらない投薬、何の変化もない日常、真っ白な病室。

それら全てから、逃げ出したかった。

そうして俺は走り、走り、走り、どこか知らないところでぶつた
おれた。

そこで俺は、彼女と出会った。

(中略)

最後の希望である緊急手術が終わった後、俺は鏡を見た。

真っ赤になった右目。

病魔の後遺症。

けれど、これは勲章だった感じた。

俺は逃げずに、病と真っ向から闘えたんだから。

ふと、あの少女の声がよみがえった。

俺に、闘う勇気をくれた幼き少女。

彼女の所に行ってみよう、そう思った。

(中略)

彼女が死んだのは、俺と合った3日後だったらしい。

俺は彼女の墓に花を添えた。そして手を合わせた。

出るはずの涙もでない。あまりにも思い出が少なすぎたから。

けれど。

俺はあいつを忘れない。

そう誓って、俺は墓を後にした。

「……………というわけなんだ」

俺は話し終えた後、クラスを見回す。

『『『……………グズ、グズツ……………ズズツ、グスグス』』』

こいつら馬鹿だ。完膚なきまでに阿呆だ。

「すまない、みんな。今まで隠していて」

「いや、いいよ……………その目の赤色は、きっとその少女の血なんだ。その少女は、お前の中で生きてるんだ」

クラスの男子が、目から塩水を垂らしながら話しかけてくる。

「そうだな。俺はあいつを忘れない。あいつの分も、生きてみせる」

もっともらしく言うと、女子の一部がさらに号泣した。

やばい、こいつら簡単に騙されすぎだ。

これじゃあ瞬時にオレオレ（いや、今は振り込めだったか）詐欺

に引っかかっちまうぞ。

その後、先生が入ってくるまでクラスはしんみりとした空気に包まれたままだった。

12・マイ・エネミー

俺は目の前の光景を見つめていた。

俺の命を狙って飛来する銃弾を、手に持つグルカナイクで弾き飛ばす。

その動作をする度に、このウジ虫共は驚愕に悲鳴を上げた。

こいつらの武装はハンドガンのみ。動きからして割り々と手だれた暗殺者だ。

「殺す……殺す……殺す」

俺の思考を支配する、絶対的な殺意。

ウジ虫達の返り血で、白いカッターシャツは真っ赤に染まっていた。右目も同じ色に染まっている。

俺は殺戮をやめない。ゆっくりと近づき、刃で敵の喉を断ち切る。

その度、鮮血が俺に降り注いだ。

「ひっ……ば、化け物……」

俺のそばで、銃弾を打ち尽くした男が呟く。

自然と口元が吊り上った。

人を殺す快感。

自分より格下の者を自らの好きなように弄び、命を奪う。

「ああ、俺は化け物だ……狂ってる」

言葉とともに、ナイフを横に薙ぎ払う。

その一閃は、男の右目と左目を繋いだ。切りつけられた顔面が裂ける。二つの眼球が、それぞれ真っ二つになって地面を転がってゆく。

『鮮血の狂戦士』

誰がつけた名か、もう皆忘れてしまっている。

しかし、それは決して外れてはいないだろう。

ガキン！

撃鉄が起きる音。

刹那、俺が真上に振り上げたグルカナイフが銃弾を弾く。弾かれた銃弾は、綺麗に発射した銃口へと帰って行った。

「なっ!?!」

拳銃が爆発し、破片が持ち主の手首をズタズタにする。その破片

俺はナイフを握り直した。

再び、人間を動かない屍にするために。

「うわあああああああああああああああああああああああ
っ！！！！！！」

絶叫が、俺の部屋に響いた。ベッドに横たわっていたらしく、俺
が飛び起きた反動で掛け布団が床にずり落ちた。

「ど、どうしたんですかっ!?!」

扉をぶち破り、久美ちゃんが部屋に躍り出る。

「く、来るなあっ! 俺に、俺に近づくなあっ!」

なんだ、さっきのイメージは!?! 夢か!?!

「どうしたんですかっ!?!」

それでも久美ちゃんは俺に近づき、俺の頭に手を回した。

「ッ!?!」

思わぬ行動に、俺の思考が麻痺する。

「…………お兄ちゃんは、くみのこと何にも知らないのに、くみのこと
家族って言うてくれました。だから、くみもお兄ちゃんを、信じて
みよっと思えます」

俺は自分の服装を確認する。

血まみれのカッターシャツ。

床に詰襟が落ちていることから、きっと外ではそれを羽織っていたのだろう。

「お兄ちゃん、さっき通学路の近くで人が殺されてたんだって」

ビクッ！

俺の体が不意に反応する。バカ、これじゃあ「俺がやりました」って言ってるみたいなものじゃないか。

いや、あえてこの話題をダイレクトに持ってきているということ
は、久美ちゃんは確信しているのか。

俺の犯行だ、と。

じゃあなんで彼女しかいない？ 普通、誰か人を呼ぶはずだ。いや、ひよっとしたら外に警察が待機しているのかもしれない。何か、武器はあるか？

「……これ、探してるの？」

そういつて彼女は、俺の私物を見せつけた。

血まみれのグルカナイフを。

これで決まりだ。

俺が犯人だって、バレてる。

「久美ちゃん」

俺はできるだけ声を抑えて、彼女に囁く。

「隠していて、すまない。俺は」

彼女は目を細くして、俺の言葉に耳を傾ける。

「殺し屋だ」

「やっぱり」

その言葉に、俺は思わず彼女を凝視した。まさか、前から気付かれてたのか？

「あんなにケンカが強いなんて、いくらなんでも異常だもん。それに」

彼女はそこで、視線を俺の机に送った。俺もつられてそちらを見る。

嘘だろ？

机の上には、銃火器が山のように積み上げられていた。

「掃除してたら、こんなのがでてきたもん」

バカな、あり得ない。それぞれ押入れの裏部屋や天井裏、パソコンのモニターの中にトイレの便座カバーの下、枕の中などの見つかりにくい場所に隠していたはず。けれど、見る限りではそれら全てが見つかっている。俺が学校に行つて、帰つて来るまでの時間でこれだけ見つけるなんて警察でも到底ムリだ。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんは強い？」

唐突に、久美ちゃんは尋ねてくる。

「……一応、そこらにいる奴らには負けない」

「だったら、これをお兄ちゃんにあげる」

そう行つて久美ちゃんは、ポケットからナニカを取り出した。

「フロッピーディスク……？」

手渡された、黒い磁気ディスク。

それが俺の手に触れた瞬間、久美ちゃんは口を開いた。

「それには、『断罪会』だんざいかいについての情報が保存されています」

ドクッ！

俺の心臓が、大きく跳ねた。

断罪会？ 彼女は今、確かにそう言ったよな？ そんな、嘘だろ？
なんで、なんでよりにもよって久美ちゃんが、一番平穏なはずの久美ちゃんが、それを？

「……聞き覚えが、あるようですね」

身震いするほど丁寧で、冷淡な声。本当に、俺の目の前に立つ少女は『右原久美』なのか？

血まみれのカッターシャツを握り締め、俺は震える声を出した。

「教えてくれ。君は、一体何者なんだ？」

その質問に彼女は、かぶりを振って答える。

「逃走者、別の呼称を用いれば裏切り者です」

ドクッ、ドクッ！

再び、俺の動機が激しくなる。

「私は『断罪会』から脱走し、裏路地に入ったところで複数の青年に襲われました。そこを貴方に救っていただいたのです」

脱走……？ why？ どうして？ なんで？

「あの組織は、日本最大にして最強の暗殺者集団です」
アサシンチーム

そのことは、俺も知っている。数年前、突然発足して、瞬く間に業界トップに上り詰めた謎の集団。この世界では、知らないほうが珍しい。

「そして 貴方が以前所属していたチーム、『BREAKERZ』を罠に陥れた犯人です」

刹那、俺の頭から、ナニカがすっぱ抜けた。

「は……？」

久美ちゃんは。コイツは。この女は、何て言った？

「貴方が所属していた、中堅暗殺者集団『BREAKERZ』。構成員は合計15名でしたね」

組織の情報を、スラスラと並べる久美ちゃん。

俺が口を開こうとした瞬間、彼女は重たげに唇を少し開けた。

「……私は、『BREAKERZ』のリーダー、みきはろとおる右原徹の一人娘です」

俺の世界はその瞬間、木っ端微塵に破壊された。

ここから、悲劇が始まる。いや、惨劇と呼んでもいいかもしれ
ない。

けれど、そうなることは前から予知されていたのだろう。俺が、
気付かなかっただけ。

俺は真っ白になった脳内で、ついさっき俺が起こした大量殺人事
件の一部始終を、思い出していた。

13・アイ・アム・ユア・エネミー

俺はその日、弁当を家に忘れていた。

昼食時間、みんながワイワイ騒ぎながら弁当箱を取り出すのを、親指をくわえて眺める。

いいなあ。

狩野は欠席。まったく、どこほつつき歩いてんだろうな。

「お、岡崎ひよっとして弁当忘れちゃいましたか？ 昼飯抜きですかあ？」

クラスメイトがニヤニヤしながら、肩に手を回してくる。

「うっさい、関係ないだろ」

手を叩き落とし、俺は辛らつな視線をその生徒に向ける。

「ほう。せっかくこの卵焼き（砂糖小さじ2杯）を一つ、お主の腹の中に奉納してやろうかと考えていたのじゃがなあ」

なぜに時代がかかった口調？ ここは江戸じゃねえぞ？

「くっ……」

俺は親の敵でも見るかのように、卵焼きを掲げる男子生徒を睨み付ける。

完全な、ことう着状態。

気づけばクラスメイト全員が、俺たちの動向に視線を集めていた。
じりじり。じりじり。

少しずつ距離を詰める。

狙うは奴の肝臓。一步で距離をなくし、瞬時にボディーブローを叩き込む！そして、卵焼きをかつさらう！

射出タイミングをサトル・オカザキに譲渡。……アイ・ハブ・コントロール。待ち侘びた？俺は憂鬱だよ。

岡崎悟、作戦行動に入る！

「ッ！」

無言で一步を踏み出し、距離を詰める。

「ハッ！ 見えるんだよ！」

「何ッ！？」

しかし男子生徒は、半歩サイドステップし俺から距離をとった！まさか、読まれた！？いや、踏み込みの予備動作を見て、反応したっていいのか！？

「思考と反射と砂糖の融合。それこそが、卵焼きのあるべき姿！」

なんて戦闘技術なんだ。クラスにこんな奴がいたなんて、俺はどうして気づかなかったのだろう。

「思考と反射は関係ねえだろ！　っていうか主材料の卵はどこへ行つた!?」

「脳内補完だ！」

「できるかあああああああああああああああああつ!!」

もうこうなつては手段は選べない。無理やりにも（いや、元々力ずくな作戦だったけど）卵焼きを奪取する！

「　　シッ！」

齒の間から息を吐き、生徒の頭部を狙ってハイキックを放つ！

「分かってねえなあ、岡崎。お前は完璧な卵焼きなんかじゃねえ！」

だが、またもや奴は、しゃがんで俺の蹴りをかわす。

「まず俺は、卵焼きなんかじゃないつっつもの!!」

残念だが、ハイキックはフェイクだ！

腰を無理やり捻って、キックの動作を中断させる。それも、上体をかがめた奴の真上で！

「なっ!?!」

驚いたように上を見上げる男子生徒。その鼻っ柱めがけ、俺は脚を振り下ろす！

バガツ！

いやな音が響き、生徒は床に沈む。

「引っ込んでいろ、男子生徒A。卵焼きを前にして何もできないお前に用はない。俺は食う、他人の卵を奪ってでもな！」

そう言っただけ俺は、奴の右手を見た。

ない。

さっきまであったはずの、黄色い物体が、ない。

あはは、卵焼き、消失しちゃった。

「うーん、ちょっと甘いですよお」

「いや、久美ちゃんの声のほうが甘いよ。俺もう、とろけちゃいそっだよ」

でへへ、とだらしなく笑いながら俺は久美ちゃんに微笑む。彼女も「もう、あなただったら」とまるで夫婦漫才みたいなり取りをしていた。

思考、フリーズ。

ああああああっ!?!」

運命の分かれ道。ターニングポイント。

ああ、もしタイムマシンがあるなら、迷うことなくその日、ドレミドから起きた俺に近寄って言うね。

『昼食は、コンビニで買っていけ』

って。

「はい、お弁当ですっ」

「あ、どうも」

あれからしばらくして、どうにか精神を落ち着かせた俺は、久美ちゃん手作りの弁当を味わっていた。

「お前って、妹いたっけ？」

復活した男子生徒Aが、俺に話しかける。

「妹じゃなくって、くみですっ」

「まあ、同居人？」

あはは、と力なく笑う俺。みんなはしばらく俺を凝視し、そして口を開く。

『『『……ロリコン?』』』

「ドチクシヨオ

」!

そう言われても仕方ないよね。うん。

「お兄ちゃんは、くみにとっても優しいですよ?」

「やめてくれ! これ以上、傷口を広げないで!」

ああ、俺の評判がどんどん下がっていく。

『とんでもないダークホースね……』

『まさか、宮ちゃんと真下先輩以外にあんな候補がいたなんて……』

別の方向に。

っていつか、候補ってなんだよ! 俺、彼女選べるほどいい立場
じゃないからね!

「で」

「?」

「お兄ちゃん、今日はいつ帰ってくるんですか?」

「さあ、分かんないな」

平和自治委員もあるし。

「じゃあ、くみ今日、お兄ちゃんが帰るまで待つです！」

ええ！？

ちよつと待て！ それ、嬉しいことは嬉しいんだが、周囲からの視線がかなりイタくないか！？

「くみと、一緒に帰りたくないんですか……？」

岡崎悟、陥落。所要時間、コンマ3秒。

「OK。一緒に帰ろう」

人間として、何か失っちゃいけないものを失った気がする。

そんな俺を、クラスメイトは生暖かい目で見ていた。

帰り道。

先生は久美ちゃんが泣き落とし、なんとか『高校見学』というところで久美ちゃんは教室に残った。

一応年齢的には中学3年生のため、受験生として志望校見学なのだろう。

いや、中学3年生だよね？ 中3なんだよね？

なんかフェルマーの定理とかいうのをスラスラ解いてたけど、中

学生ぐらいの年齢なんだよね……？

平和自治活動の時は、『自治委員見習い』ということで体験。その日一日、本家である俺と由美は出番がなかった。

そりゃそうだ、年下の子に涙目で「もう、やめてあげてください……」なんて頼まれたら、断れないだろう。断る馬鹿は俺のところに来い。なぶり殺すから。

由美は久美ちゃんを気に入ったようで、可愛がっていた。俺が久美ちゃんを可愛がると、頬を引きつらせていたが。

「今日は、とっても楽しかったです」

「そうかい、そりゃ良かった」

学校中の生徒から『ロリコン』の烙印をおされた甲斐があったよ。

「それですね、お兄ちゃんのクラスの人から、手紙をもらっちゃいました」

「誰だい？」

「卵焼きを持ってた人ですっ」

「そうかそうか、良かったね」

後でブチ殺す、あの本物のロリコン。

たわいもない会話を続ける二人。

「あ、俺ちよつと用事があるから先に帰ってて」

「はい」

大人しく言うことを聞き、彼女はステップで先へと進んでいった。

俺は詰襟の内ポケットに手を入れ、その中身を抜き出した。

瞬間、後ろから「ガキン」と撃鉄の起きる音。

俺は振り向きざまに、手元を横に振るう。

手に握られた、鈍く光るグルカナイフ。それは、俺に向かって放たれた銃弾を弾き飛ばした。

ゾワゾワ、ゾワッ！

迫りくる殺気。それらは、ここが戦場になったことを意味する。

けれど、俺はそこで冷静に思考する。

今の銃弾は、俺を狙ったんだよな？

いや、あの銃弾の延長線上には

右原久美。

間違いない。今、こっちに向かっている奴らは。

久美ちゃんを殺そうとしてる。

俺の中でナニカが、ゆらりと動いた。まるで蛇が鎌首をもたげるように、しなやかで残忍な動き。

「さて、と」

ゆっくりと右目に、手を伸ばす。しかし。

「あ、もう外れてたんだった」

俺は嘆息し、手元の刃物を握りなおした。

『いいか、久美ちゃんはもう俺の家族なんだ！　こここの、新しい家族なんだ！　だから、そんな風に自分を言うな！』

その言葉に、嘘偽りはない。

だから、俺は家族を護るために、闘う。

ゆっくりと振り向き、背後に立つ男たちを確認した。

全員が全員、拳銃の狙いを俺に定めている。

「さあ、皆殺しタイムだぜ、ウジ虫」

銃声が、戦闘開始の合図となった。

あれは、『断罪会』の連中じゃない。

あのウジ虫たちもそれなりに手だれてはいたが、『断罪会』には及ばない。

久美ちゃんが俺のベッドで眠り込んだ後、俺はインターホンをとった。外線1のボタンを押し、ドアの外に話しかける。

「……よう。いつまでそこにいるつもりだ？」

しばしの沈黙。

『おや、気づかれてたようですね』

「当たり前だ。そんなに殺気ビンビン出したら、誰だって……ってわけじゃないけど、少なくとも俺は気づく」

インターホンの画面に現われたのは、黒いフードをかぶった男。身長からして、俺と年代じゃないだろうか。

けれど、その右目に刻まれた刀傷が、数多の修羅場を潜り抜けてきたことを誇示している。

「……その傷」

『ええ。貴方につけられたものです』

なんの躊躇いもなく、言い放たれた。

『本来なら、今すぐ貴方を蜂の巣にしてやりたいところなのですが』
そう言って男は、にっこりと微笑む。……何を言いたいのか分かった。

「ちょっと待ってろ」

俺はインターホンを本体に置き、そっとドアに近寄る。

ついでに机の上から、拳銃を一丁取り出した。特に隠すこともせず、右手に銃をぶら下げたまま、俺はドアを開け放った。

「お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな」

フードを外す男。なかなか整っているが、中性的で女か男か、時折迷うような顔立ち。

「名前は、ああ、騎士その二か」

「やめて下さいよ、僕の名前は『フェンル・K・アーライト』です」
「ややこしい名前だ。」

「で、アーマライトさん」

「アーライトです。M16の生産メーカーじゃありません」

丁寧なツツコミなことで。

「今日は何のようだ?」

そう言うと、アーライトはかしくまったように咳払いを一つし、

「『断罪会』に入って頂けませんか?」

言い放った。

「は?」

想定外の言葉に、俺の動きが止まる。

「これは皇帝陛下からのお達しです。できれば、良い返答を望むと」

「あのオッサンがか? 俺を殺そうとしたくせに」

「今は二代目です」

「変わったのか」

アールライトは首肯。俺はため息。

「皇帝つて、そんなにコロコロ変わるもんか？ まさか、どっかの騎士団見たく、ゼロレク」

「それはありません」

即答だった。

「で、俺に『断罪者』になれってか？」

しかし、男は首を横に振った。

「いいえ。今なら、第6の『断罪の騎士』の座を設けるそうです」

不満そうに言うアールライト。

「……貴方にも、損はないと思いますけど？」

男はそう言う。

「もし断るなら、それなりの制裁を下します」

だろうな。

「ところでなんだが、お前は右原久美を知っているか？」

ふと気になり、質問してみる。

「ああ、あの裏切り者ですね」

裏切り者。その言葉が、俺の脳内で反芻された。

「殺します」

あまりに現実離れした言葉に、俺の思考が停止する。

「彼女だけではありません、貴方の周囲にいる人物は全員抹殺し、『岡崎悟』の存在も消去するのが掟です」

なんだ、こいつは何を言っている？

「右原久美はどこにいますか？ できれば今すぐ始末したいのですが」

そう言ってアークライトは、懐から拳銃を取り出した。

ステンレス製のリボルバー、『S & W M 6 0』を見た瞬間、俺の中でナニカがキレた。

「おい」

右手に持った拳銃、『コルト・ダブルイーグル』の銃口を、男に向ける。

「へえ、『コルト・ダブルイーグル』ですか。確か……」

俺には、こいつが次になんて言うか分かる。

なぜなら、こいつは被害者で俺は加害者なのだから

「確か、僕の兄を撃ち殺した銃ですね」

ああ、そうだよ。

「で、彼女を殺す前にお聞きします」

アーライトは、俺の目を見つめる。

「貴方は、『断罪会』に入りますか？」

もしこいつらが、俺から『日常』右原久美を奪うなら。

もしこいつらが、俺から『純白』真下由美を奪うなら。

もしこいつらが、俺から『相棒』有宮狩野を奪うなら。

「一回だけだ。一回だけ、言っとく」

俺は 銃口を床に向けた。

そして、言う。

自分に言い聞かせるように。

世界に宣言するように。

「俺は、お前らの敵だ！」

アーライトは、立ち去った。なんでも、久美ちゃんは俺と一緒に始末するらしい。

今日は報告のために、帰還するとか。

俺は、寝ている久美ちゃんに視線を送る。

絶対に、護り抜く。

護ってみせる！

きつと俺は、これから多くの人を殺めていく。

だけど、俺は

「あ、おはようです、お兄ちゃんっ」

「おはよう、久美」

ほえ？ と呆ける久美ちゃ いや、久美。

「さあ、今日は休日だぜ。どっか遊び行こうか」

その言葉に、久美はパアツと表情をほころばせた。

「じゃあじゃあ、遊園地がいいですっ！ あ、温水プールも捨てがたいなあ。でもでも、サ店もいいかもしれないですねっ」

おいおい、最後の、なんかえらい時代がかかってなかったか？

「じゃあ、サ店に行くぜ！」

ノるけどな。

「ドン！」

きつと「ド」の『ド』の濁点は、星型になっているだろう。

「って、なんで久美、効果音担当？」

「えへへ。くみ、学校の劇とかでよく音響担当だったですっ！」
口で『ドン!』と言われても、反応に困るんだけどねえ……

「よし、じゃあ行こうか」

ついでに、久美の服を買うのもいいかもしれない。

けれど、幸せな日常は、長くは続かなかった。

ガチャッ。

ドアが開く音。俺も久美も、そちらを見る。

「あ」

久々に見る顔。

「お帰り、狩野」

俺は話しかけるが、彼女は反応しない。

ただ、一部分を。

右原久美を見つめる。

やがて、二人の少女は同時に口を開いた。

日常が、音を立てて崩れていく。

何の警戒もしていなかったところで、足元をすくわれた感じ。

そして何より、無防備な自分に銃口を突きつけられた感覚

「久美？」

「姫様？」

俺は、護り抜けるのだろうか。

13・アイ・アム・ユア・エネミー（後書き）

第2章、終了です。

あと、気づいてらっしゃるかもしませんが、章が変わるとサブタイトルの文体が変わります。次回は……お楽しみに（汗）

……サブタイトル、早く考えなくっちゃなあ。

14・Unlock(前書き)

第3部ですが、なぜかしよっぱなから急展開。
執筆、遅れるかもしれませんがご了承ください。

14・Unlock

よく、イマドキのカフェではカップルがくつろいでいる。

屋外に出されたテーブルの上で、仲良くランチタイムだ。

さて、ここで皆さんに質問。

Q：もし、カフェテラスの屋外スペースで、男一人女二人の客がいて女同士が睨み合っているのに男が平然とケータイをいじっていたらどうする？

A：とりあえず距離をとる。

というわけで、ただいま俺の半径12mには人がいない。イヤガラセ？

「……………」

「……………」

最初に弁明しておく。俺は悪くない。俺は何も関係ない。コーヒーでごまかす。甘い。甘すぎる。砂糖何杯入れたんだよ、これ。

ケータイではなく、オーダーメイドの携帯端末でEメールを確認する。受信メールは、ない。

「……………で、いい加減説明してくれない？」

「姫、そんなんだからあなたはバカなんです」

あはは、と笑って流す狩野。

「なあ、姫って何だ？」

一人寂しく、ケータイをいじる若者を眺める俺。

「私」

はあ？ と呆れるしなかない。自分で自分のことを姫なんて言うとは、どうか頭でも打ったんじゃないだろうな？

そう思って俺が視線を上げた瞬間、俺の動きは止まった。

迷うことなく、俺を射抜くその眼。

堂々と、背筋を伸ばして語る姿勢。

それらすべてが、今から行われるナニカに、真実味を持たせてい

た。

なあ、今からお前はいつたい何をするんだ？

そう聞くことすらできない、雰囲気。

「私は、」

彼女は、何かを言おうとしてるんだ。なんで俺は何もできないんだ。彼女だけを苦しめるつもりか？

あの時みたいだ。

「私は、」

彼女は語る。俺は、何もできないまま。

「私は、『断罪の姫君』です」

世界が、止まった。

「と言っても、『元』だけどねっ」

そう行つて舌を出す狩野。

コイツハ。コイツハ、イッタインテイツタ？

思考の濁流があふれ出し、せめぎ合い、混ざり、濁る。

『断罪の姫君』、日本最大の暗殺者集団、『断罪会』の実質NO.2である女。

待て。ということは、まさか

「狩野っ！ お前、まさか！？」

彼女は弱弱しく微笑み、着込んでいた服を握ろ、めくる。

そうして露になった腹部。

くつきりと残る、刀傷。

俺だ。俺が、みんな傷つけたから。

あの時。他人ばっか頼ったくせに、最後の最後で自らの保身を優先したから。

だから、俺のせいで

「それ、俺がつけた傷だろ？」

「
うん」

唇をかみ締める。

メール受信の着メロが、あたりに響いた。のろのろと端末を手にし、画面を見る。

『受信：未登録ユーザー』

題：無題

本文：ちようど三人そろっているようなので、そちらへ向かいま
す。奇襲は趣味じゃないので、首を洗って待っておいってください。

K・アーライト』

あの野郎。

「狩野、久美を連れて逃げろ」

俺は懐の拳銃を確認し、視線を周囲に巡らせる。

その行動で大方理解したのか、彼女は同じように腰へ手を添えた。

「いや、あたしも残る。『ベレッタM92』の初舞台だ」

その言葉に、俺は凍りついた。

『ベレッタM92』だと？

それは、まさか……

「テメエ、さては新しく拳銃買いやがったな……！」

狩野の動きも止まる。冷や汗が頬を伝っていた。

「や、これはあたしが昔から持ってたやつで」

「嘘つけ。お前の拳銃、ブローニングだったろうが」

その言葉に、狩野は黙り込む。ああ、また我が家の家計簿は火の車だ。

「とにかく、早く逃げろ。久美を連れて」

「嫌よ！」

俺の提案を拒絶する狩野。くそ、もう時間がないってのに！

そして。

最も恐れていた時間が、やって来た。

「Hello」

フェンル・K・アールライト。

その右手には、リボルバー式拳銃『S & W M 6 0』が握られている。

「来たか」

俺は『コルト・ダブルイーグル』を引き抜き、地面と水平に構えた。

そして、一瞬！

ガキーン！

空中で火花が散った瞬間　俺が飲んでいたコーヒーカップが砕け、若者がいじっていたケータイが叩き折られた。

周囲に沈黙が下りる。

空中でぶつかり合った銃弾は、また周囲へ被害を撒き散らすだろう。ああ、コーヒーがもつたない。ケータイはどうもいいが。

俺とアーライトは、同時に口を開く。

「祈りを済ませておくんですね!」

「今度はこつちが『断罪』してやるよ!」

銃弾の代わりにぶつかり合う、怒声。

口を閉じると同時、俺は引き金を二回引く。

一発は地面へ、もう一発は直接相手へ。

「チッ!」

アーライトは舌打ちすると、空中にある銃弾を撃った。

計画通りなら、その際にもう一発の弾がアーライトの腹部を貫くのだが

「なっ!?!」

アーライトが撃った銃弾は、俺の銃弾に当たって軌道を変更し
もう一発の銃弾さえ叩き落した!

ありえない! 一回の発砲で二発の銃弾を弾くなんて!

「他所見とは、余裕ですね!」

「!?!」

ほとんど本能的な動きで傾けた首。そして、その俺の首をアーライトの銃弾が、いや、俺が放った銃弾が引き裂いた。

ビッシャアアアア！！

噴き出す鮮血が、俺の服を汚す。

まさか、俺の銃弾を弾き返してくるとはな。

ちよい、予想外だった。

止まらない血。けれど、妙にクリアな思考。

なるほど、なんとか即死は免れたが、この調子じゃ3分持たないな。

「『鮮血の狂戦士』ともあろう者が、驕おごりましたね」

余裕の笑みを浮かべるアーライト。

「さて、次は」

そう言ってくるりと奴は体の、向きを変える。もちろん先には狩野と、久美。

やばい、助けに行かなくちゃ

『俺は岡崎悟、お前のなかの自分だ』

「自我、みたいなもんか？」

『ちよつと違うな』

そう言って青年は、窓の向こうに視線を向ける。

夜。

さっきまで夕方だったのに、いつのまにか空には夜のとばりが降りていた。

『早いだろ？』

青年はつまらなさそうに夜空を見る。

『お前が生き急いでるってことだよ』

「さっき死んだはずだけどな」

冗談めかしてつぶやいた。青年は興味なさそうに鼻を鳴らす。

『バカか。自分のために散々人を殺したくせに、拳銃の果てには他人に殺されるとはな』

「ま、あいつの兄さんを殺したのは俺だし」

『そんなに死にたいのか』

不意に、青年の口調が変わった。

「ああ。俺の生きる意味は、とっくの昔に失くしてる」

苦笑いを浮かべ、俺も視線を窓に向けた。夜。漆黒。

『じゃあ、そんなお前に朗報だ』

その言葉に、俺は青年へ視線を向ける。

青年は俺の顔を一瞥し、唇を開いた。

『上村恵美、生きてるらしいぞ』

「マジか」

『マジだ』

俺は青年の顔を見つめる。

「じゃあ、生き残らないとな」

『ああ、生き残らないといけない』

俺たちは頷き、互いの手をとった。

「それ、本当だろうな」

『ああ。居場所は皇帝が知ってる』

その言葉に、俺は眉にしわを寄せた。

「皇帝が？」

『ああ。断罪皇帝だ』

「ちょうどいい。あのオッサンともいい加減白黒つけたかったんだ」

『二代目じゃなかったのか？』

「そっぴやそうだった。どうせまたロリコンだろ」

『それはお前だ』

「うるせえ」

そんな下らないやり取りをしている間に、俺の体は透けるように透明になっていく。

『絶対勝てよ』

と、急に真面目な表情になった青年が、ぎゅっと俺の手を握った。

「当たり前だ、俺を誰だと思ってる？」

不敵な笑みを浮かべ、俺は尋ねる。

俺たちは顔を付き合わせたまま、同時に口を開いた。

「『岡崎、悟』」

ふっ、と笑ってしまふ。

「そろそろだな」

体が、消える。

『お前なら、勝てる。なんせ、俺だからな』

その言葉を聞きながら、俺は自然とリラックスしていた。

次に心へ来るときは、朝日が見たいぞ。

意識が、空中に溶けた。

☐

『K O O C C U』

14・Unlock(後書き)

サブタイトルは、本物の英単語に。前回のカタカナじゃありません。今回のサブタイトルは、『unlock』です。意味は「ロックを解除する」。そのまんまです。

では、次回にもご期待ください！ 応援よろしくお願いします！

15・Release

正直、目の前で何が起きたのか分からなかった。

目の前で、悟が倒れる。

スローモーションのように、ゆっくりと。

死ぬの？

悟が、死ぬの？

いやだ。いやだ、いやだ、いやだっ！

悟の首から、鮮血が噴き出る。

シヌ？

サトルガ、シヌ？

イヤダ、イヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダ！！

訳も分からず、錯乱し、混乱し、発狂し、あたしは眼をつぶった。

次に眼を開けた時、これが夢であるように

力を抜き、開眼したあたしを待っていたのは。

拳銃の銃口だった。

殺される？

撃ち殺される？

「元『断罪姫』、有宮狩野さん。残念ですが、お別れですね」
さつきまで悟と対峙していた男が、目の前にいる。

あ、殺される。

あたしだって、いつぱい人を殺してきた。

それしかできないから。

そうすることでした、あたしは『生きてる』って実感できなかったから。

他人の死に触れて、初めて自らの生を確認できる。

当然の罰、かな

けれど。

死ぬわけにはいかない。

死にたくない。

あたしは。

まだ、ここで。

大切な人たちと、生きていたい

(まったく、わがままなお姫様だ)

ふっと、アイツの音が聞こえたような気が、した。

体が、軽い。

まるで風のように動く。

それでいて、決して腕力は弱くない。いや、普段より強い。

なんにしても、いつもとは違うんだろうなと、頭の片隅で思考が
続く。

何の疑問も持たず、チカラを行使する。

ふくらはぎの筋肉、ひざのバネ、それら全てを、いや、それらにかけられた枷を

『Unlock』

世界が、一瞬で掻き消えた。

ベルトに差したダガーを2本引き抜く。

1本を壁に、もう1本は俺の手の中に。

アールライトとかいう男は、驚いたように俺を見て、慌ててダガーを打ち落とした。

遅い。

世界がスローモーションにしか見えない。

そんな光景の中で、俺の中の全てを

『Release』

血しぶきが、カフェテラスを赤く染めた。

15・Release(後書き)

今回のサブタイ(サブタイトルの略)は、『Release』。解
放するという意味です。

次は、ちゃんと話を進ませます・・・きつと。

痛い。

目を開けた瞬間、体中の痛覚が、俺の脳に『痛み』を訴えてきた。外をパトカーのサイレンが駆けた。幸いなことに、ここには気づいていない。

「お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

俺のベッドに腰掛ける久美が、心配そうに俺を見る。

「ああ、俺なら大丈夫。それより、冷蔵庫にあるプリンが賞味期限ギリギリだったから、早く食べてくれないか？」

「そんなことより、貴方の体を心配したらどうですか？」

突然、部屋に響いた声。

「な………！」

思わず体を起こそうとするが、それは久美に止められた。

俺は口を開く。

「なんて、由美がここに………！？」

カフェテラスで、俺はなんとかアーライトを退けたらしい。

一瞬のことで何がなんだか分からなかったが、突然俺が消え、アーライトの体が一瞬で切り刻まれたそうさ。

俺はあいつに勝った、ということか。

相手も死んでおらず、满身創痕で帰還したらしいが。

けれど。

人が、たくさん死んだ。

俺が殺した。

「なあ、悟はどうだ？」

岡崎悟が再び眠りについた後、その家に居た3人の少女はリビングに集まっていた。

「お兄ちゃんなら、ぐっすり寝てますっ」

元気に答えたのは、この家の居候である右原久美。

「問題ないですわ」

そんな彼女を見て、優しく微笑む真下由美は、心なしか元気がなかつた。

「それで、さ」

元々岡崎と同居していた有宮狩野は、心配そうに彼の寝室を見る。

「あいつが何をしたのか、お前も見たる？」

狩野の言葉に、久美の顔が強張る。

「暴走した、というのは本当ですか？」

由美の質問に、狩野はゆっくりと頷き、

「あの場に居た一般人を、皆殺しにした」

言い放った。

沈黙が、場に降りる。

それを破ったのは。

他にもない、岡崎悟自身だった。

体が、軽い。

まるで、風のように動く。

手に握られたダガーで、目の前の敵を切り裂く。

一人、二人、三人。

何かおかしいと気づいたのは、四人目の首を引き裂いてからだ
た。

血の海の中で、ふと首をかしげる。

誰だよ、こいつら。

と、新たに人影が見えた。

「ッ！」

あいつらは、ケータイをいじってた若者じゃないか？

つまり。

「恐る恐る、視線を地面に落とす。

赤く染められた死体。

子供連れ。

学生服。

一般人。

何人？

どうして？

誰が？

殺した？

それに、3人の少女たちは反応した。

慌てて寝室に駆け寄り、勢いよくドアを開ける。

「悟っ!?!」

真っ先に口を開いた狩野は、驚きのあまり立ちすくんだ。

「お兄ちゃん!?!」

「悟君!?!」

後から来た二人が、慌てて部屋に入ろうとし、同様に立ち止まる。

ポロツ。

水滴が、ベッドに滴り落ちる。

ポロツ。

それは、暗闇の中でも確かに煌いた。

ポロツ。

そう、少年の涙は。

16・Tears（後書き）

今回のサブタイトル、『Tears』は、『涙』という意味です。
次回からは、ようやく主人公が動き出します。

大切なものを、人を、そして何より思い出を護るために
応援よろしくお願いします！

17・Departure

目を開ける。

もう、混乱したりしない。

網膜を通して俺の脳に送られた映像は、いささか刺激の強いものだった。

枕は引き裂かれ、中の綿があふれ出ている。引き倒された棚に、破壊された壁。

それらをやった犯人が自分である事に、寸分の疑いも無い。

リビングでは、ソファアに3人の少女が横たわっていた。

狭いスペースの中で、身を寄せ合って寝ている。

3人が3人とも、頬に涙の筋道を残していた。

泣かせちまったか。

俺はズレている毛布を掛け直してやると、自分の部屋に戻る。

出かける支度をするために。

1枚の便箋に、ペンを走らせる。

彼女達が目覚めてこれを見る時、自分は今ここにはいない。

デイパックを背負い、玄関に立つ。

ここまで重武装をするのは、何年ぶりだろうか。

俺は小さく息を吐き、そっと呟いた。

「行って来ます」

答えは、ない。

俺はゆっくりと立ち上がり、ドアノブに手をかけた。

薄汚い裏路地を、歩む。

路地を左に曲がり、奥に進み、右に曲がり、建物の中に入り、裏

口から出て、また左に。

裏の裏の裏。

そう表すのが自然なところに、俺は脚を運んでいた。

錆びかけのドアを二回ノック。「らっしゃーい」なんて悠長な声が聞こえる。

「ちーっす」

「お、悟か。どうした、俺オススメのエロゲでも買いに来たか」

中に入れば、それなりに広く、小綺麗な部屋。掃除も行き届いてるし、壁紙でコンクリートを隠していて見苦しくない。

その中央に、随分と爽やかな笑みを浮かべた男が居た。

「岡田^{おかた}、表じゃなくて裏だ」

その男の、表の仕事は中古のゲーム屋。といってもレアモノやらプレミアやらばっか扱ってる穴場で、マニアの間では結構有名らしい。俺もギャルゲを買った事があるが、ソフトを狩野に割られた。くすん、あのヒロイン可愛かったのになあ……

「おーい悟、どうしてそんな黙りこくってるんだ？　なんか泣きそうだし」

「……太陽の光が、染みただけさ……」

「いや、お前そんなこと言うほど年くつてないだろ。つーかここ日の光差さないし」

「そりゃ大変だな。太陽少年のゲームができない」

「着眼点そこかよ!」

「あ、ソーラーカーも走らねえじゃん。すつげえ不便だな」

「室内でソーラーカーを走らせるか!？」

「太陽が見えないんだったら、まあ……死ぬしかないな」

「何故!？」

「何故だと! 貴様、それでも日本人か!? この非国民めがああああああああ!」

「いつの時代の人だよ、お前! っていうかこれ完全な八つ当たりだよなあ!？」

「うし、準備運動終わり」

「何の!？」

「そりゃお前、あれだよ。……狩りに行くためのだよ」

「結局ゲームかあ

「!」

ギヤルゲ破碎の八つ当たりを終わらせ、俺は懐から携帯ゲーム機

を取り出す。

「まったく、裏が久々に回ってきたと思ったら、よりもよってお前かよ」

「そう愚痴るなって」

俺はゲーム機からメモリーカードを取り出し、岡田に渡す。

「これに、断罪会の情報を保存してくれ。報酬は20」

「20万か？」

「いや、20億だ」

その言葉に、岡田は目を見開く。

「平均の100倍以上じゃないか」

「その分、ハイクオリティな情報を頼むぜ」

「分かった」

そう言つと、岡田は奥のほうへ引つ込んでいく。

あいつも、もうちょいやる気を出せばこの業界でトップに上り詰められるのになあ。

「あ、30分以内に仕上げろよ　！」

一応時間制限。こつちも時間ないしな。まあ、腕は確かな情報屋だ。こつちはお得意様だし、15分後には終わっているだろう。

さて、暇だな。

俺は隅っこのソファーに寝転び、目を閉じる。

自分の意識を、深く、深くに沈めていく。

やがて、俺の視界は闇に支配された。

朝日が俺を照らす。

ガタンゴトンと、列車が揺れる。

前回は鈍行列車だったが、今回は普通列車らしい。

『お、また来たのか』

「暇だったからな」

目の前に座る、俺と瓜二つな容姿をした青年　まあ、もう一人の俺みたいなものだ。

『どつよ調子は』

「まあぼちぼちな」

『あの三人を置いてきたのは？』

「ノーコメントだ」

軽いパラッチを撃退し、俺はシートに身を沈める。

『なあ』

「ん、なんだ？」

目の前の青年は、少し姿勢を正すと、口を開いた。

『断罪会、どうするんだ？』

俺は視線を窓に移し、朝日を見やりながら答える。

「潰す」

『だろうな』

自嘲的な笑みを浮かべ、青年は視線を天井に送る。

『一応聞いとくけど、なんで？』

その言葉に、俺はハツとした。

理由。

明確な、動機。

面として聞かれると、言葉に詰まってしまつ。

ややあつて、俺はようやく唇を開いた。

「俺は今まで、たくさん人を殺してきた」

『今も昔もな』

「カフェテラスでも、殺戮衝動を抑えられなかった」

『抑えられたためしがないだろ』

「……と、とにかく、俺は人殺しなんだ」

『世間の常識だろ』

「……………」

さっきから入りまくる横槍に、その元凶を半眼で睨み付ける。

『わ、悪い悪い』

冷や汗をかいて平謝りをするそいつ。

現実の俺って、こいつとは違うよね……？

「とにかく、そいつらを殺してきたのは俺だが、その俺を殺そうとしたのは断罪会だ」

その言葉に、青年は眉を寄せた。

『つまり、単なる自己防衛か？』

「いや、違う」

俺は断言し、青年の眼から視線を逸らした。

「怖いんだ、皆が傷ついていくのが」

17・Departure（後書き）

今回のサブタイトルは、『departure』でした、意味は出発、悟君の新たな門出（？）を祝ってのタイトルです。

じゃあ、ちよつと次回予告。

少年は自分の過去を、己に語る。

その贖罪の後、少年が自らに課す罰は……？

少年は、知らない。

最も傷ついているのは、少年自身だと言つことに。

次回、『18・Crime and Punishment』

罪の向こうにあるのは、罰なのか、それとも

ご期待ください！

18・Crime and Punishment

『皆が傷つくことが、怖い……？』

俺は黙って頷く。

『偽善だな』

たった一言で、切り捨てられた。

『嘘付け。お前は、お前が傷つくのが怖いだけだろ』

「違う！」

大声を出し、俺は立ち上がった。

「絶対に違う！俺は、俺は………！」

『じゃあどうしてお前は闘う！？以前、自分のためにしか人を殺していないと言ったのはお前だろうが！ 答えろ！ お前は どうして闘う！？』

そんなこと、決まってるじゃないかっ！

「どうして分からないんだよっ！俺たちが護るべきものは、すぐ傍に在ったって！」

『認めない！絶対に認めない！俺は、俺のためだけに戦う！』

その時だった。

(人は、自分以外のために戦う時こそ真の力を発揮できる)

この声……！

『倉沢一樹、だな』

そうだ。彼も、俺が殺した。

「だからこそだよ。俺は狩野と久美を死なせたくなかった。だから

」

『あの力を珍しくマトモに使えたって訳か？』

首肯。

「だからって調子に乗ってアレを使い続けるわけには行かないだろ
」？」

そう言って俺は、自分のシャツをめくり上げた。

わき腹に広がる、青い染み。

『内出血か。酷いな』

『要するに、だ』

けれどそいつはニヤリと笑い、

『お前は、戦う意味を見失ってるんだな』

言い放った。

「……そう、だ」

否定、できない。

「あの時、力が抑えきれなくなって、俺は……人を、たくさん殺した」

返り血を浴びながら、一般人を切り捨てていくあの感覚。

「それまでは、俺は俺のために人を殺すって決めてた。けど、」

あの瞬間。アールライトとかいう男が狩野達を殺そうとした刹那、

あの瞬間　俺の中で、何かが崩れ落ちた。

凍っていたものが溶ける感覚。

パズルの最後のピースがはまる感覚。

そして、錠前が鍵で外される感覚。

「あの時、俺は確かに、狩野と久美が死ぬのを『怖い』って感じた」
嫌だ。死なせたくない。死なないでくれ。頼む。置いていかないで。俺を独りにしないで。独りは、怖い。

「それで、気づいたら」

『 U n l o c k 』

『なるほどねえ』

深く頷く青年。

「俺は、あいつらを死なせたくない。死なせやしない。そのために」

そこで言葉を切り、空気を吸って、

「力が欲しいっ!」

『だから、俺にどうしろと?』

「力を貸して欲しい」

頭を下げ、お願いする。

『……自分が何言ってるか、分かってんだろ?』

無論だ。

「分かってるよ」

『俺の力を与えたが最後、お前は闘いという宿命から一生逃れられなくなる。強き力は大きな代償を伴う。けっして力の返還はできない。お前は一生、羅刹として生きていくことになる』

随分と長い忠告。

俺はゆっくりと瞳を青年に向け。

「だから、何だ?」

『大した度胸だ』

「度胸がなきゃ、暗殺者なんて務まらねえよ」

『確かにな』

そこで、沈黙が降りる。

「人殺しは、罪か？」

その言葉に、彼は頷く。

『命を奪うことは、神への冒瀆だ』

「神なんて居るのかよ？」

『居なきゃ、やってらんねえよ』

「神社とか寺とかもな」

『まあ、人殺しが正しくなる時もある』

「パラボックスとか？」

『やめろ、東野さんはマジでいい作家なんだから、ネタに引っ張り出すな』

「確かに東野もいいが、俺としては伊坂さんの方が好みかな。バツタの自警団とかはマジで傑作だ」

「っかどんだけパロディネタ連発してんだよ！」

『お前はその罪を重ねすぎたよ。罪には罰がついて当然だ』

「ドエストフスキー？」

『ちよっお前、今マジで語ってんだから喋んな！』

「わ、悪い」

『で、お前には罰が下されるべきだよな』

「当然だな。それも終身刑レベルの」

その言葉に、青年も大きく頷いた。

「と、いうわけで！」

『ああ。そーゆーことで！』

瞬間、視界がホワイトアウト。

まさしく人の人智を越えた光が、俺を包んだ。

罪には罰がついてくる。

けれど、それらは決してセットではない。

どちらが高く、どちらが低いわけでもない。

俺からすれば、その二つは共生している。

罪があるから、罰は下される。

逆に、罰がなければ罪は意味を成さない。

俺の罪に対する罰は

「よっ」

「あー、岡田か……」

「何だよ、そのいい加減な反応」

目を開けることもせず、俺は返事をする。

「報酬はきっちり払ってもらっぜ」

「またスイスカ」

岡田はくくつと笑う。

「20億分のエロゲ、買ってこい」

「無理がある！」

一体何本買ってこいと？

俺は欠伸をかみ殺しながら瞳を開く。

「ッ！ 悟お前！」

岡田は慌てたように、その場であたふたしたあと、俺を姿見の前に引っ張り出した。

「何だよ？ ふああ」

「眼！ 眼エ見ろ！」

その言葉通りに、鏡へ視線を向ける。

そこには。

双眼ともに鮮血に染まった青年の姿。

「大丈夫か！？ 充血とかじゃないのか！？」

独り騒ぎまくる岡田を捨て置き、俺は口元を歪めた。

俺は、俺は

「
戦う」

それは、少年の傷をさらにえぐる決意。

18・Crime and Punishment (後書き)

今回のサブタイトルは、そのまま『罪と罰』です。

いや、同名の小説久々に読んでハマったとか、そんなんじゃないですよ！

断じて違いますからねっ！

それでは、感想・評価お待ちしております！

19・Raid(前書き)

若干コメディ多めです。

某月某日の午前3時、ある少年がとあるマンションから出た。

その3時間後、そのマンションに悲鳴が響き渡る。

「居なあ

いつ!!」

絶叫。

それと同時に、ソファから二人の少女が飛び起きた。

かけられていた毛布を跳ね飛ばし、顔を見合わせた。

二人の視線が合う。そして、同時に口を開いた。

「悟君！」

「お兄ちゃん！」

呼び名こそ違つが、二人が思い浮かべているのは同一人物。

岡崎悟。

高校生として授業中爆睡することに励む傍ら、暗殺者として生活費を稼ぐ青年。裏社会では『鮮血の狂戦士』と呼ばれている。

右目が赤く、銃弾の兆弾を利用した多方面同時攻撃を得意とする。

なお、暗殺者のくせに優柔不断な面があり、知り合いのほとんどは女性である。

普段はカラーコンタクトレンズで赤い目を隠しているが、最近はずしっ放しである。

シスコン・ロリコン疑惑有。本人は否定しているが、学校では『岡崎＝変態』の等式がすでに成立している。(Wikipediaより)

「どうかしたんですかつ、狩野さん！」

「有宮さん!？」

声が出た方へ走る二人。

そこは、岡崎悟の部屋だった。

「居ない……居ない……居ない」

彼女はまるで廃人のように、同じ言葉を呟く。

「悟が……居ない」

彼女たちの物語も、今始まる。

とある駅のプラットフォーム。

俺は目の前に停車する列車を眺めていた。

白いボディ。

青いライン。

鋭角な先端。

「やっぱりN700はいいねえ……」

隣でハンチング帽を被った男性が、そう呟く。

早い話、まあ鉄ヲタだろう。正直俺にソツチ方面の趣味はないので、絡まれないうちにゲームの世界へと逃走する。

岡田から渡されたディスクをゲーム機に入れ、電源をつける。

『まじかる・あやポン！　く気になるあの娘は魔法使い！？く』

なぜかフルボイス。そして音量調節不可。

「岡田アアア！！」

これはもうイヤガラセという領域を逸脱している。

隣の鉄ヲタのおっさんも若干引き気味。俺もだけど。

タイトル画面のメニューで、『おまけ』という欄を選択する。

デザインがマジでうっとうしい。イジメだよ、これ。イジメ、かつこ悪いZ E岡田さん！

おまけの中でも、キャラクター紹介を選択。どうでもいいが、ボタンを押す度に女の子の声ができるのはどうしてだろう？

『きゃらくたー紹介ですっ！』

「何故に久美ボイス！？」

いや、違っただろ！？ 本人なわけがない！

激しく動揺しながらも、必死に平静を装う俺。今なら特命係の杉下さんにも負けないポーカーフェイスっぷりだろう。

兎にも角にも、データを確認しなければ意味がない。

まずは一人目……

『まじかる かりの』

「あんのバカがああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

『まじかる かりのは、とっても可愛い女の子！ 同居する男の子をドツクのが趣味なんだ！ 魔法少女に変身すると、『ぶろーにんぐ』っていう魔法のステッキ、もとい拳銃で悪い魔法使いを蜂の巣にしちゃうんだぞ』

「全然可愛くねえよ！ 拳銃で敵を蜂の巣にするのなんて、どう考
えても映像化不可だろ！ というかその描写したらこの小説R15
だよ！ つーか同居してる男の子って俺！？」

『まじかる ゆみ』

「どこで調べたよおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおー！！」

『まじかる ゆみは……以下略』

「扱いヒデエ！ 確かに最近影薄いけど！」

『まじかる くみりん』

「何が『くみりん』だあああああああ！！」

『まじかる くみりんは、必殺の涙目と上目遣いで敵をとりこにし
ちゃう女の子！ 魔法少女になれない分、空挺師団とか使って皆を
援護するんだ！』

「確かにあの涙目と上目遣いは必殺だ！ っていうか久美、空挺師
団使うの！？ 過酷だよ！ めっちゃ過酷だよ、あの部隊！ プラ
ベート・ラ アン見た時とか、ホントヤバかったもん！」

『まじかる フェンル・F・アーライト』

「『まじかる』の部分必要なくね!？」

まあ、何はともあれようやく本命だ。

俺は、ボタンを、押した。

『断罪の騎士』

彼らは五人で一つ。

彼らは誓う。

全ての罪を断つと。

彼らは誓う。

主君への絶対の忠誠を。

彼らは誓う。

部下を正しき道へ導くと。

『断罪姫』

彼女は誓う。

「気色悪っ！ まさか俺のツッコミを予測しているといつのか！？」

『当たり前だろ』

「黙れえ

！」

ゲーム機がミシツと音を立てた。イカンイカン、力を入れすぎた。

『さて、じゃあまじめに説明してやるか』

「まったく、頼むぜ岡田」

『おうよ』

ゲームと会話なんて、生きてる間にできるとは思わなかったよ。相手が岡田じゃなかったら、感激のあまり号泣してたよ、きつと。岡田じゃなかったら（大事なことなので二回言ったぞ。ここはテストに出るからな）。

『まず、フェンル・F・アールイトっていう男についてだ。こいつは意外と曲者だぜ』

「分かってる。一回殺されかけた」

あれは痛かったんだぞ。マジで。

『動脈引き裂かれて生きてるお前も十分曲者だよ』

「つつせえな。さつさと説明しやがれ」

『へいへい。ま、こいつは基本的に銃撃戦が基本だ。武器は拳銃。確か『S&W M60 3インチモデル』だったか？』

「ああ、そうだよ。ステンレス製のリボルバーだ」

『ま、近距离に持ち込めば、お前なら勝てるだろ』

「随分と楽観的だな」

『お前を信じてるんだよ』

急にマジメな口調になって、岡田は語った。

『頼む。俺もできる限りの援助をするから、あの組織を潰してくれ』

あの組織。

「お前、『断罪会』と何かあったのか？」

ゲーム機は、突然沈黙を始めた。

「……………言いたくないなら、いいよ」

『いや、話すよ』

そう言って、岡田はそれを言った。

『俺の婚約者は、断罪者に殺されたんだ』

特に、驚きはない。

裏の世界に関われば、周囲の人間に危害が及ぶなど当たり前だ。

この男は、それが常識であると分かっているのだろうか。

分かる。

気持ちは、分かる。

けれど。

「これは、俺の戦いだ」

誰かのために戦うなんて、まだできそうにないから

「断罪会は、俺が、俺のために潰す」

そう言っのが精一杯だった。

『……………そうか』

岡田は呟く。

「切るぞ」

『ああ、分かった』

「……………ゲームソフトになりきるの、忘れてるぞ」

『何ッ!?!』

「いや、普通に会話してたジャン。バレバレだって、これが通信用ソフトに改造されてるって事」

『マジか』

こいつバカだ、と心の中で呟く。

「まあ、もう切るわ。暇なときに電源入れっから」

『ちょ、アーライトの居場所とかは』

「悪い、時間がない」

瞬間、銃撃。

新幹線越しに放たれた銃弾は、窓ガラスを突き破って俺まで飛来した。

首をわずかに傾け、紙一重で避ける。

今の貫通力と威力からして、デザートイーグルか。ヤベえな、一般人の前で銃をぶっ放したりはできない。

「うわぁ、助けてください！」

胴体を狙ってきた銃弾をサイドステップで避けながら、俺は新幹線を盾にした。できる限りの必死さを装って、ホームの人々に呼びかける。

「逃げてくださいっ！ 危険です！」

そう言いながらも、俺は運転席まで腰をかがめながら走っていく。

「ひっ！」

運転手らしき男は、出口から逃走しようとしていた。

「危ねえっ！」

思わず声をかけたが、刹那、男の脇腹から鮮血が溢れ出した。

「うっ！」

ホームに倒れこみ、腹部を押さえる男性。

助けてる暇は、ない。

そのすぐ横を通り過ぎようとした瞬間、俺の足は何かを踏みつけた。

足をどけると、そこには一枚の写真があった。

その写真には、ある家族が映っていた。

中央に男性が一人。その男性の横に、同じ年ぐらいの女性がいる。女性の腕の中には、安らかに眠る赤ん坊の姿。

思わず、ホームに沈んでいる男を見る。間違いない。本人だ。

もう、死んだ。

他人なのに、知らない人なのに。

19・Raid(後書き)

今回のサブタイトル、『Raid』は襲撃という意味です。

これから、ようやくシリアスバトルパートなのです。その分執筆も
疲れるのです。

ですから応援よろしくお願いします！

20・Memory

360°、全方位に気を配る。一瞬の油断も許されない。気を緩めることは、すなわち死に直結するのだから。

「異様なほど殺気を放っていたのか、先ほどから道が開けている。

一般人からすれば、まさしく恐怖の対象であろう。

とにかく、あの駅から一刻も早く逃げなくては。

バッグからつば付きの帽子を取り出すと、俺はそれを目深に被った。

「福岡、か……」

目的地は、遠い。

一方その頃、突然の銃撃と爆発があった現場を眺める、3つの冷たい視線があった。

「絶対悟ね」

ブロンドのロングヘアーをポニーテールに結んだ少女、有宮狩野はそう呟く。

「それにしてもお兄ちゃん、なんでくみ達に黙って行っちゃったで

すかあ？」

あどけない表情で尋ねるのは、右原久美。黒い髪を肩まで伸ばしている。

「初登場から12話目でようやく容姿の描写なんて、ありえませんか」

頬をふくらしながら、視線を虚空へ向ける久美。

「……悟君の言う通り、最近影が薄くなってきたんですね……私……」

隅っこで体操座りになっている、真下由美。いつもはツインテールの茶髪は、今はサラサラのストレートである。

「や、由美さん。気を落とさないで下さいって」

久美はそんな彼女の肩に手をポンと置くが、由美はそれを邪険に払いのける。

「いいですよ。貴女なんて、私より大分後からの登場なのに作者に気に入られていますものね。それもこれも、作者と主人公がシスコンだからこうなるんですわ！」

何やら訳の分からないことをのたまっているが、一応お嬢様である。

「で、襲撃された新幹線はどこ行きだったの？」

「ようやくまともに喋ったか……」

由美の質問に、狩野はため息を吐く。

「いいか。悟は、断罪会そのものをぶっ潰そうとしてる。そのためには、組織の構成員の代表格を倒さなくちゃいけない」

「代表格、ですか」

「ああ。けど、断罪会の代表格なんてもう、人間じゃない。あいつらと戦おうなんて、正気の沙汰じゃないな」

その辛らつな言葉に、久美は首をかしげる。

「じゃあ、どうするんですか？」

「知るかよ」

「ふざけないでください！」

「ッ!？」

突然の罵声に、狩野は思わず怯んだ。

「あの人は……お兄ちゃんは、命を懸けてるのに……くみは、私は、何もできないんですか……?」

そこまで聞いて、年長者2人組みは「ああ」と合点した。

「私は、あの人に助けられました。けれど、私はあの人に何もしていません」

彼女は、右原久美は。

「今度は、私が、あの人を助ける番なんです」

岡崎悟の力になりたいのだと。

「嘘だろ……！」

身をかがめ、銃弾の雨を掻い潜りながらひた走る。両側には崩れかけの廃墟が立ち並び、まるでゴーストタウンのようだった。

「何でバレたんだよ!？」

日も沈み、ホテルを探して裏路地に入った瞬間である。銃弾が俺の腹部を貫いたのは。

くそつ、敵の数は多数。少なく見積もっても200人。大してこちらら、手負いの一人。

せめて、右腕が使えれば!

「だあつ!?!」

左手に持ったMP5Kを、頭上に乱射する。

ズガガガガガガガガ！！！！

廃墟のもろい壁を銃弾が蹂躞する。そうして破壊された壁は、俺の真後ろに落下した。これで、ある程度の時間は稼げる。

そう、油断した。

『どけっ！』

瓦礫の向こうから、声。

悪寒が、背筋を駆けた。

反射的に、横道に飛び込むと同時。

ドゴオオオオオン！！

瓦礫が吹き飛び、炎の渦が辺りを包む。

「流星はアメリカ製の『M72 LAW』だ。対戦車弾だけあって、威力は申し分ないな」

これで分かった。

こいつらは、本気だ。

一切の手も抜かず、本気で俺を殺しにかかっている。

当たり前といえば当たり前だが、まさか対戦車弾を使ってくるとは思わなかった。

「上等だ」

キイイイイイイイン！！

意識を右目に集中させ、ゆっくりと左目を閉じる。

あつちが本気なら、こつちだって本気になってやるさ！

M P 5 Kを地面に置くと、バックの中からゆっくりと銃火器を取り出す。

『パイファー・ツェリスカ』。

それはまさしく、『世界最強の拳銃』。その称号を与えられるためだけに、製作された。

もちろん威力は桁違いで、弾には『・600 ニトロ・エクスプレス』を使用。本来は象撃ち用のライフル弾なのだが、それを無理やり拳銃で撃っているのだ。

深呼吸。

意識を深く沈める。

もっと、もっと深く。

視界そのものが赤く染まる。

もっともっともっともっともっとと深くへ

キラリ。

視界で、一瞬何かが光った。

そこだ！！

声には出さず、代わりに気迫を弾に込めて引き金を引く。

ガキン！

撃鉄が起こり、弾丸が放たれた！

それは一直線に壁へと向かい、そして鉄骨にぶつかった。

ガキャンッ！！

ぶつかった銃弾は、幾つもの破片に弾ける。

そして、それら全てがバラバラの方向へ兆弾し、廃墟へとぶち当たるとる！

ドゴゴゴゴオオオオオオオン！！！！！！

音を立てて崩れていく、コンクリートの塊。

「うわああああああああああああああああああああ！！！！？」

砂埃が舞い、銃弾が壁を穿ち、廃墟は追っ手達に降り注ぐ。

しばらくたった後、そこには廃墟『だった』モノと、砂埃しかなかった。

「うわ………」

腹部からの出血が激しい。

あの場から走って逃げた方がいいが、こんな傷、とても病院には行けない。

このままでは失血死。

病院に行けば、恐らく警察沙汰。

二者択一。

「ううっ……！」

もう、思考がマトモにまとまらない。意識が融解し、混ざり合い、濁り、そうして

死ぬのか？

ポンと、突然出てきた疑問。

「冗談じゃない！ 死んでたまるか！ 死にたくない、死んじやいけない！」

『そうよ。その通りよ』

ああ！ 俺は死なない！

『だから

』

視界が、ホワイトアウト。

まるでテレビの電源を切るかのように、あっさりと。

終わり。ゲーム・オーバー。

嘘だろ……………？

意識が、
覚醒する。

讀心術。

車のブレーキ音。

転がって行くサッカーボール。

アスファルトを染める、真紅の鮮血。

静かに冷たく、地面に横たわる一人の少女。

それらを眺め、呆然とする少年。

「これは……？」

『貴方の記憶』

「まさか、あの時の？」

『そう。貴方が小学生の頃』

『そして、山上恵美が死んだ日』

瞬間、巻き戻る光景。

「あ……!？」

まるでビデオの巻き戻しのように、逆回転する時間。

少女が立ち上がり、少年は空中を浮遊して、少女のいた位置に立つ。車はバックし、視界から消えた。

そして、再生。

少年に迫る車。彼は気づかない。

その少年を、急いで走ってきた少女が突き飛ばす。

そうして、車にぶつかり、少女の体が宙を舞う。

ぶちまけられる鮮血。

瞬間、巻き戻る光景。

血は少女の体に戻り、少年は再び宙に浮く。

「やめる……」

再び、再生。

少女が車とぶつかる。

「やめる……」

光景の巻き戻し。

「やめろって……」

延々と続くそのループ。

「やめろ……やめろ……やめろ……」

少女の体が、血を撒き散らす。

「やめろ……やめろ……やめろ……やめろ……やめろ……
……やめろ……やめろ……」

少年の虚ろな瞳が、その情景を映す。

「やめろ……やめろ……やめろ……やめろ……やめろ……
……やめろ……やめろ……やめろ……やめろ……やめろ……
……やめろ……やめろ……やめろ……」

光景の逆回転。

再び、少女の鮮血がアスファルトを赤く染めた。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

絶叫が轟いた瞬間、俺の頭に声が響く。

『これが、貴方の過去……』

「っ！？ 誰だ！」

四方を見回しても、それらしき人影は見当たらない。

『貴方はコレを契機に、孤独へと堕ちた……』

「……………」

『だからこそ、貴方はもう孤独になりたくない』

「……………そうだ。独りは、怖い」

『なら、戦うのをやめればいい』

「ッ！？」

考えたこともない選択肢に、思わず思考が停止する。

『そうすれば、誰も傷つかずにすむ』

そうだ。その通りだ。戦いを、やめればいい。

けどっ……………！！

「嫌だ、な」

戦いをやめれば、逆に皆が傷つく。

「皆を護るためにも、俺は」

力があるのだから、俺が！

「俺は戦うよ、俺の『日常』を護るために」

頭の中で、誰かが微笑んだ気がした。

20・Memory(後書き)

今回のサブタイトルは、『Memory』です。意味は記憶、もちろん悟君の想い出ですね。

次回、主人公の身に何かが起こる！？
いや、毎回何か起こってますけど……

感想・評価待ってます！

EX-0 明ける、夜

夕暮れの日が、公園に差す。

ついさっきまで共にサッカーをしていた友人達は、すでに帰っていた。

「ううん……暇、だなあ」

今日の『仕事』は午後11時からなので、それまでは暇だ。

サッカーボールを弄んでいた少年は、深呼吸すると

ボールを全力で蹴り飛ばした。

白黒のモノトーンに彩られた球状の物体は、公園を飛び出して道路に転がった。

「……くそっ」

少年は、自分の手を見る。

たった5歳なのに、血に汚れた小さな手。

「……………くそっ！」

ダンッ！

その拳を、地面に叩きつける。周囲の小石が一瞬中に浮き、元あった場所に落ちた。ぶつけた部分が痛むが、思考がそれを意図的に無視する。

ただひたすら、心を怒りが支配する。自分をこんな風にした肉親、汚れてしまった自分、そんな自分に平然と話しかけてくる友人達。それら全てが、憎い。『世界』が、憎い。

ふっと、頭をナニカがよぎる。

やまがみえみ
山上恵美。

少年とはお隣さんの幼馴染で、突然姿を消した少年の家族を心配していた少女。少年がたった一人で帰って来た時、泣きながら迎え入れてくれた少女。あまつさえは、少年を自らの家に招待し、住ませた少女。

分からない。

こんな自分を平然と受け入れる彼女の考えが、分からない。

瞬間、ハッと身を硬くする。

もしか、自分の力を知っていて、それを利用して近づいているのか……？ もしそうだとすれば、早急に『抹殺』しなければならぬ。出来る限り早く。そう、今すぐにも殺さなければ

「ご飯を残した自分を叱る、眼を釣り上がらせた少女。

寝つきの悪い自分を布団に押し込む、困ったような表情の少女。

誕生日のプレゼントを渡した日、泣いて喜んだ少女。

恵美、と名を呼ぶたびに見せてくれる、少女の笑顔。

それらが、頭の中をグルグルと回っていく。

殺したくない。

そう、思ってしまった。

「悟君……?」

少女は少年の姿を見て、彼に駆け寄ろうとした。

しかし、気づいた。

肩が、震えてる。

「あ……、恵美?」

瞳から溢れる液体を必死に拭いつつ、少年は振り向く。

その涙を見た瞬間、少女の、山上恵美の体は動いていた。

「あ……！？」

少年、岡崎悟の体を温もりが包む。凧らずも、その顔を恵美の胸に押し付けるような姿勢。当然彼女に抱き締められているのだが、不思議と焦ったりはしなかった。

「悟君は、独りじゃないよ」

母親とは違う、けれど暖かい温もり。

「何か、言いたいことがあるの？」

その言葉に、岡崎の心の中で、ナニカが決壊した。

「俺は……、ムムム、ムムム、ムムムいて、い、良い？」

その言葉に、恵美は岡崎の頭に手を回し、さらに強く抱き締める。

「私が、悟君の居場所になる。『帰る場所』になる。だから、ここにいていいんだよ?」

そう微笑む少女の笑顔は、可憐だった。そう、岡崎は覚えている。

「ありがとう」

そう言って岡崎は、恵美と体を離す。

「どづいたしまして」

恵美の笑顔から、思わず眼を背けた。

白。

どづいまでも、真っ白。

(交わるなんて言わないから……)

ふらふらとした足取りで、岡崎は先ほど自分で蹴ったサッカーボールを拾いに行く。

(せめて、黒い俺でも、一緒にいて良いんだよ、な)

思考が、途切れる。

居場所。いばしょ、イバシヨ。

「危ないっつ！！」

そう聞こえた時、すでに岡崎の体は突き飛ばされていた。

事態を把握する時間すら、世界は与えない。

キキイイイイイイイイ!

普段から聞いている車のブレーキ音が、今はやけに厳粛な雰囲気だった。

鮮血が、アスファルトにぶちまけられる。摩擦熱で焼けたタイヤのゴムの匂いが、辺りに充満する。

考える。

今、俺はサッカーボールを取りに道路へ出た。

考える。

そして、俺に車が突っ込んできた。

考えろ。

そして。

そして、そして、そして

！……………！！

！……………！！

夜が、もうすぐ明ける。

病院の冷たい空気が、肌突き刺さる。

岡崎はソファ―に腰掛け、恵美の家族と共に手術の終わりを待っていた。

と、手術中の赤いランプが消える。

ドアが開き、手術を執刀していた医者が出てきた。

「すみません！ 恵美は……、恵美は！？」

今の声は父親だったか。岡崎の頭は、もうそこまで正常に働いていなかった。

医者が、力なく首を横に振る。

それは、死刑宣告と同意義。

「我々も全力を尽くしたのですが……」

それは、絶望の前奏曲。プレリュード

そして、少年の物語は始まる。

夜が、明けた。

少年の心情とは裏腹に、空は清く輝いていた。

EX・0 明ける、夜（後書き）

今回の話は、悟君の昔のお話です。過去の話は、これからも『EX』シリーズとして随時更新していきますのでよろしくお願いします。

「お兄ちゃん！ 起きたですかっ!？」

久美の声が聞こえた時、俺はただ見知らぬ天井を見上げていた。

……生きてんだ、俺。

そつだ、生きてる。俺は、生きてるっ！

生への執念と渴望が、心を埋め尽くした。

死んでない！ 俺はまだ、死んじやいない！！

「さ、悟っ!」

「悟君!!」

と、ドアを突き破り三人の女の子が部屋の中に踊りこんで来た。言うまでもなく、狩野、由美、久美である。

「お、三人とも久しぶり」

そう言ってベッドから起き上がるうとした瞬間。

ベッドに、押し倒された。

「あ痛っ！」

ベッド自体は柔らかいのだが、突っ込んできたのが人間3人なのでさすがに痛い。

「あ、あのさあ……………」

どいてくれ、そう続けようとした。けれど、口を開くことはできなかった。

パンツ！

左頬に、衝撃。

痛い。銃で撃たれるよりはマシなはずなのに、すごく痛くて、泣きそうになった。

「……………バカ」

真っ赤に泣き腫らした眼で、狩野が俺の眼を見る。

「狩野……怪我人相手に、ビンタはねえよ」

畜生。こんな軽口しか言えない自分の口が憎い。いや、言葉のレパートリーが少ない頭脳を恨むべきか。

何か、彼女達にかける言葉はないのかと探す。

「お兄ちゃん」

同じように、目に涙を浮かべている少女。

あ、いい言葉があった。

「久美」

彼女の名を呼ぶ。その煌く瞳に視線を合わせ。

「ただいま」

言い放った。

「あ……う、お、おおかえり」

耐え切れなくなったのか、久美は涙をポロポロと流す。

「悟君」

「……………由美」

じつと俺を見つめてくる由美。ああ、分かっているよ。ここで言わなきゃ漢じゃ^{おとこ}ないよな！

「髪型、変えたる？」

うんうん、前はツインテールだったもんな。今はストレートにしてるけど、俺的にはポニーテールの方が「死に晒しなさい」

「ひでぶっ!」

刹那、俺の鼻面に右ストレートが直撃!　なんか捻りが入ってるし!

「そんなこと言ったら、有宮さんだってそうでしょう」

え?　……ほ、ホントだっ!　ポニテじゃないか!　俺のストライクゾーンど真ん中だよ!　ヤベえ似合いすぎる!

「な、なんだよ悟。人を見てにやにやしやがって」

「いやあ、狩野が可愛すぎて」

「んなっ!?　ば、バカなこと言ってんじゃねえっ!」

俺の顎に飛来するアッパーカット。別名、昇竜拳。おい、お前ら。俺が怪我人だって事、忘れてるだろ。

「……………」

と、俺を冷ややかな目で見る方が約一名。市川海老蔵もびっくりな眼力をもってして、俺を睨みつけてくる。

ガクガクブルブル！

急に体が震え始めた。なぜだろう。

恐怖におののく俺を尻目に、狩野は、頬を赤らめながらぶつぶつ言ってるし、久美は空気と化してるし、由美は 髪留めよつこのゴムを手に取り、あれ、ちよっそれは!？

由美 withポニーテール。

健康的かつ上品さもかねた茶髪が、体の動きに合わせて揺れる。

結論。可愛いは正義。

「くっ！ テメエよくも！」

「あら、人がどんな髪型にしようとか関係ないでしょう?。」

バチバチバチ！

なんか火花散ってるって！ 二人とも、すごい規模で火花散ってるよ！

「……もういいです……くみは、くみの髪の長さじゃ髪結べないですもん……」

ああ、ここにも可哀想な人がいた。

「久美……肩まであつたら、十分だと思つよ……」

「本当ですかっ!?!」

気付いてなかったのかよ!

嬉々とした表情で髪を纏める久美。

「できたですっ」

「……………」

天使、降臨。

「いいやつほおおううう!! 久美サイコ ……」

「なつ、久美テメエいつの間に!」

「右原さん……やはり、恐ろしい子!」

うん、やっぱり可愛い女の子がポニテにしていると、活発さが前面に押し出されていていいよね! ……………ハッ!? 俺は今、一体何を!?

いかんいかん。危うく久美に引き込まれるところだった。

…………アレ? 何かおかしくないか?

「なあ、なんで皆ここにいるんだ?」

そつだ、俺はこの3人を置いてきたはず、なのに何故？

「そりゃ、まあ……………」

すると、三人ともなぜか俯いて、

「……………悟君が、心配だったからよ」

言った。

「由美、何で……………？」

分かる。狩野と久美が来るのは、分かる。

けれど、どうして由美まで来るんだ？

「言ってるじゃない」

そつ呟いて、彼女は微笑む。

「貴方のことが、心配だったからよ」

本当に、敵わない。

心の底から、実感した。

不思議と、嫌な感覚じゃなかった。

「ほら、お前は寝てる。怪我酷いんだし」

そう言っつて俺を寝かせる狩野。

「なあ、どうして俺は生きてるんだ？」

狩野は言う。若干の笑顔も交えて。

「お前が『生きたい』って思ったから、じゃねえの？」

その笑顔は、真っ白に輝いていた。

標的名：フェンル・F・アールライト

居場所：福岡県北九州市・小倉北区

武装：S & W M 6 0 3インチモデル・以下不明

制限時間：なし

幕が開く。

長い長い戦いの、幕が。

21・Bonds（後書き）

サブタイトルの『Bonds』は、絆と言う意味です。

バトルについては次回からより鮮明に書きます。いや、書きたいなあ……

エンディングはいくつかあるのですが、このヒロインとがいい！
みたいな要望があれば感想に書いてください。お願いします。

22・Determination

白い。

俺の周りを、白いもやもやしたものが取り囲んでいる。

こんな子供が、成功体か。

まったく、末の弟だけが完成とは。兄達は何をしているのやら。

どこだ……？　ここは？

っ！　起きたぞ……。

な、なんだあの赤い目は！　副作用か！？

何だよ……？　何なんだよ、アンタ達？

く、来るなっ！　化け物が！

ばけ、もの？

「　　」
　　ツツツ……！

目を開く。意識が覚醒する。

見知らぬ、天井だ。

「う、ん……………ん？」

体を動かそうとしたが、まったく体が反応しない。

こ、これはまさか伝説の金縛り？

ってふざてる場合じゃないな。

「おい。起きろー」

左腕をゆさゆさと揺する。

「う、ん……………」

俺の左腕に抱きついていている少女、有宮狩野。一体何を考えてるんだコイツは。

右腕には久美がしがみ付いていて、すやすやと眠ってらっしゃる。

んで、本日一番の課題。

「んっ……………」

体全体にのしかかってらっしゃる、真下由美さん。

いやいやいやいやいやいやいや。いやああああああああ
あああああああああ！！！

大津とうつと土地付けおちつつつつつけ落ちつかないとちちちち
ちちいちち

落ち着けっ！！

とまあ、混乱の境地に達しかけたが、どうにかして思考回路を復
旧。ヤバかった。何が？ いろんなものが。

「くっ、よっ……」

まず左腕。狩野の体からゆっくりと抜く。

次に右腕。久美、お前どんだけ力強いのか？

なんとか両腕の自由は取り戻したが、それでも最難関は無傷。く
っ、どうすれば……

OK！ 謎は解けた！

「由美」

彼女の耳元で、そっと呟く。

「どかなきや、真下先輩って呼ぶよ？」

瞬間、自由になる俺の体。

「それは嫌……」

由美、君本当に寝てるの？

まあ、何はともあれ体は自由になったわけで。

ガシッ

そうでもないらしい。

「おい狩野……。お前はそんなに俺の左腕が好きか？」

コクコクと頷く狩野。何か、嬉しいような悲しいような。

ベッドからゆっくりと降り、寝てる3人を見やる。

どうやら本当に寝ているのは久美だけらしく、彼女は安らかな寝息を崩していなかった。

目的地は、小倉。

移動方法についてはこれから考えるぞ。

今は、ただ。

ゆっくりり休もう。

う！ サイテー！

などと現実逃避しても仕方ないわけで、泣く泣く朝を迎える。

「歩きながら朝を迎えるなんて、初めてですわ」

「そうか？ あたしはザラにあるけど」

「……ふわぁ」

上から由美、狩野、久美だ。

何このラインアップ。

「なんにしても、福岡に行かなきゃ意味がないな」

意味がないと言うか、早く行きたいというか。

「けど、どうするんだ？ 新幹線に乗ろうとしても、どうせケーサツに捕まっちゃうぞ」

狩野の言葉に、俺は頷く。

というわけで。

「由美、分かってるよな」

「勿論」

そう言って由美は、笑顔で携帯電話をかざした。

「え？　どうかしたんですか、お兄ちゃん？」

答えは、空から降ってきた。

バラバラバラ……

「これって、『シコルスキー　S-70』か？」

『さすがですね、岡崎悟君。豊富な知識をお持ちのようで』

携帯電話から聞こえる声。

「ロウシエ。その公園に着陸して頂戴」

『分かりました、お嬢様』

いやいや、いくらお金持ちだからってさあ、いくら執事持ちだからってさあ。

「自家用ヘリコプターはねえだろおおおおおおおおお！！」

現在、山口県下関上空。

「うっわあ、高いですっ」

「久美、お前それ何回目だよ」

狩野と久美は、まるで姉妹のようにはしゃいでいる。

「久美、落ちても知らねえぞ」

「狩お姉ちゃん、ひどいですっ」

「狩お姉ちゃんって何だよ！ ……悪い気はしないけど」

漫才みたいだ。

「悟君、そろそろ九州ですよ」

俺は『移動方法が欲しい』という意味のアイコンタクトだったんだが、まさかヘリコプターまで持ち出すとは予想GUY。

「お願いがあるんだけど……」

正面の席に座る由美に、そつと声をかける。

「何かしら？」

「俺に、着いてこないで」

「言うと思った」

微笑みながら、笑うその笑顔は。

美しくて、輝いてて。

そして、真っ白で。

「そんなこと、私が聞くと……んっ!!?」

気づいたら、キスしてた。

「……………!!?」

「!?!」

あれ、何してんの、俺?

状況整理。

読み込み中です。なるーでいんぐなるーでいんぐなるーでいんぐ

……

「うわ、あぁっ！？」

なんで！？ どして！？ 何したの俺！？

「あ……！？」

そしてそこ！ 唇を押さえて名残惜しそうに上目遣いで俺を見ない！

「もうすぐ目的地ですが……どうかしましたか、お嬢様？」

「い、いえ……」

どうやら俺と由美以外にそれを見た人はいないみたいだ。狩野と久美はまだ騒いでるし。

結局、ヘリから降りても俺と由美の間には、微妙な空気が流れたままだった。

唇を、指でなぞる。ほのかにそこは暖かくて。

誰かのために闘うのも、いいかもしれないと思った。

福岡、小倉。

「彼が、来ますか」

ある『断罪者』の報告に、彼は不適な笑みを浮かべる。

「兄さん、待っていてください」

仇は討つ。それは彼、フェンル・F・アールライトの願望だった。

「騎士様」

「ん。どうかしたのかい？」

『断罪者』は表情を曇らせ、一枚の写真を渡した。

そこには、ヘリコプターから降りる集団。

ブロンドの髪の少女は黒髪の幼げな少女の手を引き。

白髪の老人が操縦席からカメラを覗みつけ、少女達と一緒にいる少年は笑顔でカメラにピースサインを送っている。どちらも、超遠距離望遠カメラに気づいていたらしい。

そして。

少年の横で、ピースサインをする少年を不思議そうに見る少女。
パサリ。

彼の手から、写真が滑り落ちる。

「な……………!？」

絶句。

彼は呟く。信じられないかのように。受け入れたくないかのように。

「由美が、どうして……………?」

真下由美は、隣でピースサインを掲げる岡崎から視線を逸らす。

彼はいつも、自分を助けてくれた。

気づけば、自分達は彼に依存してるかもしれない。

だから。今回のことは。

(自分で、ケリをつけます……)

そう。

少女は目を瞑り、そして。

(もうすぐ会えますね……お兄様……)

運命の針が、狂いだす。

22・Determination(後書き)

今回のサブタイ、「Determination」は決意という意味です。

これにて第3章は終幕です。

次回から、「断罪の騎士」編に突入です！

応援よろしくお願いします！

23・理由、ある者となない者（前書き）

皆様、更新が遅れて申し訳ありません！

今回から、書き方をちよつと変えてみました。

改行しすぎだろ、と知り合いから言われたので変えてみました。
では、ごゆるりとお楽しみください。

23・理由、ある者となない者

福岡に着いた俺達。断罪の騎士であるフェンル・F・アーライトを倒すべく、気合を入れ、いざ戦闘　とはいかず。

「お兄ちゃ　ん！　こっちこっち　！」

「うっわ、何コレ辛っ……………」

「有宮さん、それは『博多明太子』っていらしいですわ

なんか、平和に観光してた。

「いやいや、何だコレ……………」

「お兄ちゃ　ん！　こっちこっちこっち　！」

「うっわ、何コレ旨っ……………」

「有宮さん、それは『かしわめし』っていらしいですわ

「いやいや……………、いやいやいやあ！…！」

高ぶる激情に身を任せ、俺は駅の天井に叫ぶ！

「何でフツーに観光してんの！？　目的ちげくね！？」

「っーかここは小倉だから、博多明太子はちょっと違う！　作者のミスか！？」

「悟、こっちこっち！　マ　クがある！」

ああ、そういえば関東でも九州でも、この有名ファーストフード店は ックと略せるんだっけ。

「狩野、昼飯なら作ってるんだが……」

「悟、こつちこつち！ 公園がある！」

「切り替え早いなオイ！」

さて、その辺にあった自然公園に無事着いたわけだが。

「あ、アスレチックですっ！」

「おい久美、待ってっ！」

……この2人、はしやぎすぎだろ。

「元気なモンだな」

「まったくですわ」

木の陰で、俺と由美はぼーっとくつろいでいた。

今から殺し合いを始めるとは思えない、ほのぼのとした空気。

由美の膝の上にはバスケットが一つ、ちょこんと乗っていた。

中にはサンドウィッチが入っていて、卵やハムなどの色彩が目においしい。

「まったく、由美も遊べばいいのに……」

ぼそつと一言。いや、別に滑り台を滑ったりしてはしゃぐ由美が見たいわけじゃないですよ？

「え、よろしいのですか？」

「随分とお気楽ですね。てっきり僕を殺しに来たのかと思っていましたよ」

瞬間、右へ半歩サイドステップ。

間一髪、俺の頬を掠めつつ、銃弾が通過する。

「まったく、危険極まりないお出迎えだな！」

ジャンパーの内ポケットから拳銃を取り出し、振り向きざまに銃口を向ける。

狙うは、さっきまでもたれかかっていた木の上！

「まったく、無駄な動作が多すぎますよ！」

「なっ！？」

しかし、引き金に指をかけることすら叶わず、『コルトダブルイーグル』は俺の手から叩き落とされた。

フェンル・F・アークライトが目前に迫る。

思考では理解できても。目が追いついても。体は、反応できない。

「ぐうっ！？」

回し蹴り、か？ いや、リバーブロー？ 思考が明滅した。

「があっ！」

アッパーカットだ。……違う。ハイキック。いや、それでもない。じゃあ、何だ？ 思考が暗転する。

「ふむ、所詮この程度ですか……」

激しい動きとは対照的に、冷静な口調。

手も足もでない。足掻くこそすら許されない、一方的過ぎるワンサイドゲーム。

「っ、ああああ……」

瞬間、一撃。

後頭部への一撃。刈り取られかけた意識を、かろうじて呼び戻す。

勝て、ない。

圧倒的過ぎる。腕力、瞬発力、反応速度、そしてなにより実戦経験。
全てにおいて、俺はコイツの足元にも及ばない。

平和でほのぼのとしていた野外公園は、一瞬にして戦場へと変貌した。

「闘う理由すらない貴方にとって、僕は超えられませんよ」

たとえ理由が復讐でもね、と、アールライトは付け足す。
その通りだ。

俺には、闘う理由なんてない。
そう思った途端、視界が歪む。

あれ？ 何で俺、泣いてるんだろ？

「くっ、テメエらしい加減にしろ！」

どこからだろうか。声が聞こえる。

「きゃあっ！ う、腕を引っ張らないでくださいですっ！」

それは。その声は。

「悟君っ！ 逃げて！」

とても大切なものだった。そんな気がした。

』 U n l o c k 『

風が、木の葉を揺さぶる。

「覚醒……始まった」

一人の少女が、真紅の瞳を見つめていた。

その瞳の持ち主は、隻眼の青年に体中を痛めつけられ、地面に転がらされていた。

赤い目から、涙が零れ落ちた。

「……不完全。けれど」

瞳が、燃え上がる。

ゆっくりと立ち上がるその姿を見やり、青い髪を風にたなびかせながら、少女は呟く。

「ひよっとしたら、あの人を止められる、かも」

視線の先では、岡崎悟の逆襲が始まるうとしていた。

24・覚醒、限界なきチカラ（前書き）

今回もバトル多めです。

24・覚醒、限界なきチカラ

内側から、ガチャン、と音が聞こえる。

まるで、錠前を外した時のような音。それは俺の胸から腕、手首、そして指の一本一本へ。胸から胴、太股、脛、足首を通って足の指の一本一本へ。さらに、胸から咽、頭、そして脳、神経の一本一本へ

「悟っ！」

ガキン！ と、金属と金属がぶつかり合う音。その音とともに、狩野が放った銃弾が、ステンレス製の拳銃を叩き落した。

見える。

銃弾が辿る道筋、それが描いた軌跡まで。

全部、見える。

「さて、ここは退却しましょうか」

拳銃を拾い上げ、アークライトはその先を、俺に向ける。

「貴方を殺してから」

引き金が引かれた。銃弾が爆発的に加速しながら、俺の皮膚を抉る。

俺の掌を、抉る。

体中の全神経を掌に集中させ、イメージ。

俺の掌が、銃弾を止める。マグナム弾だろうが徹甲榴弾だろうが関係ない。

銃弾を、止める。

果たして銃弾は、加速を止め、速度を落とし、地面に落ちた。

「
!?」

ビシャッ、と、掌から鮮血が溢れ出す。貫通こそしなかったが、鉛の塊は確実に、俺の掌に阻まれた。

「なっ、」

何を言おうとしたのか、俺には理解できなかった。ただ、こいつだけは倒す。殴って殴って殴って、それで、殺す。

右の拳が、唸る。
空気や重力との摩擦すら忘れて、音も光さえも追いつけないよう
なスピードを叩き出し。

俺の拳は、騎士^{ナイト}の顔面を貫いた。

「あ……………!?!」

この声は、俺?
なんで俺が驚いてるんだ?

「くっ、あ?」

爆発的な一歩。
加速、加速、加速。体が宙を駆け抜ける。景色が横に流れる。

「騎士様、こちらへ!」
「すまないねっ!」

と、俺とアールライトの間に黒いワゴン車が割り込んできた。

「邪魔を、」

アールライトが慌しく乗り込む中、俺はさらに加速する!

「するなあ

「!」

バガンッ!

硬い音が、響く。それと同時に、ワゴンの助手席のドアは吹き飛んだ。

「ッ!?!」

予期せぬ攻撃に、思わず加速が緩む。

ドアを屈んでやり過ごしている間に、ワゴン車が発車した。

ガラス越しに見える、二人の少女。

「くっ、待ちやがれえっ!」

後ろから聞こえる、狩野の声。

「まさか 由美と久美!?!」

ワゴン車が走り去る時、アーライトの顔が、微かに歪んだ。そんな気がした。そ

そのまま車は走り去ろうとする。

「くそ、逃がすかよ!」

足元の拳銃を拾い上げ、タイヤに向けて発砲

「ッ!?!」

瞬間、何の直感か俺は拳銃から手を離した。

銃が、地球の引力に引かれて地面へと落下する。

爆発。

俺の目の前で起きた小爆発は、鉄の破片を当たりに撒き散らしながらアスファルトへと落ちていった。

「……………マジかよ」

動く車の中から、俺の手の中にある銃の銃口を綺麗に狙い打つ。どう考えても、人間業じゃねえ。つてことは。

「あいつも、持ってんのか…………？」

俺の両目、真っ赤に染まった眼。

鮮血の色に相応しいその色彩は、選ばれた者にしか与えられないチカラ。

「この『SOAA (Space Operation Analysis Ability)』を」

車の中で、彼女は助手席に座る男を睨み付けていた。

その男の名は、一般にはフェンル・F・アーライト。
しかし、本名は違った。

「久しぶり、由美」

柔らかな微笑をたたえ、彼は後ろの席に座る少女に話しかける。
二人の少女のうち、茶色のロングヘアーを持つ少女は答えた。

「本当にお久しぶりですね、フェンル・F・真下さん」

「おいおい、兄さんでいいのに。いや、お兄ちゃんの方がグツとくるかな？」

妄想に浸るその姿は、どう見ても断罪の騎士のものではない。もう一人の少女　右原久美も、フェンルの部下も、呆気にとられたように彼を見ている。

その中で、真下由美はそっと服の袖に口を近づけた。

「悟君、聞こえてる？」

袖に取り付けられた、超小型トランシーバー。そこから声が響く。

『ああ、シスコンが何かのたまってるのが聞こえた』
「なっ!?!」

まさかトランシーバーがあるとは思わなかった　のではなく、主にシスコンという名称に驚くフェンル。次の瞬間、彼の表情は般若と化した。

「そついえば君、由美にちょっかい出してたよね」

『ああ、妹さんとは健全なお付き合いをさせてもらってます』

トランシーバーの向こうで繰り広げられる、漫才のような会話。

「……夫婦漫才？」

ピキッ！

フェンルの言葉に、音を立てて場が凍る。

（な、何だ！？ 後ろの女の子二人から、とてつもない殺^{オーラ}気が！）

一方、トランシーバー。

『『えっ……………』』

夫婦。一般的に、共同の経済生活を営み、子どもが誕生した場合それを保護し二人の子として養育する男女のペア。「夫妻」とも言う（Wiki ediaより）

（これが……これが、メインヒロインとの差なんですね……………）

（兄さん、貴方は黙って騎士の職務を全うしていればよかったのに……さよなら、ですね）

（騎士様、我々は貴方の勇姿を忘れません。……御武運を）

それぞれの考えを胸に、ワゴン車は公道を走っていく。

その先に何かあるのかは、久美と由美には想像もつかなかった。

24・覚醒、限界なきチカラ（後書き）

感想よろしくお願いします。

25・凶狼、月に吠える(前書き)

やっと更新したと思ったら、まさかの大晦日……orz
暗殺者にそんな関係ない！ レッツゴォー……！！

25・凶狼、月に吠える

「あのシスコン、ぜってーぶつ殺す!!」

トランシーバーを潰れるほどに握り締めながら、俺は雲一つない青空に叫んだ。

「なあ悟、公道でそんな事叫ばれても地域住民の皆様から冷たい視線のプレゼントがあるだけだぞ?」

「やかましい! とにかく、今はあの車を追うのが先決だ!」

適当に会話を打ち切り、俺は懐から例のブツを取り出す。

これさえあれば、あの車を追うことなどお茶の子さいさいさつ!

……と、携帯ゲーム機の電源を入れる。

『まじかる・あやポン! く気になるあの娘は魔法使い!??』

「よし、これでGPS機能をくばがっ!??」

いざ通信という時に、俺の鳩尾に激痛が!

「あんだ、その手のゲームは控えなさいって言ったでしょうが!」

「いやいやいやいや! 何を勘違いしてるのかは知らんが、これゲ

ームじゃないから!」

「言い訳無用!」

そう言って再び拳を握る狩野。

俺は後にこう語る。

『アイツは暗殺者より、総合格闘技のほうに向いてる。あの拳なら

世界が狙える』

『おーい、そろそろ俺回収してくれない？』

と、場に響いた場違いな声に、狩野は振るい続けていた拳を止めた。頬についた返り血を拭いながら、声のした方を見ると。

『ようやく気づいたかい、有宮狩野嬢』

「……………は？」

ゲーム機が落ちていた。

それは先ほど、俺が取り出して電源をつけたゲーム機。

(いやいやいやいや、何この展開？ 異次元空間との接触？ もしくは平行世界からのSOS？ ジュブナイルなの、ラノベなの？ や、この作品にSFチックな展開は似合わないでしょ。少なくともモンソンみたいなリアル戦記展開の方がまだマシでしょうに、作者ってそんな事すら判断できないの？)

「おい狩野、混乱しすぎてモノローグの中でメタ要素が飛び出しまくってるぞ」

「黙ってなさい！」

狩野の一喝に、俺は思わず肩を震わせた。

『うへえ、聞いてたよりも怖いな』

「何が？」

『何でもありませんお嬢様』

即答するゲーム機、もとい、岡田。

俺はちよつと肩を動かさし、ゴキゴキッという音と共に復活する。

「あー痛かった」

『つて待て！ 今の音何！？ やけに生々しかったんだけど！』

「え？ 肩の間接が外れたから戻しただけだぞ」

『おいおい！ 高校生が間接を外したり戻したりできるのかよ！？』

「凶暴凶悪極まりないある女性（仮名・K野氏）の場合は極めるの
だってお茶の子さいさい……ア、アアアアアアアアアアアアアアア
アア！！」

自分の喉から出たとは思えない絶叫が、公園に響き渡った。

「狩野、ひとまず岡田の話を聞こう！ な、な！」

「まったく、仕方ないわね」

俺は彼女から離れ、ゲーム機を拾い上げる。危なかった、花畑とかそこで手招きする可愛い女の子とか、いろんなのが見えた。もう少しで少女の手をとって川を渡るところだったよ。

「おい岡田、アライトがどこに行ったか分かるか？」

『もちろんだ。由美ちゃんに発信機を取り付けておいたからな』

「さんきゅ。けど由美のことを由美ちゃんと呼んだことに関しては
後でゆっくり話し合おうな」

そう言っているうちに、ゲームの液晶画面に地図が映った。

青い点と赤い点が光り、赤い光はゆっくりと動いていた。対する
青は、まったく動いていない。

「さしずめ、青が俺らで赤があんたの車だろ？」

『まあな』

「おっけー。次呼ぶときはあいつを倒してからだ」

そう言っつて、俺はゲーム機のモニター電源を落とす。それを懐にしまった後、視線を後ろにいる少女に向けた。

「ほら、さっさと行くぞ」

「うん？ あ、ああ……」

なんとなく元気がない様子。

「なあ、あいつらがさらわれた時、お前は何をしていた？」

「何っつて……闘ってた」

「誰と？」

「あの黒服のやつらと」

「何人いた？」

「……5、6人」

頭のどこかで、何かが崩れる。何かが叫ぶ。何かが震える。

「お前。まさかと思うけど、俺に助けを求めた？」

狩野の表情が曇る。否、強張った。

瞬間、視界が暗転した。

助けに気づかなかった？ 仲間なのに？ 家族なのに？
りたい人なのに？

護

「……………ちくしょう」

無意識のうちに、咳きが漏れる。

「ごめん、あたしがもつとしっかりしてたら」

何言つてんだ、お前のせいじゃないだろ。

「ごめん、あたしがもつと強かったら」

それ以上言うな、お前のせいじゃないんだから。

「ごめん、あたしが二人を護れなかつ」

パシッ！

硬質な音が響き、辺りに静寂が降りる。

「ふざけんな」

女の子に平手打ちなんて、我ながらかなり鬼畜だな。

そんなことを思考の隅で考えながら、俺の口は言葉を紡ぐ。

「そうやって全部自分のせいにして、一人で詰め込んで。端から見
て、危ないんだよ、お前。今にも壊れそうで、崩れそうで、泣き出
しそうで」

俺にも、力があれば！ 俺がもつと強ければ！ 俺が、俺が、俺
がもつと

「……とにかく、俺が言いたいのは、もつと人を頼れってことだよ」

目尻に涙をためながら、それでも彼女は必死に何かをこらえてる。

「でも、」

「でもじゃねえよ！ 由美でも久美でも、そして、俺でもいい！
誰かを頼れ！ 自分がパンクしないうちに！ 自分が壊れないうちに！
いや、自分を壊さないうちに！」

そこが、彼女の限界だった。

「
ツツツ！！」

声にならない泣き声を上げながら、彼女はその場に座り込む。

本当は、こんなことしてる時間はない。一刻も早くあの男を追わないと、最悪、由美や久美が殺されてしまう。

けれど。

ま、今はこいつ、思いつきり泣かせてやるか。

自然公園に、梅雨入りの雨が降り始めた。

「んで、もう大丈夫か？」

ようやく彼女が泣き止んだころ、俺はそっと肩にジャンパーをか
けた。

「……………狩野？」

「ゼエ……ハア……ゼエ」

はい、スタミナ切れでございます。

「やるじゃんか……」

「そつちこそ……」

そう言っつて拳と拳をぶつける俺達。今ここに、美しい友情が芽生えたのだつた……

「で、車は止まった？」

狩野が着ているジャンパー、その内ポケットにあるゲーム機。電源を落としたのはモニターだけだったから、音声は通じるはず。

『ああ、そこから東に2キロ地点。衛星画像を見る限り、デカイ屋敷みたいだな。まるで皇居だぞ』

その言葉に、俺は立ち上がつて四方を見渡す。

………あつた、というかありやがりました。

何アレ？ 目立つとかそんなレベルじゃなくて、何というか、デカすぎて逆に違和感がない。最早ただの背景。うん、どうやって作ったの？ あれ。

「おい、アレ見える？」

「見えない奴は眼科に行ったほうが良いわね」

狩野も同意見らしい。

「つぜ」

「ああ」

いつの間にか、漆黒のマントで身をくるんでいる狩野。

「行くぞ!」「」

雲の切れ目から、日が差し込む。まるで剣のような鋭い光の中、闇に生きる者が二人、街を駆けていった。

フェンル・F・アークライト。

断罪の騎士の中でも正当な実力の持ち主で、対象に近づいての射撃、抹殺が特技。武装はステンレス製のリボルバー式拳銃、『S & W M 6 0 3 インチモデル』のみと言われるが、隠し武器があるとの噂もある。

「断片的だが、割と情報は多いな」

薄暗い部屋の中、情報屋

おかだけんいち 岡田健一は、手元の資料を読み漁っていた。

それらの紙束は、全てフェンルに関する情報である。

「他の騎士はほとんど情報がないのに、どうしてこいつだけ……」

言いようのない不安。それを助長させるかのごとく聞こえた、先ほどの会話。

『本当にお久しぶりですね、フェンル・F・真下さん』

『おいおい、兄さんでいいのに。いや、お兄ちゃんの方がグツとく

るかな?』

ここから分かることは一つ。

真下由美とフェンル・F・アークライトは、血のつながった兄妹である。

「またこりゃあ、厄介な……」

岡田はパソコンのモニターに目を移す。
そこには、巨大な建造物の内部構造が、正確に描かれていた。

「ええい、数ばかりごちゃごちゃと!」

悪態をつきながら、俺はサブマシンガンの引き金を引く。
発射された銃弾は、前方に展開していた黒服達の肉体を貫いた。

「何よ、『断罪者』って割には弱いわね!」

玄関から入ってすぐの大きなフロアで、銃撃戦が続く。

「ここは俺が引き受けた。狩野は上の階に
『待て! 恐らく由美ちゃん達は地下だ!』」

『俺が案内したんだよ、久美ちゃん』

「ふえ！？ ゲーム機が喋ったです！ とうかそれって確かお兄ちゃんのゲーム機じゃ……………」

「知ってるの？」

狩野の質問に、久美は笑顔で口を開いた。そして、禁断の言葉を口にする。

「この間、裸の女の子が映ってましたから」

「……………」

『あぁっ、言っではいけないことを！』

一瞬で修羅と化す狩野。

「ほら、さっさと悟を殺しに……………じゃなくて、助けに行くわよ！」

『悟う』

！ 逃げるおおおおおおお

おおおおおおおおおおおお！』

「何かすっげえ嫌な予感がするんだけど……………」

謎の悪寒に、背筋が寒くなる。

「まあ、この状況なら背筋も寒くなるな」

自己完結し、俺は自分の手を見た。

掌に穴が空き、そこから真紅の液体がどくどくと溢れ出ている。

俺の後ろの壁についた飛沫が、ゆっくりと下へ落ちていく。

「まったく、痛えじゃんかよ。シスコンのくせに妹を盾にしやがって」
「僕は勝利のためなら、手段を選ばないからね」
「さっすが騎士様、そこまでして敵討ちしますか」

その言葉に、彼 フェンル・F・アーライトは、『S&W M
60 3インチモデル』の銃口を俺に向けた。

背景には青空。

片手は、麗しき少女の腰に。

「ところで貴方は、僕の二つ名を知っていますか？」

「ああ、もちろんだ」

少女、真下由美は逡巡する。目の前で、二人の男が戦うにも関わらず、自分は何もしなくて良いのかと。

「お前の兄貴、ファンル・F・真下は『若鷹』」

「そして僕が」

そこで男は言葉を切り、口元をゆがめた。

「『凶狼』」

今宵は満月。青空に白い球体が浮かんでいる。
狼が、月に吠える。

「さあ、仇討ちの宴が始まりますよ、兄さん」

俺は弾切れを起こしたサブマシンガンを床に捨て、足首のホルス

ターからダガーを取り出し、逆手に構える。

「行くぜ『凶狼』、　　っと、その前に」

ふと思いつく。まったく、本当に大事なときにこそ、どうでもいいことを思い出すものだ。

「昔、俺は殺されかけたことがある」

あの男の姿を、俺は忘れない。

「その時、俺にアイツはこう言った」

あの男は、微笑をたたえ、言い放った。

『……3秒やる、祈りを済ませろ』

あの男、断罪皇帝はそう言った。

「さあアーライト、祈りは済んだか？」

「無論だ……その命、悪いけど食い尽くさせてもらおう！」

ここに、『鮮血の狂戦士』と『凶狼』の戦いが幕を開けた

25・凶狼、月に吠える（後書き）

以上です。感想があったらよろしくお願いします！

26・咆哮、鮮血の狂戦士(前書き)

久々の更新です。お待たせして申し訳ありませんっ！
では、続きをどうぞ！

26・咆哮、鮮血の狂戦士

狩野が地下に行ってから、約5分。断罪者達は全滅した。つたく、危うく死に掛けたよ。

MP5Kの弱点つてことで、全自動射撃時の銃口炎が激しくて狙いがつけづらいとは聞いていたが、まさかこれほどとは……火傷するかと思っただぜ。

しかし、銃一丁で敵を蹴散らすのは爽快。まさに無双だった。うん、T-1000の気分がよく分かったぜ。あいつも使ってたな、このマシンガン。

引き金を引いて、雑魚を蹴散らし、もっともっと返り血をこの体に浴びて

少年が、狂気に染まっていく。

そしてステージは、『凶狼』へと移る。

「ったく、やっぱり僕の妹はあんなの（仮名・O崎さん）にはやれないね」

「兄さん、さつきからそれしか言ってないわよ」

苦笑しながらも、由美は兄の背中を見る。

手足も何も拘束されていないので、彼女からすれば無防備な背中。

「ねえ」

「どうしたんだい？」

振り向き、微笑するフェンル・F・アールライト　いや、フェンル・F・真下に、由美は冷徹な表情で尋ねた。

「兄さん……ファンル兄さんを悟君が殺したって、本当？」

瞬間、フェンルの表情が硬直する。

「……由美は、あのロリコンのことが好きかい？」

その問いに、由美は柔らかく微笑んだ。

「悟君は、バカで考えなしで人殺しで女誑しでロリコンで変態だけど 好きなものは、好き」

そうか、と彼は呟き、空を見上げる。

自分の双子の兄を殺した男、岡崎悟。憎いはずの存在。

「彼から見て、僕はどんな風に移ってるんだろう……」

フェンルの腕時計が振動する。

それは、下のフロアで戦闘が終結したサインだった。

「まったく、彼もせっかちだね」

右腕ともいえる断罪者の一人が死んだ。それはすなわち、こちらの全滅。

「ああ、一応言っておくけど、ファンル兄さんを殺したのは彼だよ」

由美の表情に翳りが生まれ　　たと思いきや、その表情は一瞬で引っ込んだ。

「じゃあ私は、想像以上に悪い男に引っ掛かっちゃったんだ」

そう言って悪戯げに微笑むその姿は、年頃の乙女そのものだった。

だからこそ。

フェンルの心の何処かが、叫んだ。

岡崎悟を殺すな、と。

だからこそ。

フェンルは自ら、その心を打ち消した。

「だったら僕は彼を殺すよ。フェンル・F・アールライトとしてではなく……フェンル・F・真下として」

その言葉に、一切の曇りはなかった。

呆然と自分の手を見る岡崎悟。

フェンルはその後姿に狙いを見つけ　　躊躇なく引き金を引く。

直感的に危機を感じ取ったのか、岡崎は数瞬後には横へと大きく跳ねていた。

「くっ、休む暇はなしかよっ！」

悪態をつきながらも、手元のサブマシンガンの銃口をフェンルに

向け、そして驚愕した。

フェンルは由美を抱えながら移動していた。もし、銃弾の一発でも当たれば

一瞬の油断。

一人を抱えているとは思えないスピードで、フェンルが迫る。

岡崎にできたのは、思わず右手を盾のように突き出すこと。

右の掌に密着した銃口から、発砲音。右腕の感覚が吹き飛ぶと同時に、無自覚に左足を蹴り上げる。

「がああああ………」

「ッ………！」

激痛の余り、岡崎の手からサブマシンガンが零れ落ちる。すでに弾は切れていたらしく、その鉄のボディは力なく地面とぶつかった。同じく、フェンルも右腕を庇いながら交代する。

互いの視線が交錯し 次の一手を模索する。

先に動いたのは、フェンル・F・アールライト。極限まで無駄をなくした動きで、『S & amp; W M 6 0』の狙いを付ける。

放たれた銃弾は、しかし岡崎が振り抜いたダガーに弾かれた。

そのまま岡崎は前方へ踏み込み、ダガーを投擲しようとする。

しかし ここで岡崎にとって想定外の出来事が起こった。

フェンルが、その腕を振り抜く。

岡崎に向かって飛ぶ、真下由美。

一瞬の逡巡 岡崎は由美に当たらないようダガーの軌道を逸ら

し、投げ飛ばされた由美の身体を受け止めた。

「この似非シスコンがつ!!」

悪態をつきながら、岡崎が見たものは 空中に静止したダガー。

「は!?!」

次の瞬間、金属と金属がぶつかり合う音と共に、ダガーがこちらへと疾走してきた!

「んなあつ!!」

由美を抱えているため、巧く動けない。

仕方なく岡崎は、ダガーの軌道から急所、要するに心臓を外す。

鮮血が、辺りに舞った。

腹部に突き立てられたダガー。

右腕と同じで、痛み之余り神経がトんだ。

だらんと力なく垂れた腕を見て、思わず舌打ち。

畜生。

このままじゃ、俺は確実に負ける。

負けたら、皆が死ぬ。

俺が撒いた種ぐらい、俺で枯らさなきゃいけないのに。

負け。

畜生畜生畜生畜生

くそつたれが。

負けてたまるか。

これ以上、失ってたまるか！

「俺は、もう」

「あたし達を忘れるなあ！！」

瞬間、フロアの外壁が吹き飛んだ。

「悟ッ！ 悪いけど、C-4使い切ったから！」

「『ぶらすちつくばくだん』って、とつても凄かったです！」

おい狩野、人のセリフ遮るな。後久美、なぜプラスチック爆弾の発音が幼児風？

「くつ、増援とはえげつない手を使うね！」

「テメエに言われたかねえな！」

足元にあった瓦礫を蹴り飛ばす。フェンルはそれをあっさりと避けるが、そのタイムラグに間に新たなダガーを左手に。

「じゃあ、こちらも少々」

その言葉に、俺は思わずハツとする。

そのステンレス製リボルバー拳銃の先には、今しがた乱入してきた2人。

「あ」

しまった油断したこのままじゃヤバい二人が撃たれる撃たれてど
うなる死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
！！！！

「ふざ、」

認めない。

「ける、」

そんなこと。

「なあ

ッッ！！！」

認めてたまるかああああああああああああああああああ！！！！

☐
U
n
l
o
c
k
☐

☐
R
e
l
e
a
s
e
☐

鮮血の狂戦士は、その力を再び解放する。

26・咆哮、鮮血の狂戦士（後書き）

後2話ほどでフェンル編は終了です。……多分（汗）

27・決着、煌く刃

それは何時のことだろう。

俺は家族から人殺しの技術を学んでいた。

私は二人の兄と仲良く暮らしていた。

あたしは母を失った。

それは何時のことだろう。

俺は家族から逃げた。

私は兄が遊んでくれなくなった。

あたしは父親の仕事に参加するようになった。

それは何時のことだろう。

俺は第二の家族を殺された。

私は独りぼっちだった。

あたしはお姫様選ばれた。

それは何時のことだろう。

俺は、たくさん人を殺した。

私は兄の一人を失った。

あたしはあいつ……岡崎悟に殺されかけた。

そうして運命の歯車は、回っていった。

「ア、アアアアア!!」
「ツツ!!?」

岡崎がダガーを放つ。

しかし、手ではなく、足から。

足首のホルスターから、回し蹴りの要領で遠心力を利用し放たれたソレ。

「何度もそんな手を!」

手から直接の投擲は間に合わない。フェンルはそう判断していたが、実際に岡崎は足からダガーを放った。少々想定外の事態に面食らいながらも、フェンルは冷静にダガーを狙い撃つ。

それこそが罠。

カスッ。

「ッ!」

フェンルの手にある拳銃、『S & amp; W M 6 0 3 インチモデル』の装弾数は5。岡崎への発砲に2回、右の掌に1発、そしてダガーを弾くのに2発。すでに全弾使い切っている。

しかし、たかが弾切れで死ぬようなら、断罪の騎士など務まらない。

「だからどうしたんですか!」

素早く左腕の袖から取り出したのは

「……デリンジャー」

静かに、狩野が呟く。

リンカーン大統領暗殺にも使用された、2発装填可能な超小型拳銃。

手のひらに隠せるほどのサイズのそれは、携帯性を極限まで高めたある意味究極の銃。

「でええいつつ!」

デリンジャーを発砲。それはダガーを直撃し、ダガーの動きをその場で停止させた。

先ほどはこの後、もう一度弾丸を叩き込むことで岡崎へと弾き飛ばした。

しかし。

「「悪いな、俺はもう二度と失いたくない」」

二重に重なる声。

全く同じ声が、二重になって岡崎の口から響いた。

「「だから」」

投擲後、岡崎は横や後ろへは動かず

「前へと進むんだ！！」

ただ前へ、前進していた！

空中で静止したダガーを引ったくり、岡崎は前へと進む。

ただ、足を前へと進める。

反射的にフェンルがデリンジャーを発砲するが、岡崎はそれをあっさりと切断。

そのまま、再び前進！

「くっ！」

と、眼にも止まらぬ早さで、フェンルは本命の拳銃に弾を装填。しかし、たった1発。

外すわけにはいかない

フェンルがその拳銃を肩の高さまで持ち上げた瞬間、岡崎の口元に獰猛な笑みが浮かんだ。

それはまさしく、獲物を見つけた野獣のよう。

刹那、岡崎の身体がブレた。

そして、まるで瞬間移動のように

岡崎の身体は、フェンルの真後ろに現れた！

フェンルが振り向く前に。

煌くダガーの刃が、フェンルの右肩へと滑り込んだ。

「ああああああ　　！！！」

想像を絶する激痛に、悲鳴が上がる。

しかし岡崎は、全くの容赦も無くダガーの刃をさらに捻り込む。

「　　！！！」

最早声にならない声だ。

「　　……俺の勝ちだ」「」

岡崎の言葉に反論するものは、この場には存在し得なかった。

27・決着、煌く刃（後書き）

ようやくフェル編の戦闘シーンは終了です。
いやー、長かった。

他の騎士さんは短めにしたと思います！ ……できるのだろうか
（汗）

28・銃声、結末と絆と新たな仲間（前書き）

今回はテンションの上がり下がりが激しいです。
コメディから一気に鬱へ。

……まあ、これでもいいかな（汗）

28・銃声、結末と絆と新たな仲間

「俺の勝ちだ」

二重に重なる声。

フツと表情を緩める。アイツは、まだ俺の中に居るんだ。

「……………」

何も語らないフェンルから、ダガーを引き抜く。一瞬痛そうに顔をしかめたが、今度は絶叫を上げたりはしなかった。

ここからだ。

こっからが本番と言ってもいいんだよ！

(分かってるさ……、俺達の本気を、見せてやろうぜ)

「さあ、悪いが……由美との交際を認めてもらおうか」

「「「は？」」」

YES！ さすがはもう一人の俺！ 分かってるじゃないか！

(ふっ……当たり前だろう？ 俺はお前であり、『岡崎悟』なのだから！)

ビシャーン！ と、もう一人の俺のバックに雷が落ちる。

さあ、フェンル・F・アーライト！ 答えか由美のどちらかを貰おう！

「……ふっ、君には参ったよ。ここまでされて、応じない兄が居るものか」

「……応じちゃうんだ！？」

大慌てでツツコムヒロイン三人組。しかし乙女的心情などどこ吹く風、熱い漢^{オトコ}二人は、夕日を背にしてガツチリと握手をしていた。

しかしだ。

相手はあの三人組である。

約一名は兄の公認を得られたことで「ひよっ」としてこのままゴールイン……？ ヤダ、まだ私達学生よ、悟君……でも、ああん、そんなぁ……」などと壊れているが、他の二人はまさしく激怒。怒髪天を衝くである。

ふざけないでよ。たかが実兄の公認を得ただけで、け、けけ結婚なんてできるわけないでしょうが。そうですよね、お兄ちゃんはきつと私達も含めてハーレムを作るつもりなんですよっ。決してあの人だけに攻略対象を絞ったわけじゃないですよっ。何せこのフェン

ル編では由美がメインヒロインだって作者ばやいてましたからっ。そうよね、きつと次の騎士辺りで私達にも出番来るわよね。ええ、きつと来ますよ狩姉ちゃん。

隅っこでいじける二人。完全に某兵長のトラウマモードだ。

握手からスキンシップがハグに進化した男組み。戦闘後なので息が荒れており、ソツチ系な人が見たら

『悟×フェンルキタ

!!』

などと叫びだしそうな光景だ。

抱き合う男二人に、顔を真っ赤にして悶絶するお嬢様。隅っこでいじける幼馴染と妹分。どんなカオス空間なのか。由美に至ってはもう、『悟君の逞しさと包容力はアア、世界ーイイイ!!』と叫びだしそうなテンションだ。

『……………これ何てキャラ崩壊?』

恐らくこの中で唯一普通の男 岡田が、ゲーム機のスピーカーを通して愚痴をこぼした。

「……………悟君とゴールイン……………クスン」

それから数分後、正気を取り戻した狩野によってこのカオス空間は破壊された。むしろ消滅した。由美には拳骨の刑である。

その間に固く男同士の友情を結んだ悟とフェンル。さっきはシス

とロリの魅力について語り合っていた。

「ねえ、その変態二人」

「狩野、さつきから俺達の扱いが酷くね？」

「気のせいよ」

「絶対気のせいじゃねえ！」

ギヤアギヤアと騒ぐ悟と狩野。なんかもう漫才だ。ザ・漫才。目指せM1。

「流石だねえ、あの二人。もう夫婦漫才の領域に達して……ヒイ！」

と、突如由美と久美から発せられた殺気にすくみ上がったフェンル。おい、それでも断罪の騎士かよ。

断罪するどころか、逆にヒロイン二人に裁かれかけるフェンル。

痴話げんかが続ける悟と狩野。事態が全く進歩していない。

このダラダラとした空間の中、ついに作者が次回へ丸投げするかわれられた次の瞬間！

『マスター。そろそろシリアスパートに移行してください』

場を治めるが如く、機械的な少女の声が辺りに響いた！

まさしくザ・ワード！ 時が止まった！

おい今の誰だよ知るかあたしに聞くな悟君の裏声とか由美俺は機械じゃないお兄ちゃんならできると俺を何だと思ってやがる確かに君ならできそうだと黙れシスコン。

一同が混乱から脱出すると同時、全員の視線が一点に集中。そこに、あったのは最早何でもありなアイテム 携帯ゲーム機。

『マスター、間もなく作者の親が限界を迎えます。PCが強制シャットダウンされる前にフェンル編を終わらせて下さい』

「おい、メタにも程があるだろ！」

例え相手が機械でも全力でツツコム。それが岡崎悟。

『御機嫌ようマスター。私は岡田様の手により創られた人口AI、『ソア』です』

「ソア……？ 何ですかそれ？」

フェンルが疑問の声を上げる。他の者達も同じような反応。けれども その中で、たった一人だけ。

岡崎悟のみ、顔を青ざめさせていた。

「おい、ソア」

『なんでしようマスター？』

「ソアの由来は？」

「『SOAA』というアルファベットの並びをローマ字読みしたものの、と伺っておりますが」

確定。

岡田は。

(『SOAA』を、『空間演算分析能力』を 知っている)

内心舌打ちをしながら、悟はゲーム機を拾い上げた。

「んでソア、マスターってもしや俺？」

『もしまでも正也まこやでもなく、貴方です』

「正也って誰？」

『さあ？』

「俺に投げるな！」

ゲーム機と口論を始める主人公。実にシユールな光景である。

「……由美」

「どうしたの？ 兄さん」

「君が惚れた男は、ロリコンでありAI萌えでもあるのかい？」

「……否定しないわ」

顔を見合わせ、嘔き出す二人。

それはまるで、というよりまさに、仲の良い兄妹で。

けれど。

「……兄さん」

「どうしたんだい？ 由美」

「私は今、貴方を殺したい。殺し尽くしたい」

「……だろっね」

「貴方は私の家族を戦いに巻き込んで、殺した」

数年前、たった一人の暗殺者が、断罪会に牙を剥いた。

後に『狂戦士の反逆』と呼ばれるその復讐劇によって、断罪会は多大な被害を被った。5人居た断罪の騎士は2人殺され、断罪者も67名殺害された。さらに断罪姫も重傷を負い、姫の役を降ろされるほどの傷となった。

その戦いの中、当時断罪の騎士であったファンル・F・アライトとフェンル・F・アライトは、自宅に戻ったところを急襲され。

屋敷内での銃激戦の末、真下家の使用人や当人らの多くが殺害され、ファンル・F・アライトことファンル・F・真下もまた射殺された。

「もう二度と私を戦いに巻き込まないでって言ったのに、ね」

「……ごめんね、こんなダメな兄で」

由美は答えない。口も開かなければ、頷きもしない。

ただ無言で、フェンルの手から零れ落ちた拳銃 『S & a m p ;

W M 6 0』を拾い上げて。

迷うことなく、銃口を兄、フェンルに向けた。

「由美姉ちゃん!？」

「……由美？」

「つたく、あの馬鹿」

「マスター？」

周囲がざわめく中、悟だけは軽い舌打ちをする。

「 最後の一つだけ」

「 何だい？」

「 大好きだからね、お兄ちゃん」

刹那、銃声。

地面に滴る血と、安らかな笑顔の兄。

泣き叫ぶ妹は、その兄にしがみつく。

俺にできたことは、彼女を後ろから、そつと抱き締めることだつた。

28・銃声、結末と絆と新たな仲間（後書き）

今回登場したA I、ソア。実は当初は登場予定なしの女の子でした。それが何故か登場。どっから来たのYOU？

29・時は平成、四国にての騒乱の巻（前書き）

やたらと長いサブタイトルですいません！

今回からはこのくらいの長さなので、ご理解お願いします！

……本編は短いけど（汗）

このまま戦国モノに突入なんてなったら、俺泣くよ!?

「お兄ちゃん、このお団子おいしいですっ」

「そーかそーか」

満面の笑みの久美。ああ、思わず頭を撫でてしまっただけではないか。

「えへへっ」

顔を赤らめる久美。くうっ、やはりロリは良いッ!!

で、そのままチョーシこいて撫で続けてたら、狩野にシメられた。マジすんません。

「で、なんで四国なんだ?」

『岡田様からの情報だと、騎士のうち一人がこの地方にいる模様です』

手にしたメタリックブルーのゲーム機が、機械的な女性の声を吐き出す。

俺の前方を歩くは、ブロンドの髪をサラサラストレートに振り舞っている暴力女と茶髪のツインテールお嬢様、最後に黒髪のセミロングな美少女。うん、久美がメインヒロインでいいと思う。

「アレ? あたし達の扱いが違う?」

「私は前回までずっと優遇されてましたから、別に構いませんわ」

「あたしはずっと出番がねえんだよおっ!」

「ずっとそのキャラ付けなのでは? 事あるごとにイジってもらえるので、割とオイシイ位置ですよ?」

「あたしがメインヒロインだろおがあああああああああ
あー！」

……なんか可哀想になってきたので、ここらで狩野にも絡もう。

「おい狩n」

ズガツシャーン！！ ベキベキツ！！ ドツゴーン！！

……解説すれば、俺の左から突っ込んできたトラックが路上で乗
用車と衝突、車道を外れて歩道の電信柱やら街路樹やらを巻き込み
ながらビルへと突っ込みました。

狩野達は俺がまとめて突き飛ばし、ロウシエが見事キャッチした。

けれど。

俺の頭上から降りかかる、コンクリートの雨嵐。

彼女たちを突き飛ばして、体制が崩れている今 俺は無力な一

般市民。

あ、死んだ。

およそ主役とは思えない死に方だけど まあ。

瓦礫の向こうに見える、彼女達の顔。まるで訳が分からないって
表情をしている。

彼女達が生きてるなら、良いかもな。

「！！」

誰かの声が、聞こえた気がした。

体が引つ張られる。

後頭部に強い衝撃。

俺の意識は、闇へと堕ちていった。

30・四国は廃工場、主役と侍出会うの巻（前書き）

久々の更新です。

しかし、テストが近いため次の更新はさらに遅れます……（汗）
なんで俺、新連載なんて始めちゃったんだろ……

30・四国は廃工場、主役と侍出会うの巻

眼が覚める。

見上げるは、知らない天井。

「あー……知らない天井だ」

「最早定番のセリフじゃな」

視線を巡らせると 俺の顔を覗き込む男が一人。いや、男っていうより俺と同じ年ぐらいだ。

髪は黒くて、肩にかかるぐらいの長さをポニーテール……いや、どっちかていうとチョンマゲみたいに一つに束ねていた。顔立ちは整っており、『美少年』という言葉がしっくりくる。肌は若干小麦色に焼けて、健康的だ。

服装は和風の着物っぽい。どうやら着物を改造して外套風になっているらしい。

「大丈夫か？ わしがあそこを通らなければ、お主は黄泉に召されておったぞ」

「まあ、それはそれで一区切りついてたと思うけど……っていうか、えっと」

その、なんだ。話し方が妙に武士っぽいというか。

この場合、一概にキガイとは言えないけれどさ、なんと反応すればよいのか……

「時にお主」

「はい？」

どうやら公園のベンチらしいところで、俺は上体だけを起こす。

「名はなんと申すか？」

「名……千神木剣だ」せんかみきのつるぎ

「そうか。わしは渡斬士郎」わたりざんしろう

こういうときは偽名を名乗るのが鉄則。ん？ どうかで聞いたことのある名前だつて？ ……禁則事項です

「それでお主、なぜにあのような所におつた」

「や、車が出つ込んできたからじゃんか。お前も見えてる？」

なんとなく、タメ口で喋る俺。

兎にも角にも、狩野達と合流したほうが良さそうだ。

「それでお主、少し頼みがあるのじゃが」

「何だ？ 命の恩人だし、少しなら聞いてもいいぞ」

「あやつらと殺し合つてはくれんか？」

……………は？

「それでは後は任せたぞ、『鮮血の狂戦士』よ」

「いや、ちよつと待てつてオイ!？」

男は地面を蹴り 空中高くに跳んだ！

オイオイ、10メートルぐらいの段差を飛び越えてるぞ!？

……………段差？

ふと辺りを見渡す。間違いなくごく普通の廃工場　廃工場！？

「って何処だよここオオオオ！！」

俺の絶叫は、廃工場の中に響き渡った。

「だあぁっ！　畜生、なんでこんなあぁっ！！」

手にした拳銃を発砲、視界の隅で倒れる男を視認。

「なんなんだよお前ら！」

動きからして、断罪者ではない。プロではなく、まだアマチュアレベルの腕前。

「……………？」

ふと、全員の動きが止まった。

そして、俺と男達の間、割り込むように現れた黒い影。

「！！」

それは、渡斬士郎だった。

「うおおおっ！」

男の一人が発砲、続けざまに他の男達も次々と引き金を引く。
しかし渡は、ただその手で剣の柄を持ち

柄？

よく見れば、あいつは日本刀を腰に差していた。

「まさか!？」

刹那

銃弾が裂けた。否、斬られた。

「たかが劣化ウランで、この『天原導尊』あまはらみづのみにてに勝てる……本気で思
ったわけではあるまいな？」

目にも留まらぬスピードで敵に肉薄、殺断。首が宙を舞う。
殺断、殺断、殺断。首が舞う、舞う、舞う。

あっという間に、廃工場を沈黙が包んだ。

「デメエ……」

物陰から渡の前に姿をさらし、その目を睨みつける。

「中々よい戦い方じゃったぞ、『鮮血の狂戦士』殿よ。敵ながら天
晴れじゃ」

俺はその言葉に視線をキツくし、口を開いた。

「なんでデメエが俺を助けた……『首取り屋』……ッ！」

そうして俺は、二人目の『騎士』と出会った。

31・主人公は半最強、新たな力の巻（前書き）

久々の更新となりました！

騎士だよね・・・？ 騎士のはずなんだけど・・・なんで日本刀？

31 主人公は半最強、新たな力の巻

今、俺と渡斬士郎の距離は約5メートル。

全力で踏み込めば、たった一步で肉薄できる。いや、近距離戦持ち込まれたら俺死ぬけど。

俺は拳銃を握り締め、目の前の男を睨む。

しかし渡は気にもせず、ただ笑みを浮かべながら俺を見やるだけ。

「……………ツツ！」

バックステップで距離を取る。俺の前髪が、数本地面に落ちた。

こいつ、強い。

普通、攻撃には予備動作がある。パンチする時は一旦腕を引くし、剣を振るときは振りかぶる。どんなに速くアクションを起こそうとも、それすら読みきれれば普通攻撃は当たらないものだ。

しかし、こいつにはそれがない。

つまり、攻撃を先読みすることができない。

「 だあつ、それなんてチートだよ！ どっかの最強主人公じゃねえか！」

思わず悪態をつきながら、俺は横へと転がり込んだ。しかし右の肩を浅く切られる。

起き上がった瞬間、地を蹴ってこちらへと迫る渡。どこだ！？どこから来る！？ 上か右か左か

「言っておく、ワシの剣をここまで避けたのはお主が初めてじゃ…
…誇れ」

瞬間、岡崎悟の左目が、黒く濁った。

下ッ!!!?

下方から、地面とほぼ垂直に切っ先が喉へと迫る。

そしてそれが俺の首を、切断した。

首が宙を舞　　わない。

剣はまだ振られちゃいなかった。

同じように下方から迫る刃を反射的に避け、俺は慌てて後ろへと距離をとった。

待て！

ちょっと待て、岡崎悟！

お前は今、何を見た！？

確かに俺は、俺自身が切られるところを見た。

まるで、未来のように。

まさか……マジ、かよ。

「ッ、今のを避けるとは思わなかったぞ……噂以上じゃな！」

そう言い、渡は斬撃の速度をさらに上げた。

しかし、斬られたと思ってても実際には斬られていない。それどころか、それが数秒遅れてやってくるのだ。

それを十回は繰り返し返しただろうか。俺は既に、その正体がかかっていった。

極限の集中力が、時間という概念を崩しただけ。

単に言えば『先読み』である。相手が打つ次の一手を見切る。

「……………ッ！」

俺の体を両断するように振り下ろされた剣を、俺は服の袖に仕込んだダガーを当て逸らした。

一歩間違えば腕が飛ぶが、刀を振り下ろした渡の姿は無防備極まりない。

瞬間、確かに俺の脳裏に、俺がダガーを渡の胸に突き立てるビジョンが『見えた』。

「これで、お、わ、……………？」

だけど、瞬間、頭の奥がスパークする。電流が体の隅々を走り、全身の神経を殺した。呼吸が止まり、視界がチカチカと点滅する。

「……………？」

突然動きを止めた俺を、訝しげに見る渡。

……………な、んで……………もうすぐなのに……………！

畜生がつ！！

岡崎悟の左目が、再び赤く染まる。そこに、先ほどのようなドス

黒さはない。

そしてそのまま、岡崎はその場で崩れ落ちた。

廃工場より50メートルほど離れた所で、彼女はソレを見ていた。黒く染まった瞳を見、風にそよぐ青い髪を気にもせず、ただその戦いを見つめる。

「……予想より、早い」

まるで事務報告のように平坦に、そして一切の感情も感傷も交えず、彼女は呟いた。

「『TYPE - 06』、利用価値は十二分」

31・主人公は半最強、新たな力の巻（後書き）

ああ・・・主人公がまた、強くなっていく・・・

この先読み能力の名前を募集します！

一応考えはあるのですが、ハッキリ言ってダサいので皆さんお願い
します！

32・明日を紡ぐ意思、未来を読む力の巻

……目覚めない。

目覚めない。目覚めない、目覚めない目覚めない目覚めない目覚めない目覚めない。

どうしてなのか、自分でもわからなかった。
なぜ今、自分は血の海に沈んでいるのか。

……悪夢から、目覚めない。目覚められない。

ゆっくり廻って廻って廻って、血の海が混ざって混ざって混ざって。
て。

何だ、これは。

言葉を失くした亡霊達が、過去に置いてきた死人達が、揃いも揃ってこちらへと手招きをする。

骸骨だけの者もいた。腕がない奴などは、首を使ってこっちに来いと言っていた。

何だ、お前達は。

瞬間、左目に激痛が走った。

思わず左目を押さえ、そして気づいた。

左目から、液体が流れ出ていることに、けれどそれは涙なんかじゃない。

……血だ。血の涙だ。

悲しい、どうしてこんな所にいるのか。悔しい、亡霊達の声が聞けないのが。

知り合いがたくさんいる。無事な奴は誰一人としていやしない。片腕のない者、顔がごっそり半分削り取られている者、胴体が半分千切れ飛んでいる者。

そこは、地獄でしかなかった。

誰もが口をパクパクと開き、何かを訴えかけている。まるで助けを求めているかのように。

生きる者が死した者にできることは、その誇りを汚さないことのみ。

そうだよな　と、俺は呟きながら、腰のホルスターから拳銃を引き抜いた。

そしてそれを、躊躇なく目の前の偽者達に突きつける。ふざけるな。

あいつらは、俺の知るあいつらは、死んでも、無様に助けを求めなどしない。

「黙ってるよ、偽者共が」

引き金を引き絞る。左目からは血が流れ続ける。

これは、決して涙なんかじゃない

「……何だそりゃ」

っていう夢を見た。ははっ、俺も末期だな。何の症状か知らんが見たこともないような豪華な布団の中で、俺は腕を組み天井を見上げる。

最近何か、体に悪いもん食ったかなあ……？ いや、この夢は何かの中毒症状か。問題は何の中毒かだが……アレかつ！？ 最近狩野達に隠れてやっていたギャルゲのせいかつ！？ ならば摂取量を増やさねばなるまい……岡田のところまで、新しくソフトを3本ほど仕入れよう。メーカーはやはりAQU PLUSか、AR Aだな。ぐふふ……待つてるよヒロイン共よ！ フハハハハハハ！！

『マスター……何を考えているかは知りませんが、お顔が凄いことになっていきますよ』

と、布団の横から場違いなほど冷たい声が聞こえた。ああ、携帯ゲーム機に搭載された人工AIの『ソア』だ。

「ようソア、気分はどうだ？」

『久々に出番があったと思ったら、一番に見たのがマスターのニヤけ顔だったので気分が悪いです。胸焼けがします。吐きそうです』

酷い言われようだ。

こいつ、持ち主を敬う気はないらしい。

「そうか。折角AI萌えに目覚めかけていたのにな」

『それは良かった。むしろ目覚めないでください、未来永劫にその感情を封印してください』

……あれか。これがツンデレというやつか。

『というかアレです。狩野さん達三人組をすでにオトしておきながら、まだハーレム要員が足りないんですか？』

「違う！ 断じて否！」

俺が俺の意思でオトしたのは、由美だけだっ！

まあ、ソアにちょっとかいをかけているのは若干おふざけみたいなもんだから、もうちょっと大胆に攻めてみようか。

「ところでソア」

『……何ですか？』

うんざりしたように、ソアが声を上げる。

「お前って、声キレイだよな」

『 なッ！？ 』

明らかなほどの狼狽。

って、え？ マジ？

ちよっと増長する俺。もうちよっと褒めてみよう、褒めちぎろう！

数分後。

『はっあっあ〜』

……調子に乗りすぎた。ソアの声がすごいことになっています。すんごい艶がかかっています。本当にありがとっございました。

どうも製作されて間もなかったせいか、彼女はかなり初心だ。ちよつと褒められただけですぐに赤面(?)していた。しっかし、なんだこのデレっぶり。おい、さっきまでの俺よくまあやってくれたなクソ野郎!

「お、目覚めたのじゃな」

と、部屋の扉が開き、髪を下ろした渡斬士郎わたざんしろうが入ってきた。

……………ん?

『あ、渡さん。マスター、助けてもらったのですから感謝しましょ』

「ソア、そういえばお前四国に来てっから電源落としてたっけ……じゃあ知るはずない、か!」

と、俺は懐に手を突っ込み拳銃を取り出そうとして 服が変わっていることに気づいた。チッ、武装は無しかッ!

「そう怖い顔をするでない。ワシはもうお主と戦う気などないのじや」

ハイ? イマ、ナントオツシヤイマシタカ?

「って、待てや渡。お前、断罪の騎士だろうが」

「だからどうしたのじゃ?」

不思議そうに首を傾げる渡。か、可愛 おおっと! よせよ岡崎悟! お前にBL趣味はないだろうに!

『って、渡さん断罪の騎士だったんですか!?!』

驚いたように声を上げるソア。まあ、驚くのも無理ないけどさ。

「しばしすれば、ワシらは旅立つぞ。お主の仲間のもとへな」

少し笑って、渡は部屋の外に出た。……アレ？ 主導権握られっぱなしだった気がする。

『マスター、騎士には変わった方が多いのですか？』

シスコンハードボイルドの次は、美少年侍。やべえ、この上なくカオスだ。他にはどんな人が居るのだろうか。……思い出せるのは、黒いフード被った変な男。

爽やかイケメン君 『若鷹』は俺がこの手で殺したし、もう一人、やたらと猫を可愛がってたあの女の子、確か名前は

バギン！

割れる、割れる、頭が割れる……！

思い出すなと言わんばかりに襲い来る、激しい頭痛……！

「うあ、っ……！ 脳が、侵される……！」

やめろ、思い出すな……！

彼女は彼女は思い出してはいけない思い出すわけにはいかない……

……！

「ク、ソっ……何だよ、この感覚……！ あああっ……！」

人生の中で最低最悪の頭痛。そしてそれがじわじわと脳の中枢部に侵食し、そして

「あ、があああっ!!」

記憶が封じられる、記憶が沈められる。

二度と出てこないよう、黒い沼の底へと。深く、深く、沈められていく……

『マスター?』

ソアの声に、俺はハツとした。

どうやら思考に沈んでいたらしい。けど、なんか大切なこと忘れてる気が……まあ、忘れてるってことはそこまで大事じゃねえんだろ。

『……それとマスター、一体私が寝ている間に何をしたんですか?』
「は? あー、えっと……」

あの、未来の『先読み』について言うかわらないか、少し悩んだ。ソアに話せば何か解るかもしれないけど、信じてもらえるか。

『マスター………言ってください』

けれど、ソアはそんなに悩む時間をくれなかった。

地の底に響くような、低い声。まるでそれは 激怒した狩野みたいで。

「……何を怒ってるんだよ？」
『……コレ、見てください』

ゲーム機のモニターに何かが映った。それは人間の血流量や脈拍、そして脳の状態などを正確に記録した生体情報^{バイタルデータ}。

「……な、んだ、コレ」

けれど、ソレは完全におかしかった。

脈拍は異常なんてものを遥かに超え、一体どれほどの負担を体にかけているか想像もできない。

脳に至っては、使用率100%というハッキリいっておかしな数値が計測されている。

「おい、これってまさか……」

思い当たるフシがあった。

あの時の『先読み』。

まさか。

『これは……貴方の、バイタルデータです……』

目の前が真っ暗になった。そんな錯覚に陥った。

『貴方は、これでもまだ、戦い続けるんですか……？』

答え、られなかった。

未来を紡ぐ意思は、未だ出来上がっちゃいなかった。

32・明日を紡ぐ意思、未来を読む力の巻（後書き）

やっと……主人公能力制限フラグが立ったぜ……！
だがしかし、悟君ならおかまいなしに使っちゃうんだろ……だ
って主役バカだし。

騎士さぁーん！ あのバカを連れ戻してえー！

33・あー・ゆー・はっぴー？ の巻（前書き）

久々です。今回、渡君との話は展開が大分速いです。

……ああ、これってガンアクションなのかラブコメなのか時々分かんなくなるなあ……

はくれんかの？」

確かに、公共の場（野外公園）でこれ以上宇宙に飛ばされてもその内NASAとかに感づかれるだろう。……なんか根本的に間違ってる気がするけど。

「まったく、その、あれだぞ……別に、心配なんか……してないんだからな……」

少し照れてるのが、顔を赤くしてもじもじと呟く狩野。

「ふむ、これが巷で噂の、『つんでれ』という奴か」

「ああ。可愛いだろ？」

興味深そうに狩野を見つめる渡。俺は奴の肩に手をポンと置くと、歯をキラんと光らせながらサムスアップした。

「……申し訳ないが、ワシの好みではないな」

「ガーン！」

「悟君、擬音が口から出てる」

くっ、この可愛さが分からんとは……『首取り屋』も墮ちたものだな！

『はいマスター、コントはその辺にしておきましょう』

「そうだな……ソア、岡田とは連絡つくか？」

思考をシリアスモードに切り替え、俺は表情を改める。と、突然狩野ら三人娘がボーッと俺のほうを見てきた。

「やっぱり、普段ふざけてる奴が急にキリッとする……クルよねえ……」

「うん、そうね……」

「狩姉ちゃんに同意です……」

クルって……何が？

『マスター、岡田様は現在就寝中です』

「叩き起こせ」

『無理です、私人間じゃないですから』

「チッ、こんなところでAIの弊害がッ！」

まったく、こんな時に寝ているとは岡田も間の悪い奴だ。

「そうじゃ、岡崎よ」

「ん？……どうかした、のか？」

念のため、渡と狩野達の間を割り込ませながら、俺は正面から渡を睨みつけた。

場の空気が変わり、身も凍るような殺気のやり取りが始まった。

「何じゃ、急に警戒なぞしおって」

「それで、俺達をどうするつもりだ？」

「どうするも何も……ここで出会ったのも何かの縁じゃろつと思つての」

「質問に答える……俺達をどうするつもりだ？」

声の中に、一般人でさえも気づけるほどドス黒い殺意を混ぜた。渡は一瞬だけ眼を細めたが、すぐに口元を歪める。

「……流石は、『鮮血の狂戦士』」
「……ッ?!?!?!」

と、渡が突然俺の通り名を口にする。これでこいつも非日常側だつてのが狩野達にも分かっただろう。

「……それで、渡さん。縁だと思って、マスター達になにをしようとしたのですか?」

「ははは、機械の女子にも好かれておるとは、岡崎悟とは真に面白い男じゃのう」

「テメエの戯言に付き合ってる暇はねえんだよ。さつさと『グウ』……さつさと、テメエの『グウ』………………テメエの目的をばな『グウ』」

人がシリアスモードに移行していたというのに、後ろの三人娘は揃いも揃って、順々にお腹の音を鳴らしてくれやがりました。ナイスギャグアシストです。本当にありがとうございます。赤面する狩野達。けれども空気は緩んだまま戻らない。

「……とりあえず、コンビニにでも行くかの……?」
「…………はい」

なぜだろう、俺と渡って友達になれるかもしれない、そう思えた。

「狩野、もうメシはいいのか?」
「ちよつと、今話しかけないで」

雑誌コーナーで大マジに週刊ジャプを立ち読みする狩野。足元には栄養ブロック食が二つ入っているカゴがあるだけ。

……コイツ、コンビニなめてんのか……!?

「狩野、お前が買っちゃ俺が決めとくから」

「ん？ ああ」

そんなに死神代行のアクションバトルが見たいか。そうかそうか。上等だ。

まずは、その（コンビニ＝栄養食っていう）幻想からブチ殺す……！

数分後。

「悟、これ本当にコンビニで買ったの……?」

「全て、コンビニだ」

呆然とレジ袋を見る狩野。中にはサンドウィッチやおにぎりは勿論、菓子パンにアイスまで入っている。

「負けたわ……コンビニの予想外なレパートリーの豊富さに敗北したわ……」

公園で膝を突く狩野。端から見ている怪しいことこの上ない。

「なあ渡、ここで食うのもなんだしさ」

「む、近場に良き食場などあったかのう?」

「お前の家にながらせる」

「図々しすぎるじゃろ!」

結論：渡家にゴー！

「……何故じゃろう、ワシだけひどく置いて行かれておる気がするのじゃが……」

「気にしないでください、久美は気にしませんっ」

渡家。

そこは某シスコン騎士の住んでいたセンスの悪い豪邸などではなく、由緒正しい和風の屋敷だった。

広さはちょうど、うちの学校の総面積ぐらいだろうか。うん、馬鹿みたいに広い。

「おい渡、断罪の騎士って皆、家広いのか？」

渡が断罪の騎士だということは、俺とソア以外知らない。よって必然的に小声になってしまう。

「何を言うか。『氷結の鉄』は廃工場に住んでおるし、後の二人は何処に住んでおるか誰も知らんぞ」

「あっさり情報漏えいしたなお前！」

断罪会って、なんか凄いのか凄くないのか時々分かんなくなる。

「あ、渡さん、この家には一人で住んでらっしゃるんですか？」

「うむ、いかにも」

由美に対して、厳格に頷く渡。……ただ、美少年がそれをしても絵にならない。むしろ『こめでいちっく』。

「何故じゃろう。今、隣に居るお主を無性に『天原導尊』の錆にし
たくなつたのじゃが……」
「冗談になつてねえ!？」

ばっちり居合いの構えをとる渡。ああ、俺の生涯はこんなコメデ
イシーンで終わるのか。

『グウ』×3

「……………(俺)」
「……………(渡)」
「……………(狩野)」
「……………(由美)」
「……………(久美)」

無言。ただひたすらに、無言。

「……………渡、とりあえず、メシ食おつか」
「……………そうじゃな」

頬を撫でるエアコンの送風が、無性に優しく感じた。

今は午後二時、ユーレイとか出そうな丑三つ時。
はつきり言つて怖いです。うん、だつて真っ暗な空間の中、刀持
った男と二人きりだぞ？

「さて、『鮮血の狂戦士』よ……得物はあるか？」

「……………ああ」

俺は右手に持った白銀のレイピアを、一層強く握り締める。渡からの借り物で、一応近距離での戦闘にも備えての装備だ。

左手にはいつも通り拳銃。銘は『SIG SAUER P250』
といい、シグ社が2004年に発表したオートマチック式の拳銃だ。
……………正直、こんなにカスタムの自由性が高い拳銃は見たことがない。
ちなみに現在は左利き用に改造し、サイズを極力小さめにしてある。これが一番扱いやすい。

「……………お主は戦いに生きておる。して、その人生は幸せか？」

と、唐突に聞かれたその問い。

俺は口元を歪め、レイピアを正眼に構え 全力で駆け出しながら、咆哮した。

「 幸せなわけねえだろオツツ！！」

『鮮血の狂戦士』と『首取り屋』が、交錯した。

33・あー・ゆー・はっぴー？ の巻（後書き）

多分、後2話ぐらいで渡君の話は終わり、かな……？

そろそろファンタジーのほうも更新したいです。

っていうか、現代高校生暗殺者ガンアクションと主人公最強ハーレムファンタジーを並行して執筆する奴なんて居るのか……？

ま、それはそれで、評価・感想お願いします。

34 護りたいモノ、護れなかったモノの巻（前書き）

今回、ようやくSOAAの説明ができます。

まあ、疑問点とかあったらどしどし文句言っちゃってください。

ああ、なんで説明箇所だけえらい淡泊なんだ……

34・護りたいモノ、護れなかったモノの巻

渡家内にある道場で、俺と渡は幾度も交錯していた。

日本刀の斬撃をレイピアで受け流し、即座に弾丸を撃ち込む。その単調な作業の繰り返しを、俺と渡は何度も演じていた。

「して、お主は何故戦う……!?!」

「決まってるんだろ……護りたいモノを、護るためだ……ッ!」

一瞬の隙に、わき腹へ強い打撃。どうやら蹴りが入ったらしい。カウンターで肘を顔面に叩き込みつつ、俺は地面へ這いつくばるようにして着地した。

「ならば、その護りたいモノとやらを危険に巻き込んだのは、お主じゃろうに!」

俺が着地間際に放った銃弾を刃で弾きつつ、渡りは叫ぶ。

「この戦いは、元はといえばお主のエゴじゃ! にも関わらず、まだお主は彼女達を巻き込むのか!」

「んなこと……分かってるよ!」

レイピアを真横に一閃、渡ははるか上空へと舞い上がっていた。

「俺はもう失わない、失いたくない!」

『SOAA』の効果で、俺が放つ銃弾の軌跡が鮮明に見える。それを利用し、俺は劣化ウラン弾を多方向から撃ちこんだ!

しかし渡はそれらをおろそかと切り落とし、拳銃の果てには鞘を

それ以上は、俺が、ユルサナイ　！

左目が黒く濁る。

俺は迷うことなく、それを解除した。

『 U n l o c k 』

俺は、俺は俺は俺は俺は俺は　！　彼女を、護りきれなかった！！

優子をつ、護り、きれなかった！

「ッ！？」

俺はレイピアを振りかぶり　地面に叩き付けた。視界の隅で、渡が驚いたように動きを止めるが、俺は構うことなく行為を続行する。

『見える』、レイピアの破片が地面から壁に当たり、そして渡へと吸い込まれていくのが。

その隙に、俺はレイピアを片手に持ち替え、もう片手で弾入りのマガジンを空中に放り投げる。そしてそれを直に拳銃に装填する。

……ぶっちゃけ、どこの大道芸人だと自分にツッコミたい。

「なっ、お主のそれはどこまで計算できるのじゃ！？」

驚きの声を上げる渡。

『SOAA (Space Operation Analysis Ability)』 和訳、空間演算分析能力。

視界内での物理現象に関するあらゆる数学的演算を、瞬時に行うことが可能な能力^{スキル}。

とって目から得られる情報 例えば速さとか大きさとかで、重さは目じゃ量れない のみで演算を行うため、演算を行う場合はあらかじめ重さなどを把握しておく必要がある。

俺は劣化ウラン弾の重さをあらかじめ頭に叩き込んでいるので、壁を使った反射などを自在に計算している。

つまり、兆弾を操っているのではなく、計算しているだけなのだ。その代償として、目に極端な負担をかけるため、非常に多くの血液を必要とし 眼が赤く染まっているのだが。

そしてもちろん、その演算は銃弾限定ではない。

砕いた刃の欠片、それらが渡を襲う！

上から下から右から左から斜め上から斜め下から斜め横から !

「……三秒やる、祈りを済ませろ」

俺はそう呟き、すでに刀身がないといって差し支えないレイピアを 投げた。

それは見事に渡の顔面にクリティカルヒット。動きの止まったところに、俺は銃口を定め。

「 分かってるよ、これがただの八つ当たりだってことぐらい…」

…」

銃声が、響いた。

「…………結局俺は、『現実』より『未来』より…………過去を優先する男なんだ…………」

寂しげな弦きは、続く二発、三発目の銃声に掻き消された。

34・護りたいモノ、護れなかったモノの巻（後書き）

次回で渡編は終了です。

そしてついに、断罪の騎士3人目……まさかの攻略対象！？
てな感じで、次回にもご期待ください！

……二行目のコレって、ネタバレなんだろうか……（汗）

35・それはおおきくて、ちっぽけで（前書き）

散々更新を滞らせた結果が、ご覧の有様だよ！

……見捨てずに、お付き合いください（泣）

35・それはおおきくて、ちっぽけで

俺、は……何をしている？

ついさっき、俺は確かに渡斬士郎と戦い、確かに、勝利した。けれど、ここは何処だ？ 渡家の道場じゃない。

視界一杯に広がる、広大な草原。

その中央に、俺は独り、佇んでいた。

忘れるわけ、ない。

ここは、約束の地。

「あ、ああ……」

思わず声が出た。その場に膝を着く。

そつだ。ここは。あの日。あいつと。約束。した。場所。

「……君、どうかしたの？」

背後から聞こえた声に、俺はゆっくりと振り返って

、
……………？

「どつしたの？ ここ、寒いでしょ。ほら、着いて来て。』
が案内してあげるから……」

』

俺は夢見心地のまま、そこに立つ一人の少女へと近づく。

そして手を、彼女の頬に当てた。

「暖かい……」

「当たり前じゃない、」 『』は生きてるもの」

ああ、生きてる……！ 生きてるんだ、 『』は……！

～それはおおきくて、ちっぽけで～

～それはあたたかくて、つめたくて～

～きつと『しあわせなけつまつ』をゆめみてた、おとこのこのおはなし～

ひとまずは現状把握だ。

ここは草原。俺は身長が低くなっていて、丁度14歳ごろの体つきだ。

オーライ。状況は読めたぜ。どこのタイムトリッパーだ俺は。

「……どうかした？」

「ああ、なんでもないよ」

さつき手鏡を借りて確認したが、眼球は右目しか赤く染まっていなかった。といっても、ぶっちゃんけ赤目が両目になったからってそこまでSOAAが強化されたわけじゃないし、片目でもいいだろ。

今俺は少女の横を歩いており、彼女とは特に会話もなしに進んでいる。

ああ、くっそ。もう限界。

俺はその場で、突然立ち止まった。

「……どうか、し、た……!？」

訝しげに振り向く彼女。俺は彼女の両肩を掴むと、思いつき引き寄せた。

彼女の顔が俺の胸に当たる。頭のどこかで、身長差大きすぎだとツツコンだ。

「……名前」

「え？」

呆けたように、少女は下から俺の顔を覗き込む。

俺は彼女を力強く握り締め、震える声で、か細く、呟いた。

「……名前」

少女は少し首を捻って、数秒後に頭の上に電球マークを浮かべた、効果音は、「ピコーン!」辺りだろう。

彼女は少し微笑んで、優しく、柔らかく、暖かに。

告げた。

「ありみやゆうこ
有宮優子」

35・それはおおきくて、ちっぽけで（後書き）

困った。

主役が何考えてんのか分からないという致命的な状態。
というわけで、整理してみました！

? 悟 狩野

「絶対死なせたくない、大切な人」

? 悟 由美

「付き合って。むしろ結婚して」

? 悟 久美

「極上の癒し」

? 悟 恵美

「????」

? 悟 優子

「????」

表を見て、今更ながら気づいた。

ヒロイン多くね？

もし疑問とか文句とかあったらバンバン言っちゃってください。お
願います。

36・それはあたたかくて、つめたくて（前書き）

久々の更新です。主人公がタイムスリップって、正直難しい……

36・それはあたたかくて、つめたくて

優子に連れられ、俺はとある建物に入った。

外見は、年季の入ったアパート。早い話、ボロイ。

広さは、まあ1Kだろう。二人が入るスペースじゃない。

「……ご飯、作ってくる」

そう言っつて優子は、キッチンへと向かった。

俺はその後姿をすっかり脳内メモリーに保存しつつ、今現在の状況を整理する。

さきほど優子に確認したが、やはり俺は過去に戻っていた。

高校2年から中学2年に逆戻りだ。これって何て逆行小説？

渡との戦いは、恐らく俺の勝利　でいいのだろう。

俺は気を失ったわけでもなく、謎の光に包まれたわけでもなく、何故か気づけば過去こくごにいた。

なんてご都合主義。

けれど、これはこれで都合がいい。

未来を変えることができる。その甘美な誘惑。

変えられる、あんな悲劇、無くせる。救いの無い物語を、リセットできる。

違つな。リセットできるんじゃない。リセットするんだ。

俺は決意を固めると、ふと懐に手を伸ばした。

顔を引き攣らせながら、俺は目の前の男と対峙する。

「……始めましてだな、鮮血の狂戦士」

「……ああ、始めましてだ、断罪皇帝」

不敵に笑みを浮かべる、赤髪の男、断罪皇帝は俺の身体をじっくりと見ると、なぜか嘆息して後ろの玉座に座った。

ちなみにここは断罪会の本部。俺からすれば『旧』本部なのだが。

「ああ、ファンルか？ もう戻ってきていいよ」

無線機に何やら喋る皇帝。どうやら、さっき俺を狙撃したのは『若鷹』ことファンル・F・アールライトらしい。一体どこから撃ってきたのか、皆目検討もつかん。

俺は隣の優子を見やる。

『大丈夫なのか？ 俺みたいなのを連れてきて』

『優子を信じて。大丈夫だよ………多分』

『最後になんかちよろつと付け加えたよなあ！』

以上、アイコンタクトでした。

流石だぜ断罪の騎士………出会って一日もたっていない相手とアイコンタクトで漫才とは、適応能力が段違ダンチいだ！

『ところで、有宮は俺に何をさせたいんだ？』

『……ん、騎士の試験』

ああ、騎士の試験ね……………待て待て。

まあ落ち着け。落ち着くんだ俺。COOLになれCOOLに。C
OOLCOOLCOOLCOOLCOOLCOOLCOOLKOOKO
LKOOKOOKOOKOOKOOKOOKOOKOOK
OOLKOOKOOKOOKOOKOOKOOKOOKO
LKOOKOOKOOKOOKOOKOOKOOKO
OOLKOOKOOKOOKOOKOOKOOKO
L……………途中から『K』OOLになってんじゃんかバカ！

『……………さつきから、変な電波を感じる……………』

すまん、恐らく発信源は俺だ。

「では『K』OOLな狂戦士君、君にはテストを受けてもらおう」

「さりげなく思考を読むな。……………ん？ テスト？」

テスト……………あれか、学生がよくやる、点数によって内申点やら色んなのが決まるアレ？

「今から1500秒、25分間の間に」

「嘘だっ！」

「何がだよ!？」

後ろから丁寧にツッコンでくれた声。ああ、ファンル・F・アー
ライトか。

俺は小声で「ひぐらし繋がりだ」と言ってみるが、全員首を傾げ
るだけ。

くっ、このネタについてこれるのは俺だけか……………!

「まあともかく。君は25分間に、ある人物を殺してもらいたい」

その言葉に、俺はふつと笑う。記憶が確かなら、この対象はチヨロイ市議会議員だったはず。

「その人物って？」

すると皇帝は口元を歪め、それを言い放った。

「現防衛大臣、朝倉大義あさくらたいぎ」

「……は？」

馬鹿みたいに口を開いてポカンとした俺を、誰が責められよう。

36・それはあたたかくて、つめたくて（後書き）

もうすぐ……過去編が……終わるぜ……

次回はバトル多めです。感想待ってます！

お知らせ

久々の更新となりました。が、大変残念なお知らせとなっております。

このたび、この小説は一旦打ち切りとし、リメイクして新規投稿することになりました。

理由としては、作者の予定とは違う方向に話を暴走させすぎて、收拾がなくなつたことがあげられます。すべて作者の力量不足、ならびに計画性の無さです。

さらに、複数の小説を平行して執筆する、ということが上手くできず、スケジュール調整が噛み合わなかつたことも原因のひとつです。本当に申し訳ありません。

リメイク版も近日中の投稿とは行かず、はっきり言ってしまうればめどが立っていません。

しかしこの小説は作者の初投稿作品ですので、こんな形で終わるのはやはり嫌ですし、なんとかして続けたいという気持ちもあります。なので、できうる限り努力し、リメイク版の執筆に取り掛かりたいと思います。

今まで応援して下さいました皆さん、申し訳ありません。

そして、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046i/>

黒い俺と白い彼女 ～ココロノシキサイ～

2010年10月10日07時21分発行